

56-707・712・713には黒色物質の付着あり。図57-718~721はミニチュアの壺。718は頸部に削り出し突帯十ヘラ描き沈線1条がめぐる。719は頸部と体部にそれぞれヘラ描き沈線が4条施文されている。721は体部にヘラ描きの鋸歯文と羽状文が混在してめぐっており、文様に統一性がない。719の外面には黒色物質の付着あり。図57-722・723は無頸壺Bである。722は残存している限りでみると、体部に削り出し突帯上にヘラ描き沈線2条がめぐり、内外面共にヨコヘラミガキ。細孔は2つ並列して穿孔されている。723のくびれ部には貼り付け突帯が1条めぐる。口縁部には、注ぎ口状に耳形の粘土を2つ貼り付け、それが1対となっている。器壁外面には黒色物質の付着あり。図57-724~732、図58は大型壺である。頸部文様には、削り出し突帯第I種・削り出し突帯第II種小条・ヘラ描き沈線2~4条があり、図57-731のみ沈線帯の下を工具で押さえつけ、段を形成している。調整は基本的に内外面共ヨコヘラミガキであるが、所々に板ナデの痕跡がみられる。図59は壺の頸部破片である。746・755・759・769の外面には黒色物質が、761・763・773の外面には赤色顔料が付着している。貼り付け突帯上に布目圧痕文をもつもの(774・775)も散見できる。各種のヘラ描き文があり、斜格子文(772・779・780)、流水文(776)、山形文(778)、重弧文系(781)、山形の平行斜線文(782・783・787)、平行斜線文(784)、逆転有軸羽状文(785)、綾杉文(786)、重弧文(788・789・790)などがみられる。図60~図64は壺の底部、もしくは体部~底部が残存しているものである。底面のほとんどが平坦であるが、まれに上げ底になっているものがある。図60-817は底部にヘラ描き沈線3条が、図60-825には1条めぐる。図62-882の底面には木葉痕が、図62-883には柳と竹管の圧痕がみられる。図63-905・図64-916の底面には焼成後の穿孔あり。図64-919の底部外面にはヘラ描きの重弧文が2組施文される。図64-922は、頸部に削り出し突帯十ヘラ描き沈線1条がめぐっている。削り出し突帯は、沈線帯の上下をヘラミガキの手法で削って形成したものである。体部のヘラ描き沈線帯は、上下をヘラミガキで消しているか所があり、一見して削り出し突帯であるのか、ヘラ描き沈線帯であるのか判断が難しい。図60-812は赤色顔料が、図60-826・829、図61-838・868、図62-880・884、図63-910・915には黒色物質が付着している。図65~図69-991~1005・1012~1016・1018は壺A、図69-1006は壺B、1017はミニチュアの壺である。壺Aの形態には倒鐘形のものと、やや体部の張るものとがみられる。また、口縁部の屈曲が強いものや弱いものなどがあり、一様ではない。口縁端部には刻み目が有るものと無いものがあり、図68-976は刻み目が2倍めぐる。頸体境には段・削り出し突帯第I種・ヘラ描き沈線1~5条があり、無文のものも存在する。また他文様を組み合わせる例もあり、山形文(図69-1007・1009)、押捺文(1008)、山形の平行斜線文(1010・1011・1013)、円形竹管文(1012・1014・1015・1016)がみられる。図66-950は頸体境にヘラ描き沈線3条がめぐり、その下をハケの工具で押さえつけ、段を形成している。図65-939は体部外面に柳の圧痕あり。体部外面に煤の付着しているものが多い。壺Bである図69-1006は、口縁端部にヘラ描き沈線1条と刻み目がめぐる。図70・図71は壺の底部である。図70-1022・1029~1032・1040・1042・1054・1057・1067・1070、図71-1075の底面に焼成後の穿孔あり。内外面に煤の付着しているものが多い。図72・図73-1112~1114は鉢Bである。無文のものが多数を占めるが、中には頸体境にヘラ描き沈線が2~5条めぐるものや、口縁端部に刻み目のあるものがみられる。あまり明瞭ではないが、図73-1112の頸体境にめぐる沈線帯の上は、ヘラ状の工具で押さえつけている様で、段を形成していると考えられる。図72-1106は器壁に黒色物質が付着している。図73-1115は把手付きの鉢A。1116~1123はミニチュアの鉢で、1116~1121は鉢A・1122は脚台付きの鉢A・1123は鉢Bである。文様は主に無文が多いが、1116や1121にはヘラ描き沈線が数条めぐる。1121の外面には赤色顔料が付

着している。図73-1124はミニチュアの高杯。図73-1125～1142は壺蓋であり、1125・1126は壺蓋A、1129・1130・1134・1135は壺蓋B、1136～1139は壺蓋C、1140～1142は壺蓋D。1136は外面にヘラ描き文が施文されており、破片から文様を推察すると次の様になる。つまり、沈線3条を一単位とした沈線文帯で空間を4つに区画し、中央の環状つまみを囲むように「くの字」状の沈線4条と、その外に蕨手文を4区画に1対づつ配置する。そして、全ての文様を囲む様に1条の沈線が裾に沿って施文される。中央に位置するつまみの極めて近い位置に、紐孔と考えられる穿孔が1つみられた。内外面共にヘラミガキを行う。一見して識別可能な文様を有する壺蓋であったので、同一個体がないか気に留めていたが、それらしい土器片は見あたらなかった。1137は破片資料であり判然としないが、ヘラ描きの木葉文が施文されているものと考えられる。1125・1129・1131・1138には黒色物質の付着あり。図73-1143～1147・図74-1148～1157は甕蓋であり、図73-1143はミニチュアであると考えられる。内外面共に煤の付着した資料が多い。

図74-1158～1173・図75・図76-1199～1203は落込み848北土器群上層出土土器である。図74-1158～1166は壺a2。頸部・体部文様には、削り出し突帯第II種小条・貼り付け突帯1条・削り出し突帯第II種小条・貼り付け突帯1条・乳状突起がある。1167は小型の壺a2であり、口頸部を欠いている。外面全体に赤色顔料が塗布されている。1168は無頸壺B。短く屈曲した口縁に、ラグビーボール形の体部をもつ。内外面共にヨコヘラミガキを行う。外面の体部上半と頸部に黒斑あり。図74-1169～1173・図75-1174～1183は壺の底部である。図75-1175の外面に黒色物質が、1179の外面には煤が付着している。図75-1184～1190は甕Aであり、形態には倒鐘形のものと、やや体部がふくらむものとがある。口縁端部には刻み目が、頸体境にはヘラ描き沈線が2～4条めぐる。1187はヘラ描き沈線帯の間に円形刺突文が施文されている。器壁外面に煤の付着しているものが多い。図75-1191～1198・図76-1199は壺の底部である。図76-1200～1203は鉢B。

図76-1204～1214・図77は落込み848北土器群下層出土土器である。図76-1204～1213は壺a2。頸部文様は、削り出し突帯第II種小条・ヘラ描き沈線小条・貼り付け突帯1条があり、体部文様にはヘラ描き沈線小条・削り出し突帯第I種2帯(1213)がある。1209の口縁部から頸部にかけての一部に樹脂の付着が認められた。図76-1214・図77-1215・1216は大型壺。図77-1217～1235は壺の底部である。図77-1236は甕A。図77-1237～1241は甕の底部であり、器壁内外面に煤の付着しているものが多い。図77-1242は鉢B。図77-1243・1244は甕蓋。

図78-1245～1247は第3面溝889出土土器である。1245・1246は壺a2。1245は頸部にヘラ描き沈線が5条めぐり、外面に黒色物質が付着している。1246は頸部に貼り付け突帯1条が、体部に削り出し突帯十ヘラ描き沈線2条がめぐる。外面全体に黒色物質が付着している。1247は壺の体部破片で、有軸の木葉文あり。区画線は+と×の両方が描かれている。外面に黒色物質が付着。佐原編年第一様式中段階後半～新段階前半に属す。

図78-1248～1251は第3面土坑896出土土器である。1248・1249は壺a2。1248は口縁端部にヘラ描き沈線1条と刻み目をめぐらす。頸部にはヘラ描き沈線が8条残るが、2条目と3条目の間に米粒形の刺突を2つ行っている。1249は頸部のみ残存。削り出し突帯上にヘラ描き沈線5条と3条の2帯をめぐらし、その上から米粒形の刺突を1対で等間隔に行う。内面に黒色物質付着。1250・1251は壺の体部破片。1250は有軸の木葉文が施文され、区画線は+と×の両方がある。1251は削り出しの下にヘラ描き沈線が7条残る。ヘラ描き沈線1～3条間に米粒形の刺突を行う。前期後半に属す。

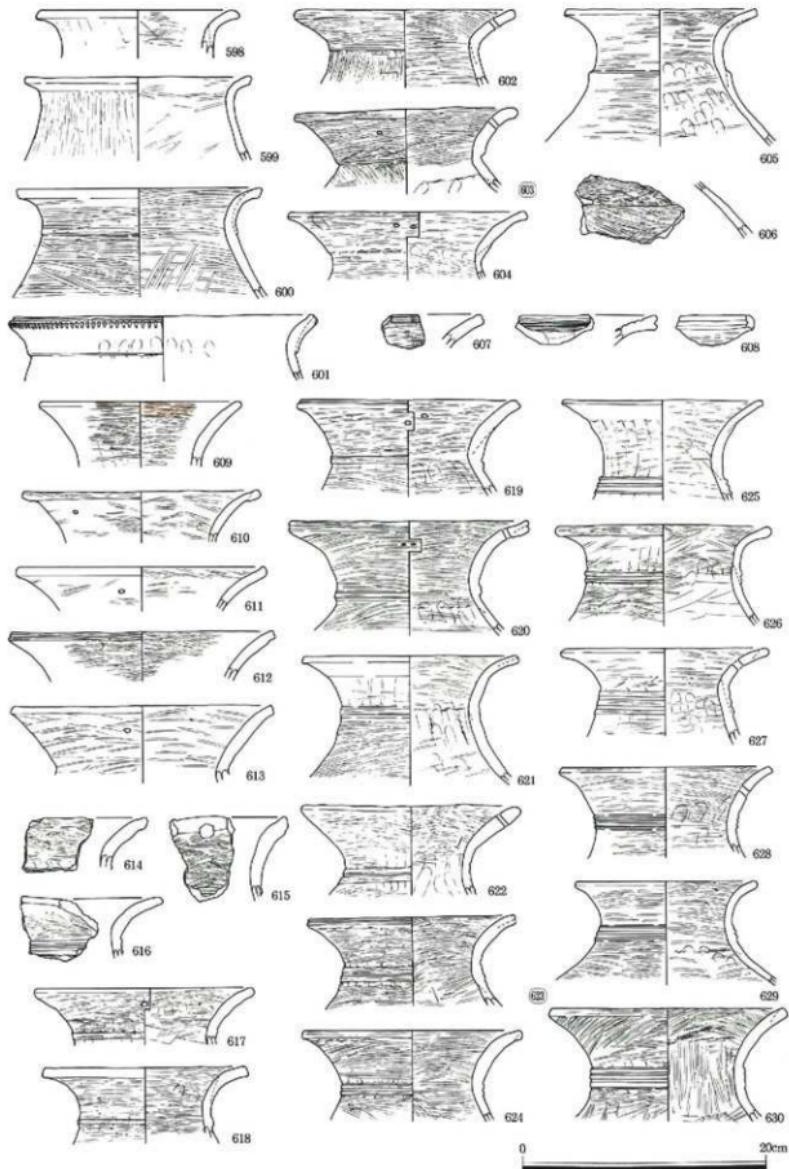


図51 95-2区 第3面落込み848出土弥生土器1

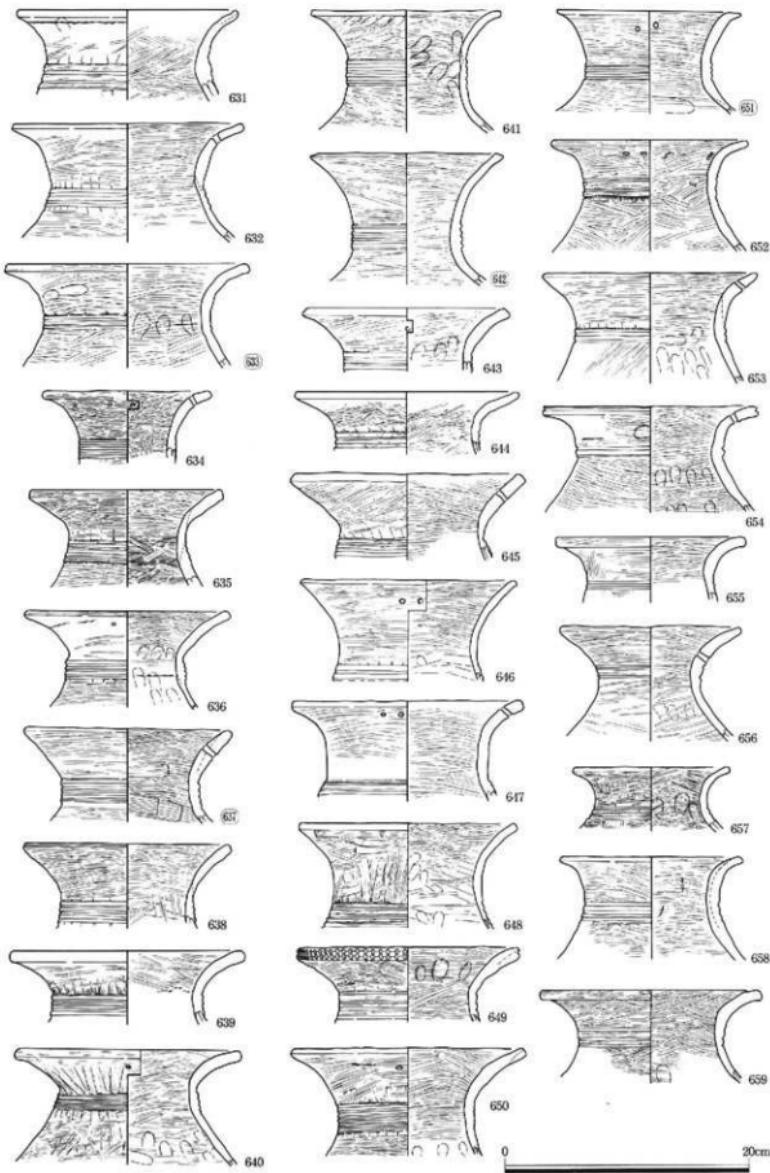


図52 95-2区 第3面落込み848出土弥生土器2

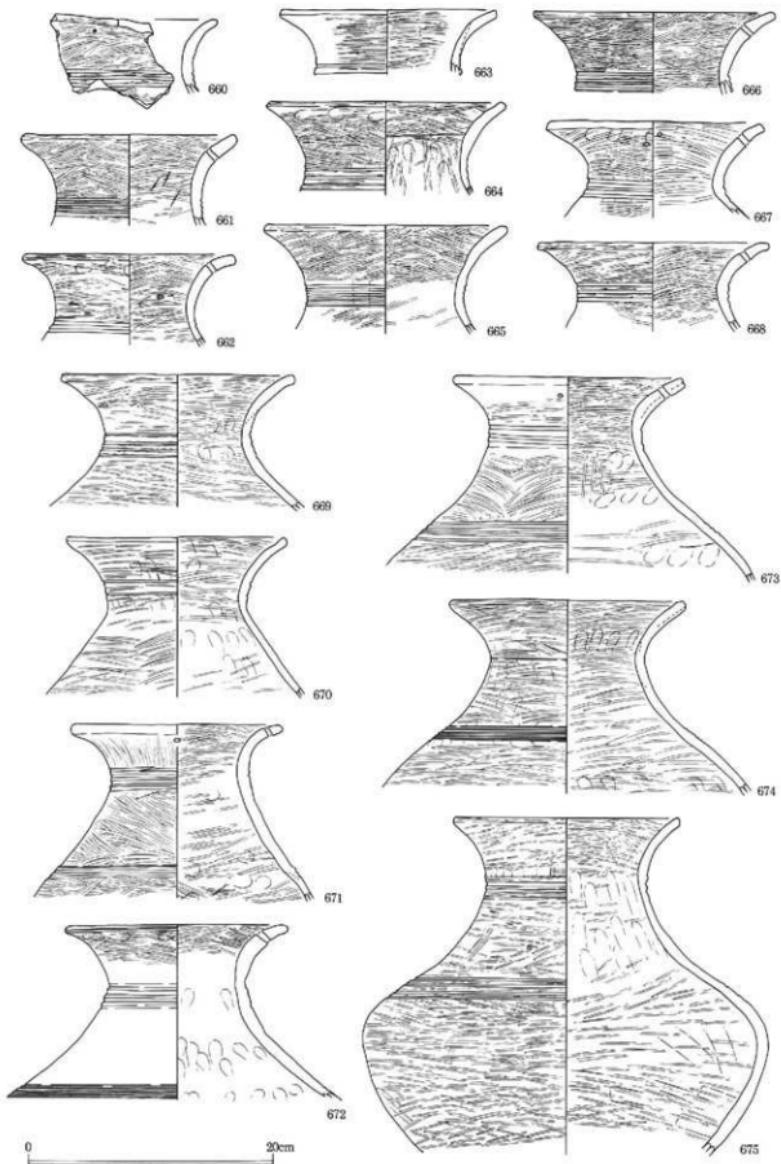


図53 95-2区 第3面落込み848出土弥生土器3

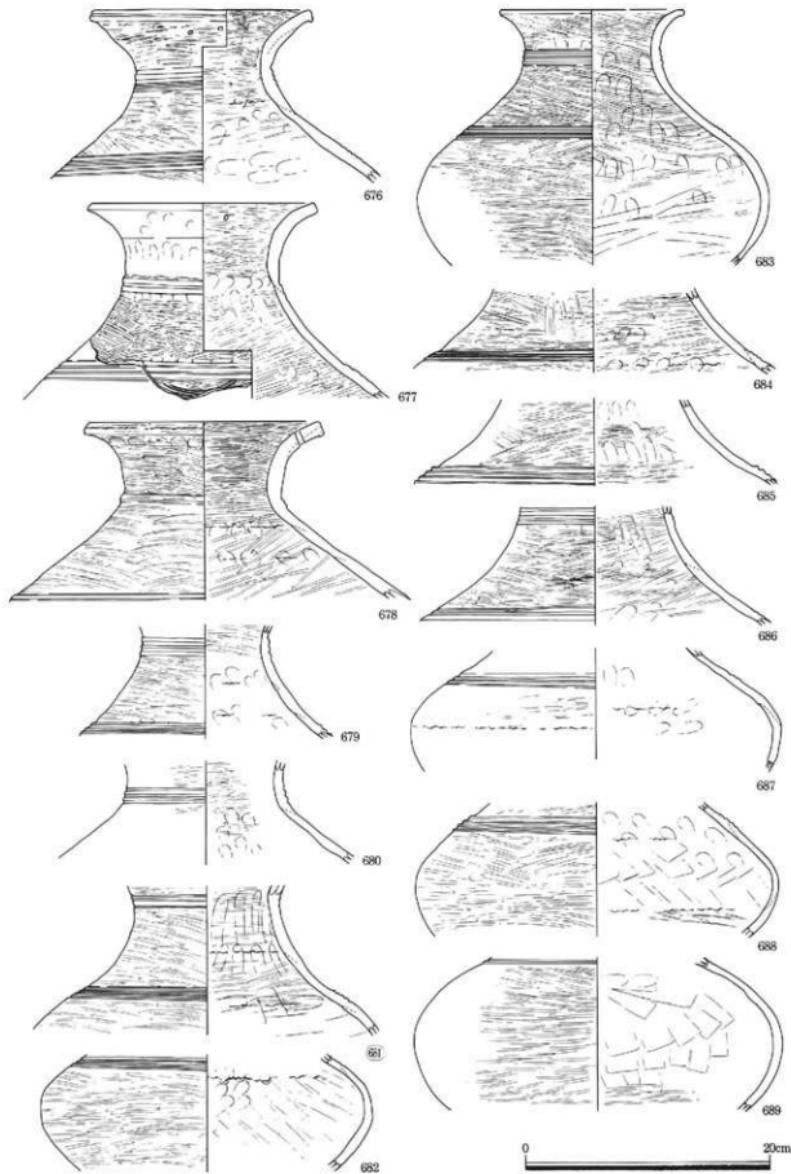


図54 95-2区 第3面落込み848出土弥生土器 4

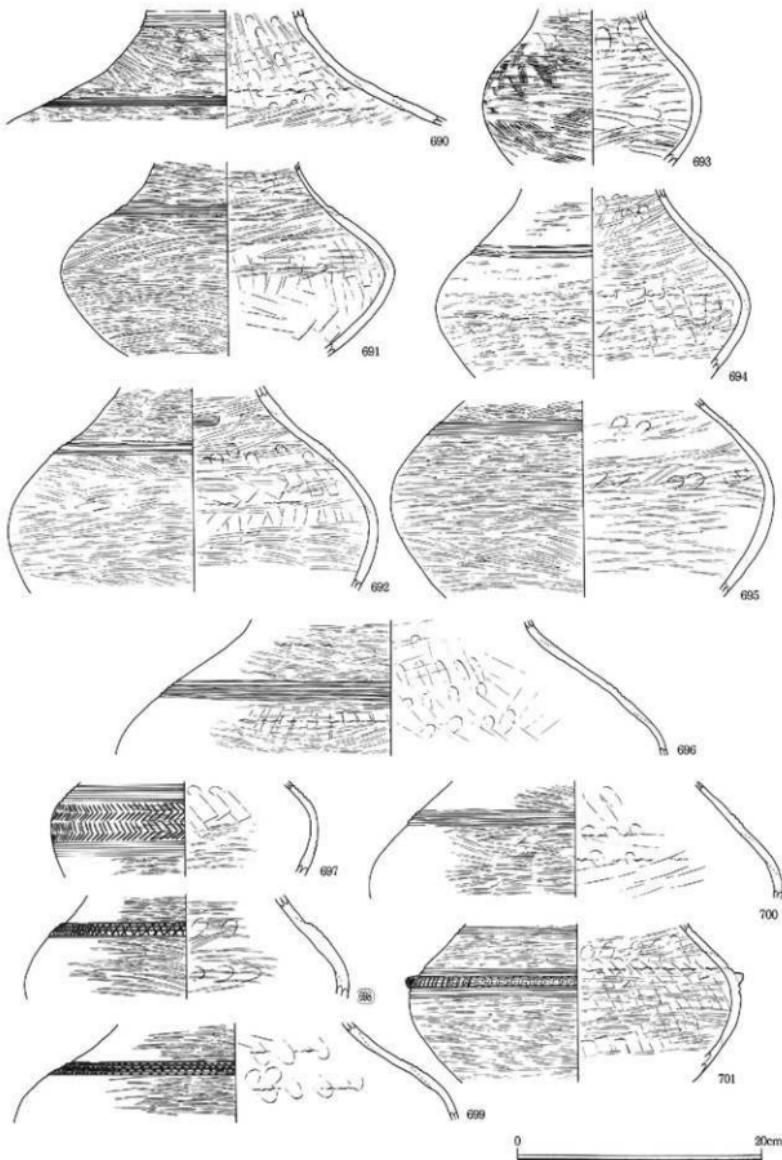


図55 95-2区 第3面落込み848出土弥生土器5

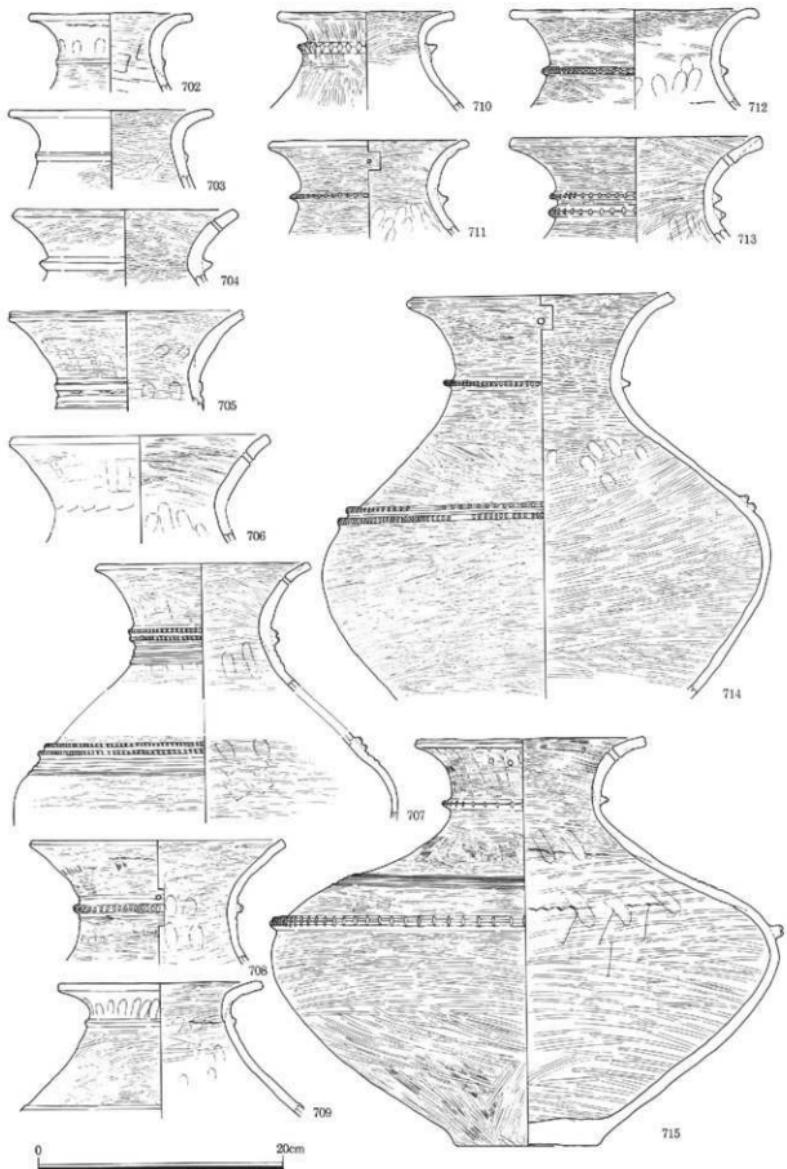


図56 95-2区 第3面落込み848出土弥生土器 6

田井中遺跡95-2区の調査成果

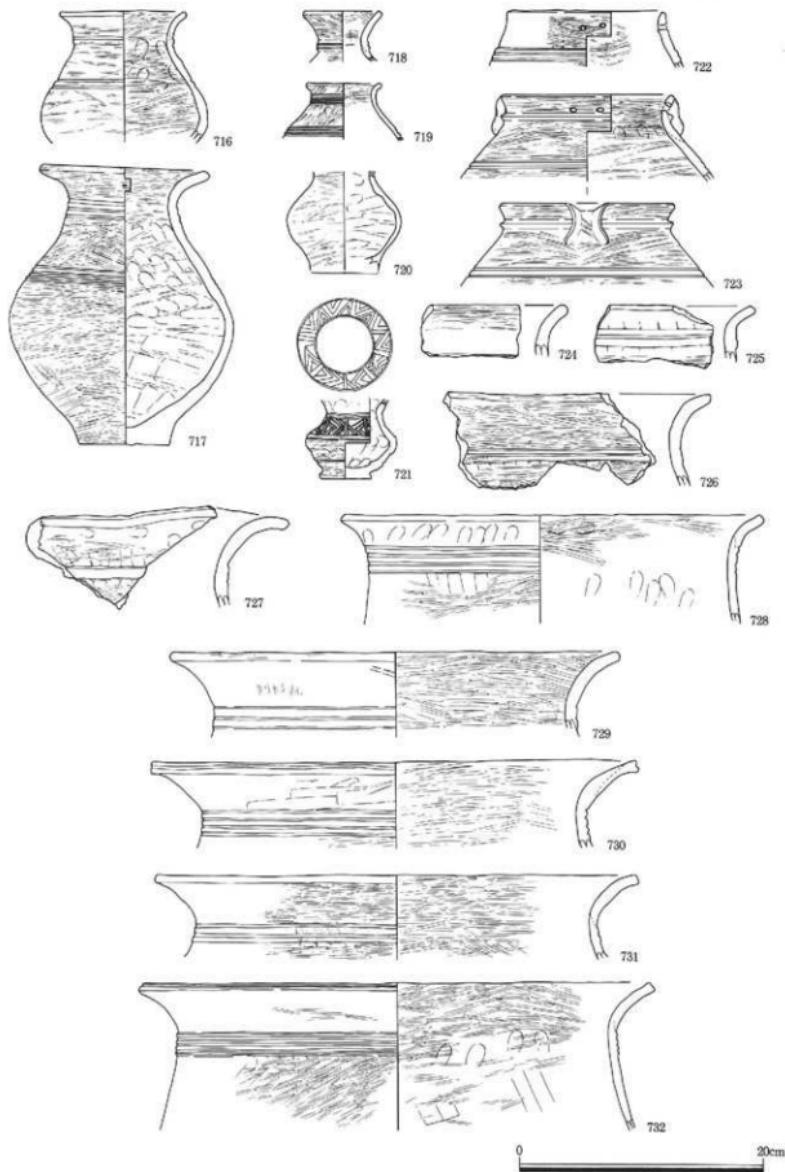


図57 95-2区 第3面落込み848出土弥生土器7

20cm
0

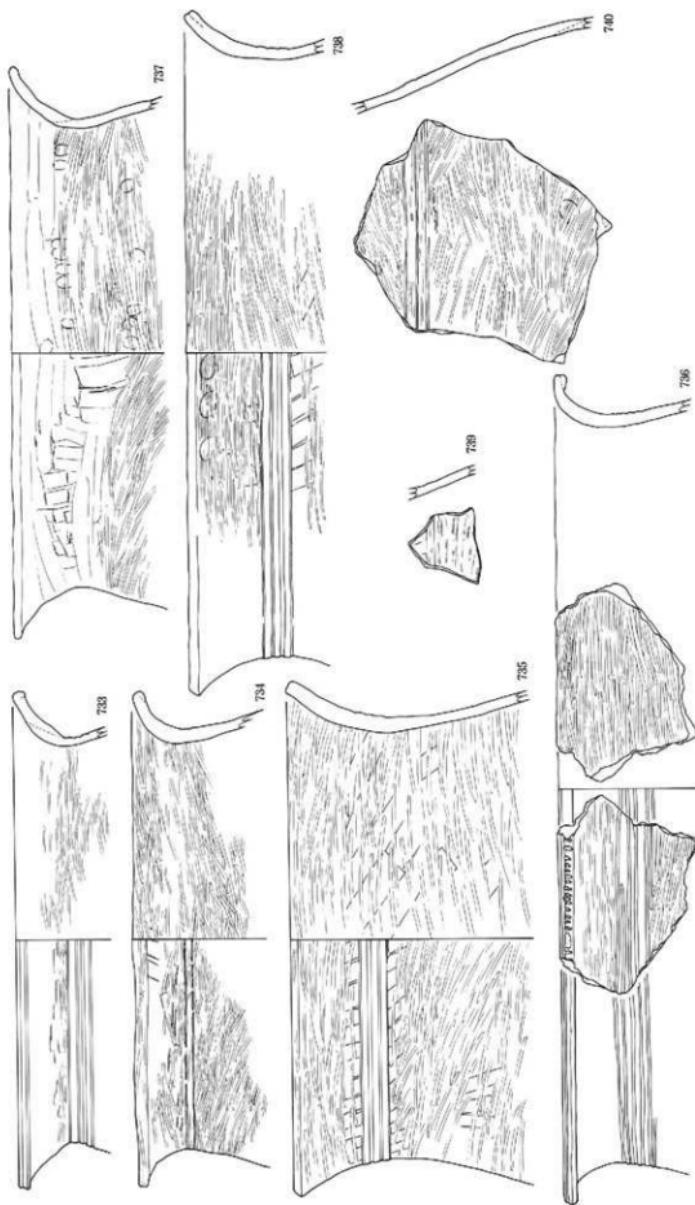


图58 95-2区 第3面落刃刃848出土学生土器8

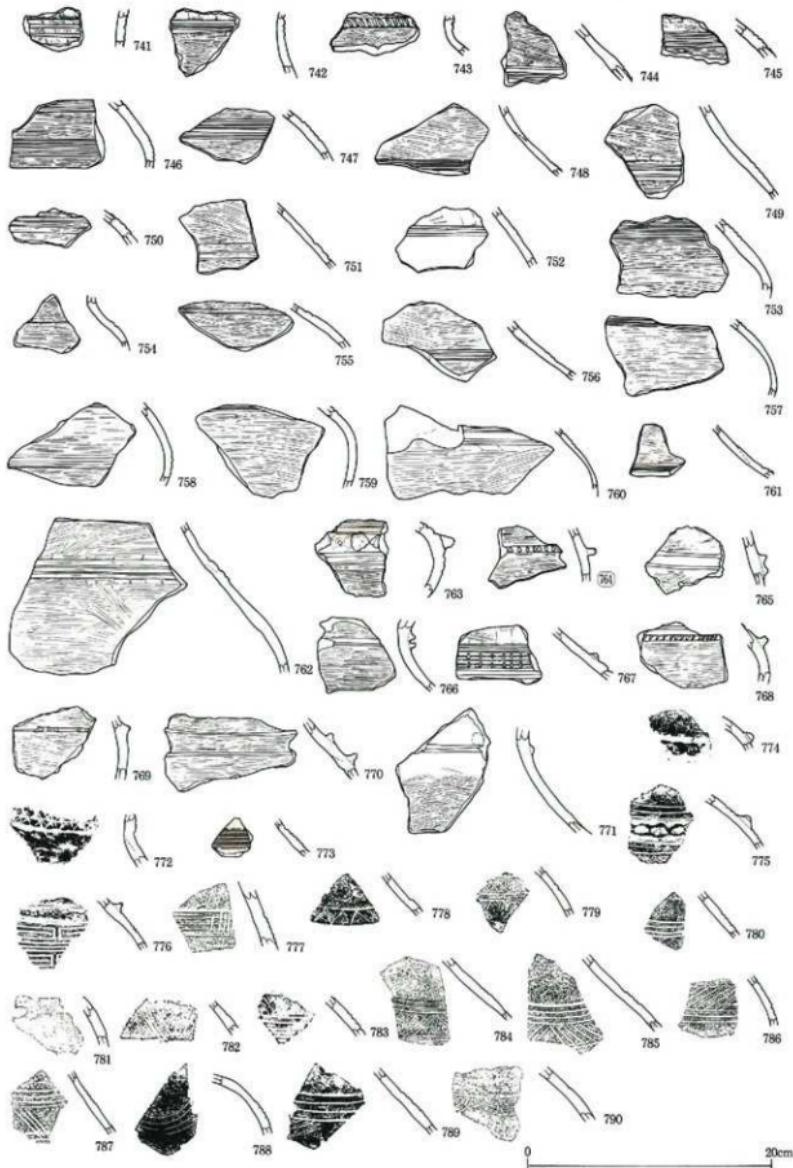


図59 95-2区 第3面落込み848出土陈生土器9

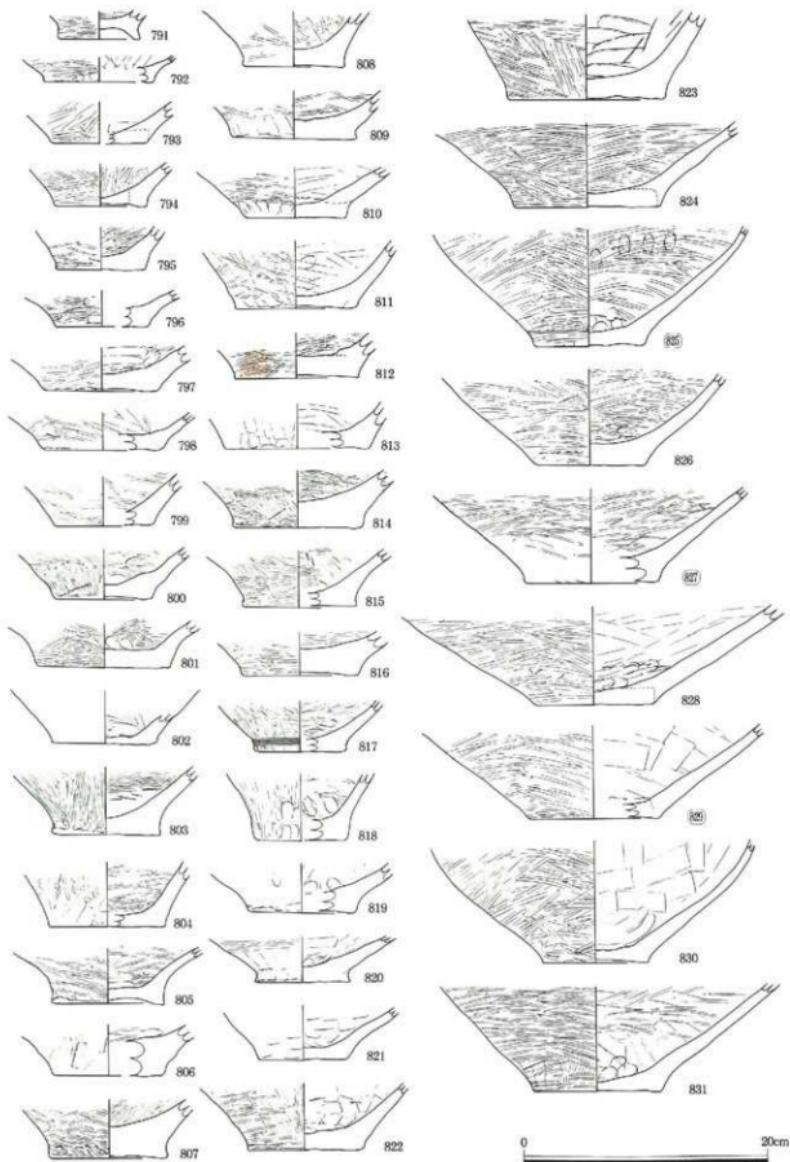


図60 95-2区 第3面落込み848出土弥生土器10

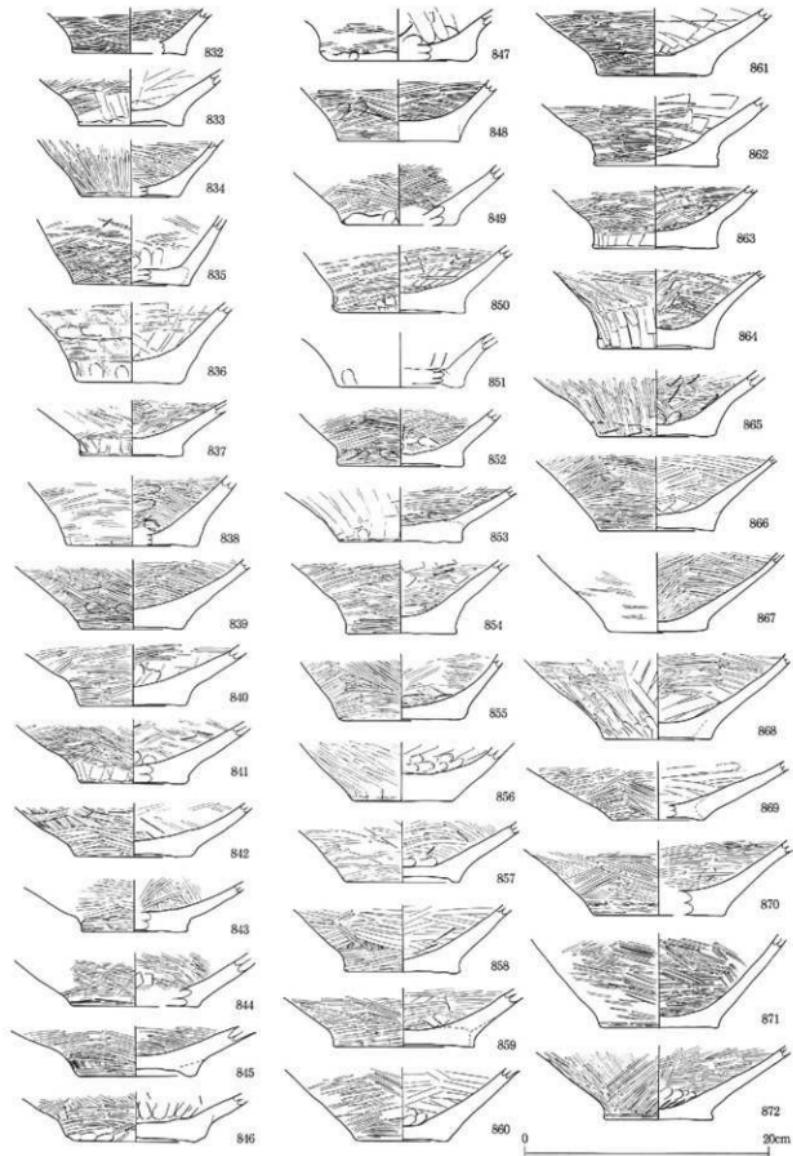


図61 95-2区 第3面落込み848出土埴生土器11

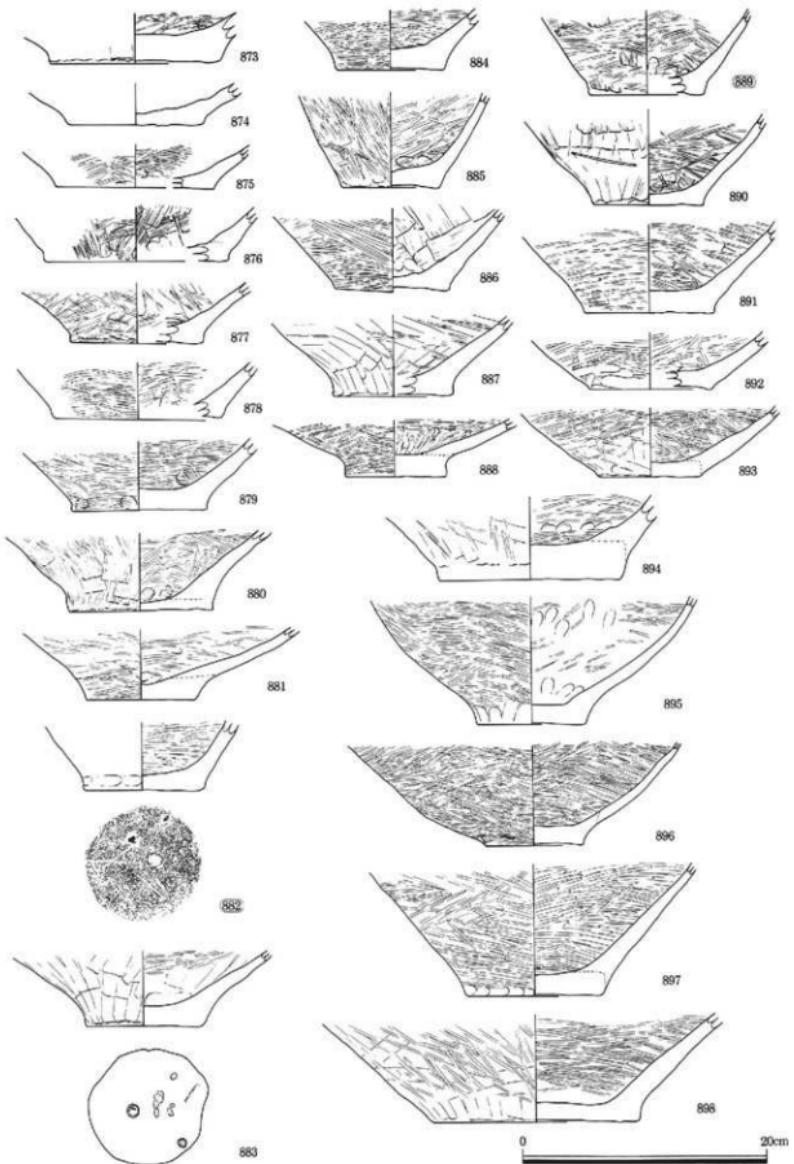


図62 95-2区 第3面落込み848出土弥生土器12

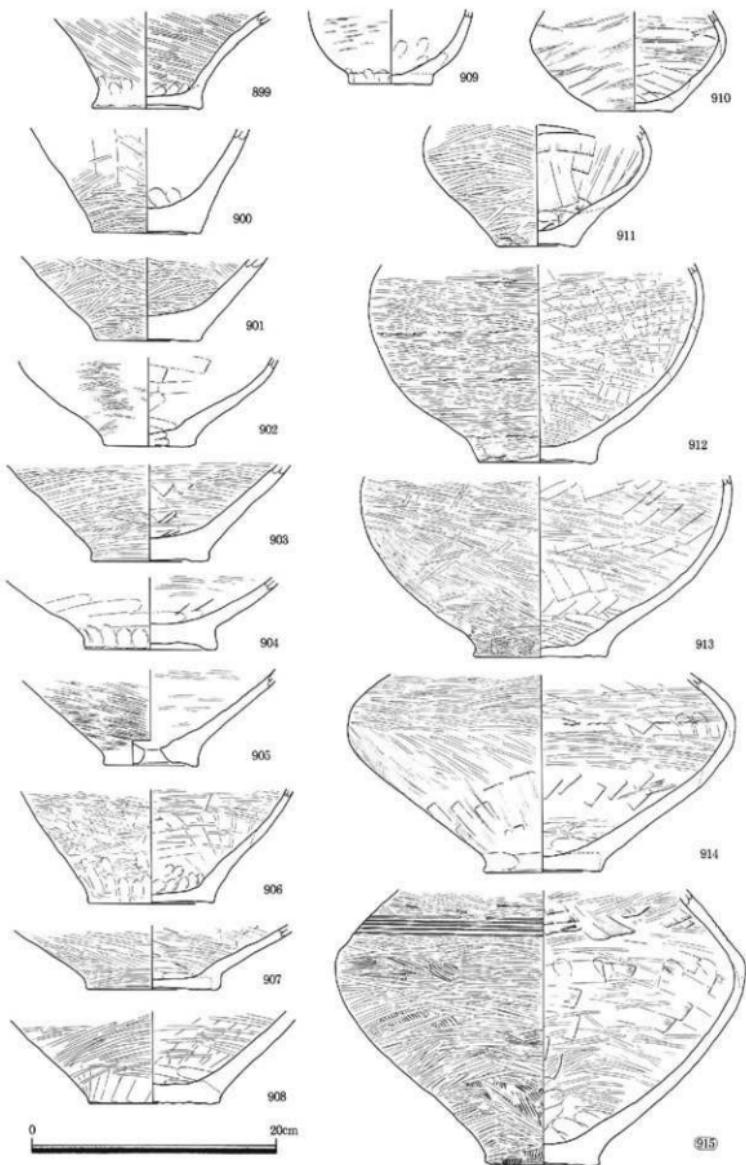


図63 95-2区 第3面落込み848出土弥生土器13

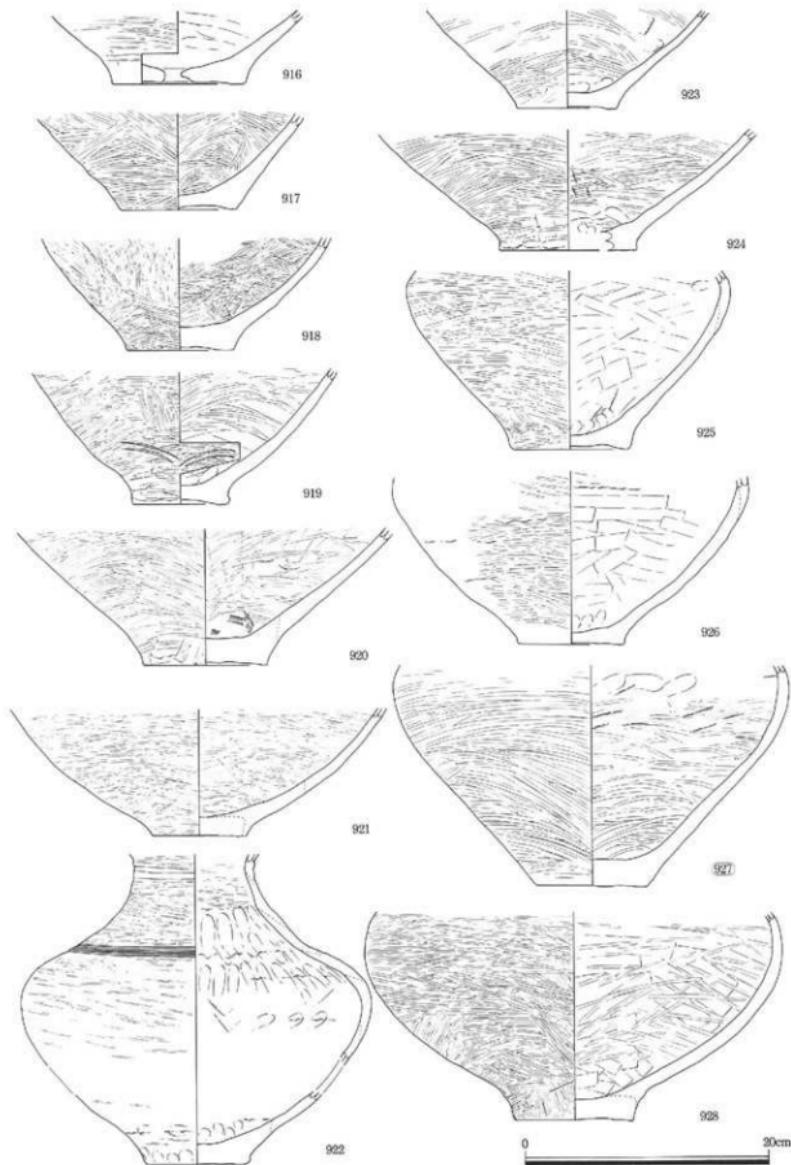


図64 95-2区 第3面落込み848出土弥生土器14

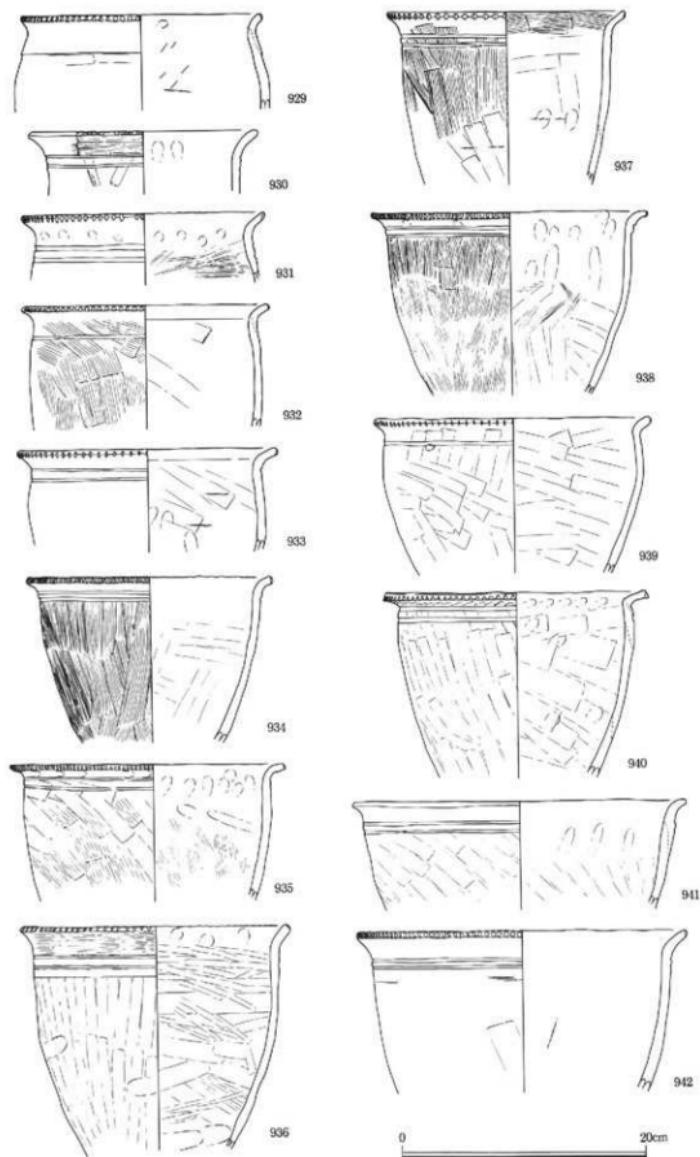


図65 95-2区 第3面落込み848出土弥生土器15

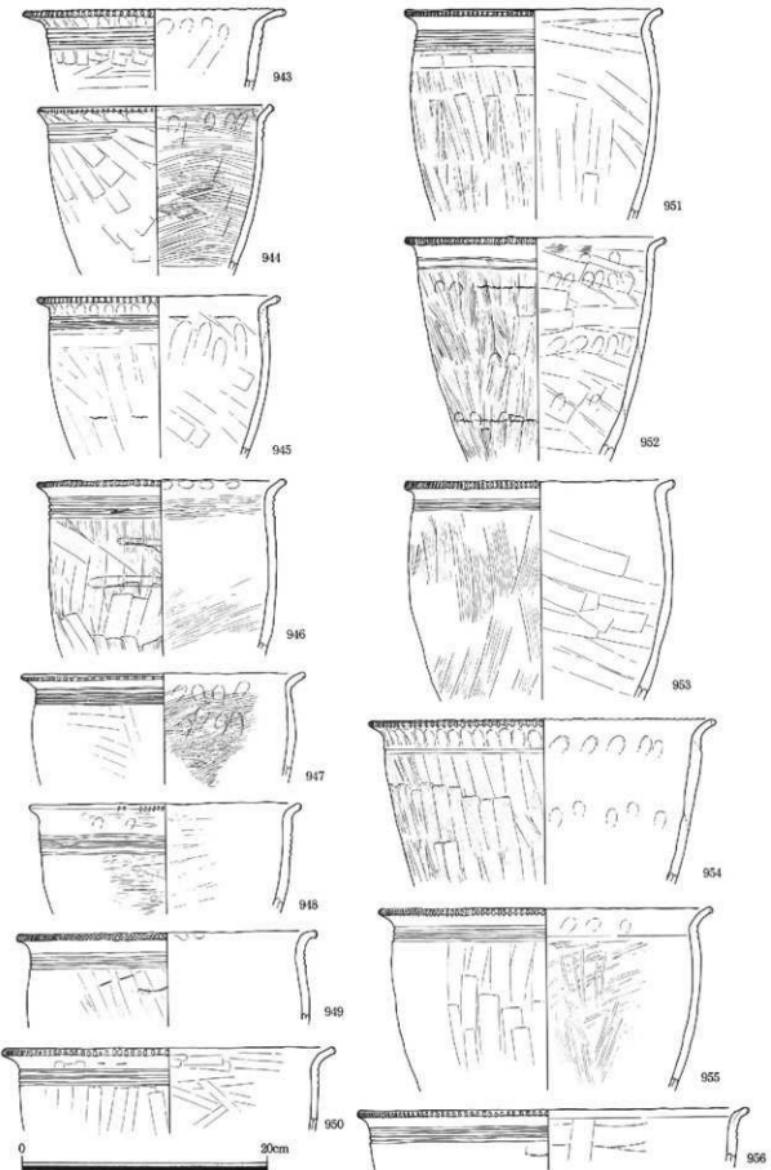


图66 95-2区 第3面落込み-848出土弥生土器16

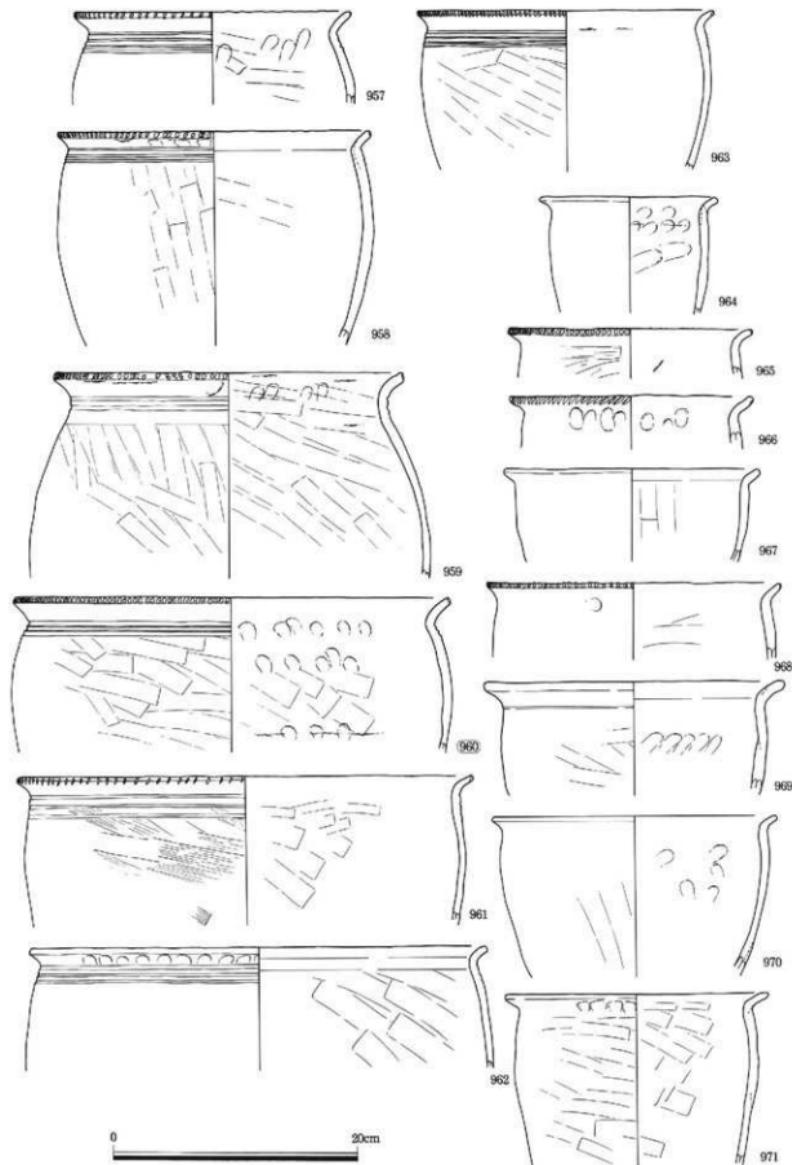


図67 95-2区 第3面落込み848出土弥生土器17

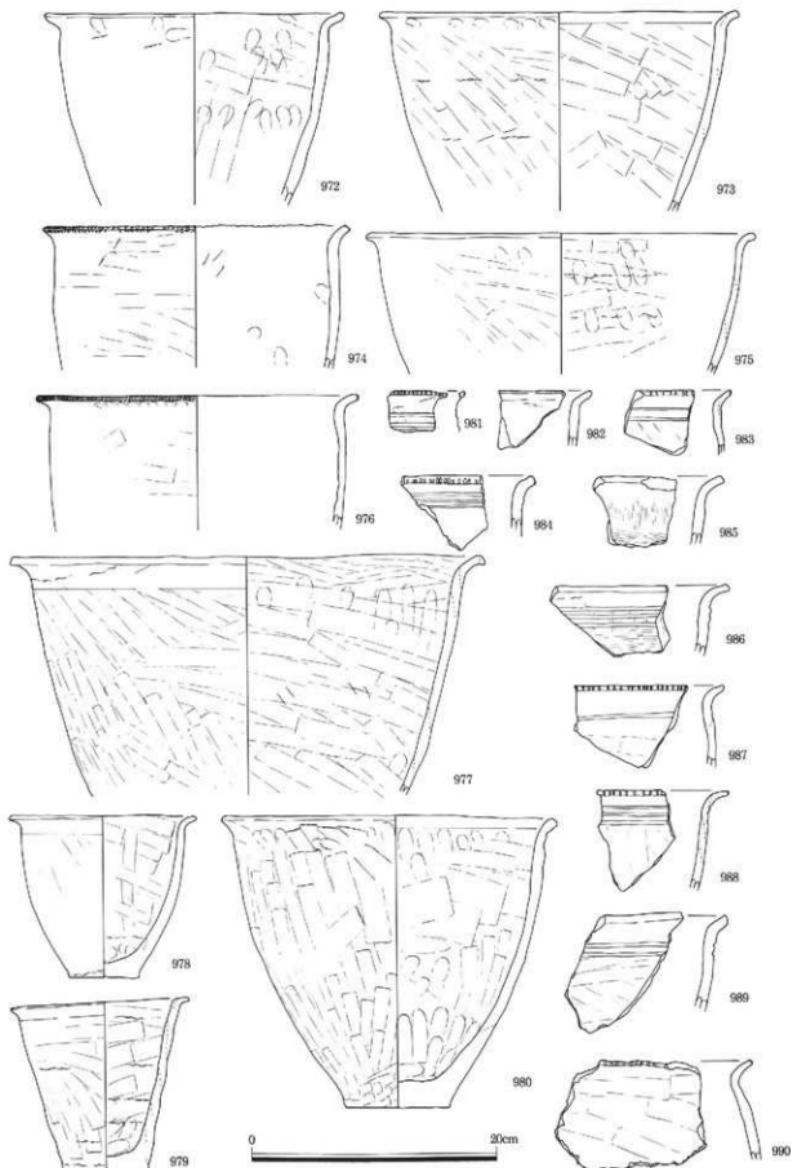


図68 95-2区 第3面落込み848出土弥生土器18

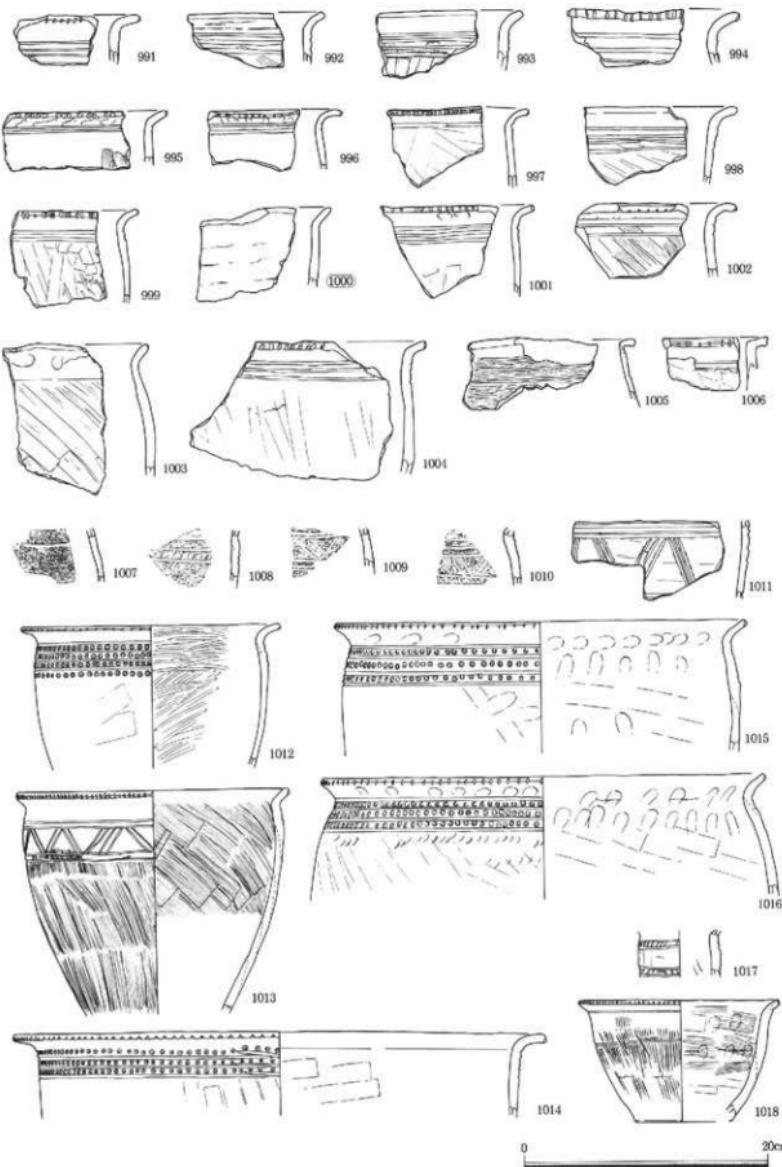


図69 95-2区 第3面落込み848出土弥生土器19

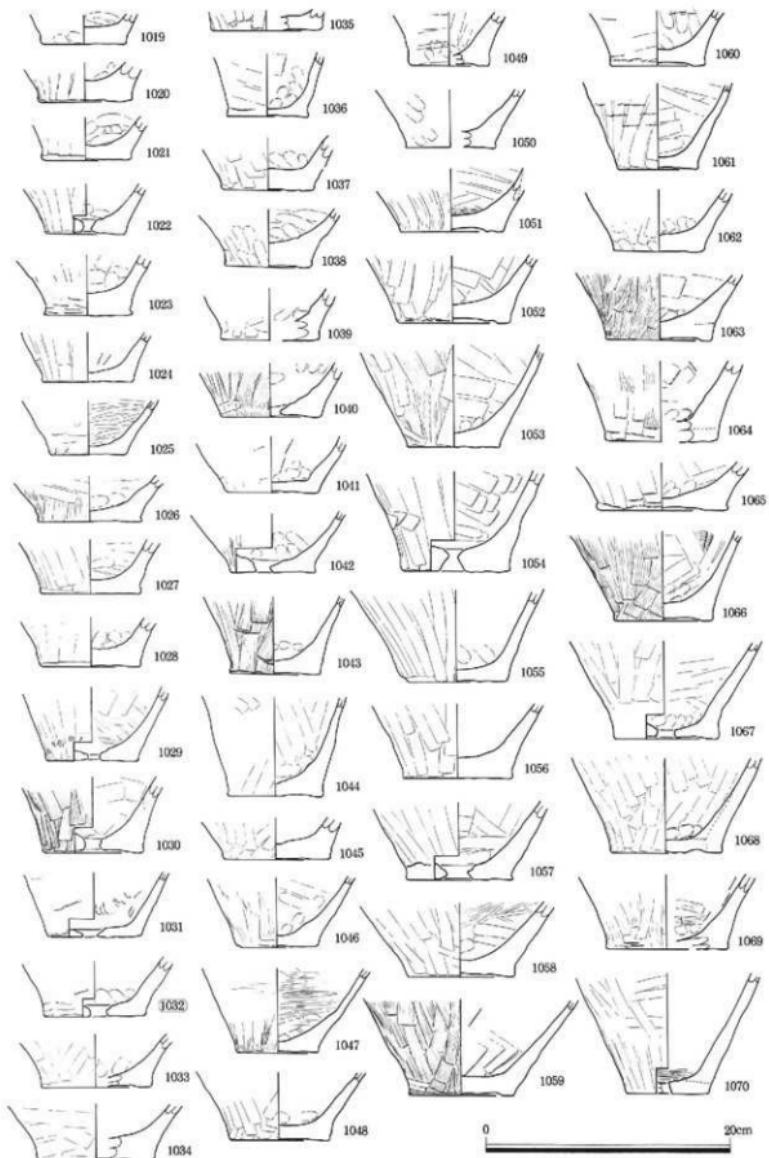


図70 95-2区 第3面落込み848出土弥生土器20

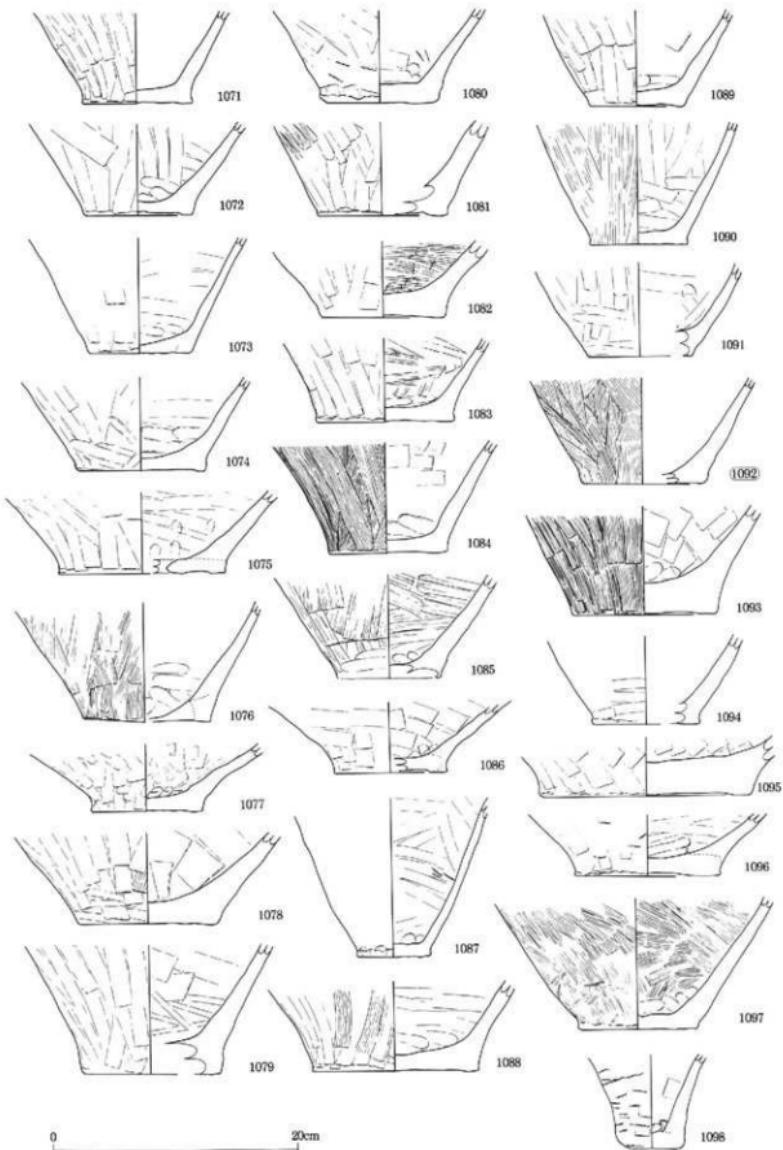


図71 95-2区 第3面落込み848出土弥生土器21

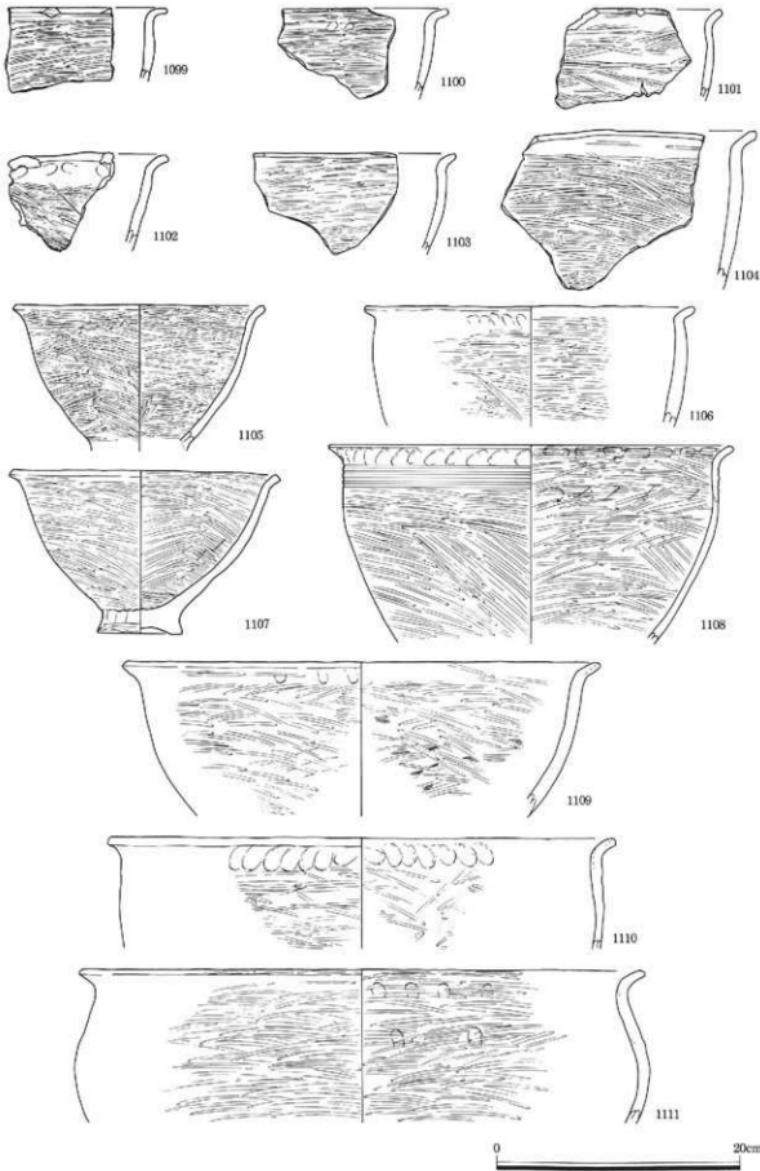


図72 95-2区 第3面落込み848出土弥生土器22

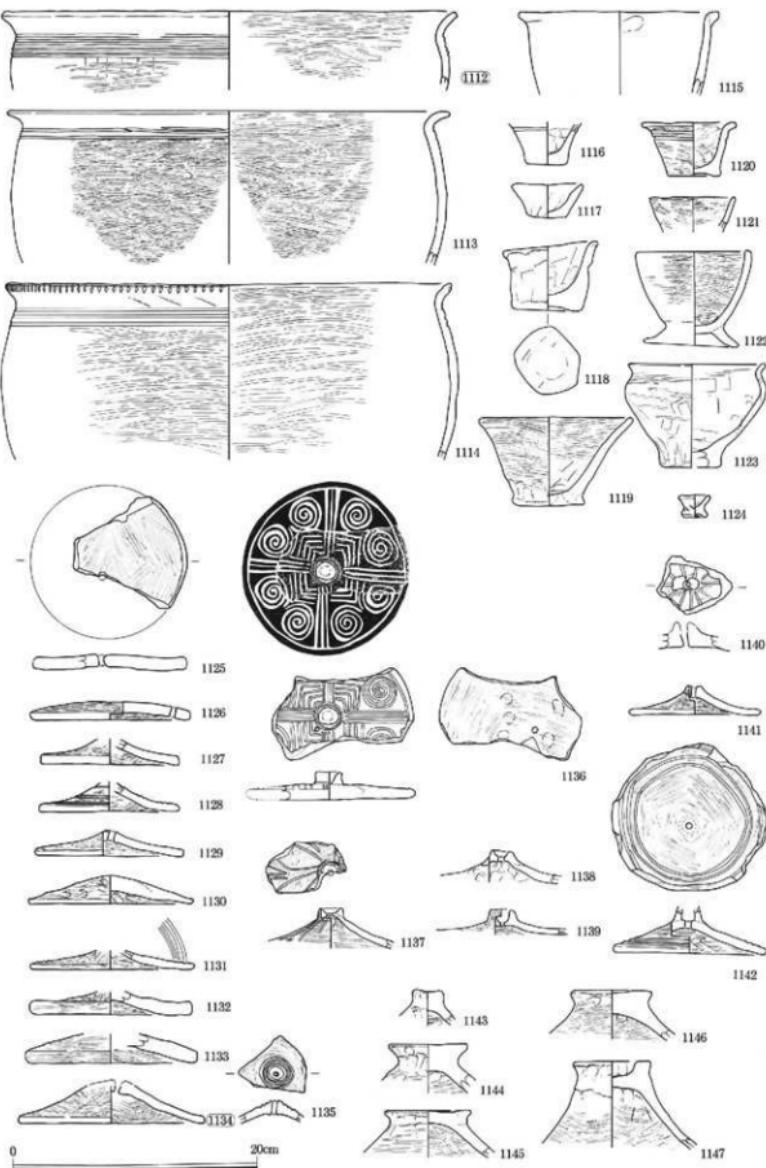


図73 95-2区 第3面落込み848出土弥生土器23

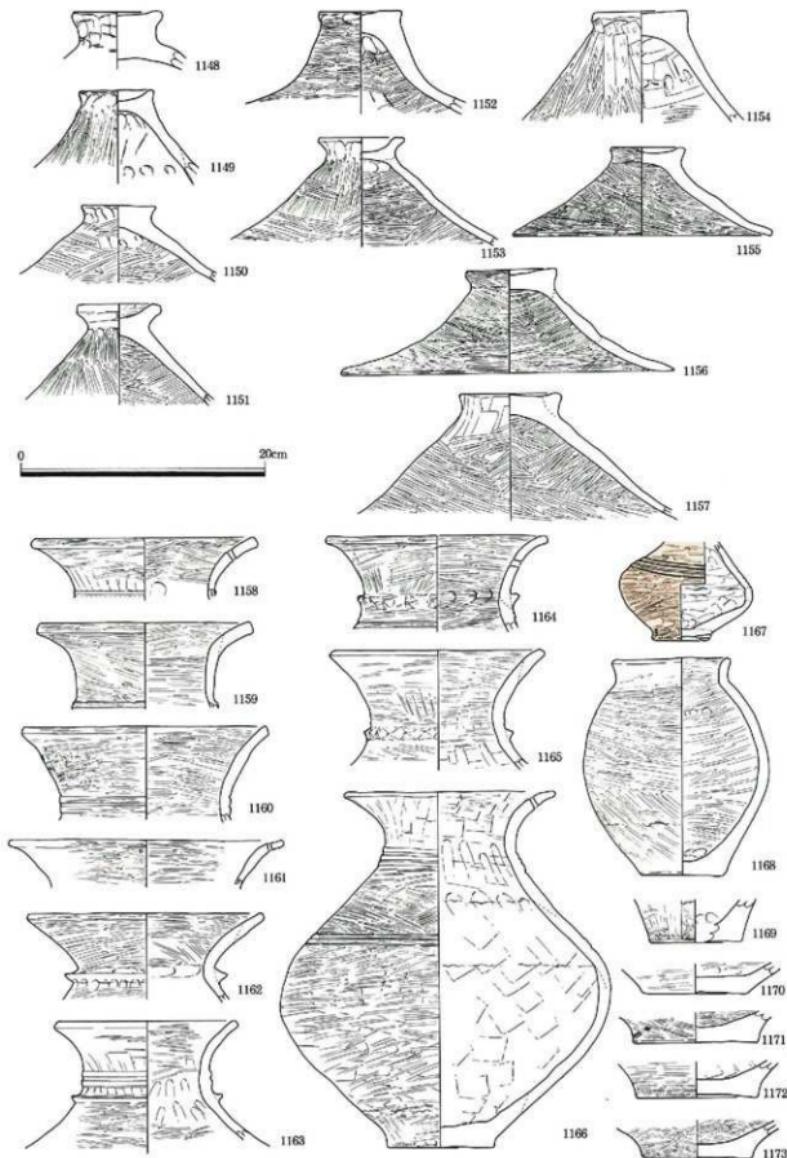


图74 95-2区 第3面落込み848出土弥生土器24

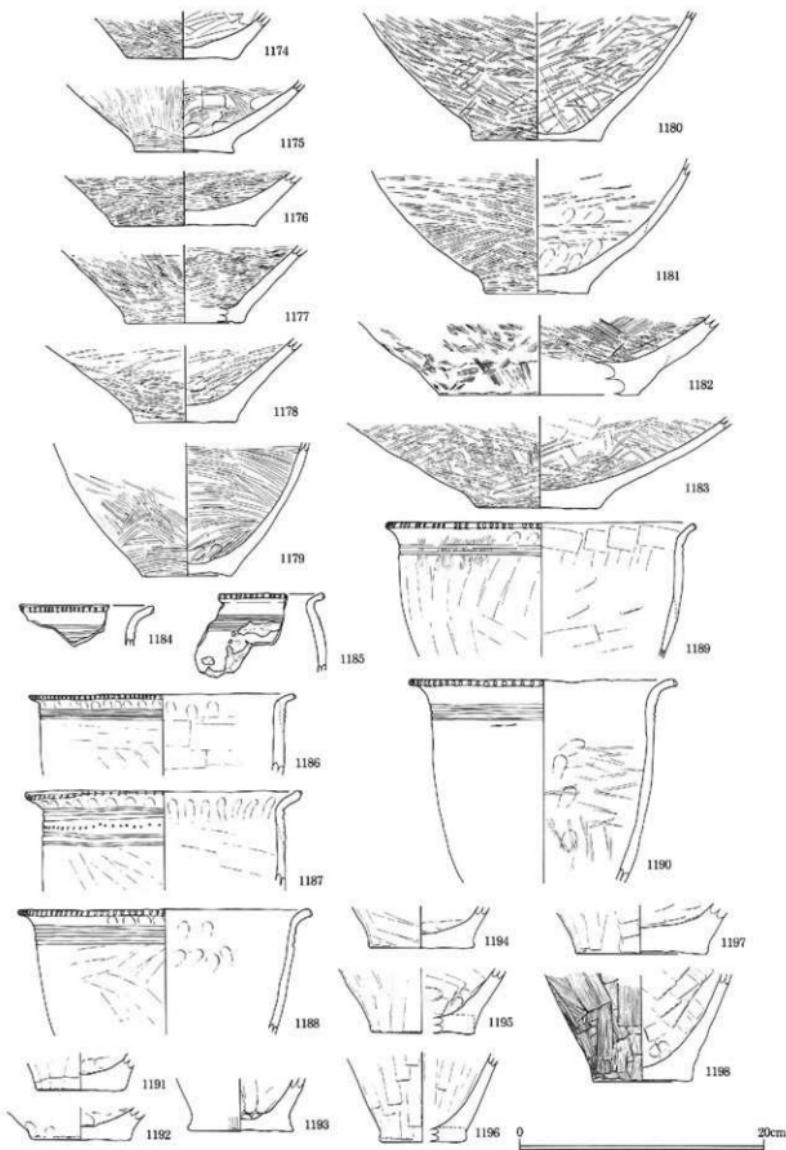


図75 95-2区 第3面落込み848出土弥生土器25

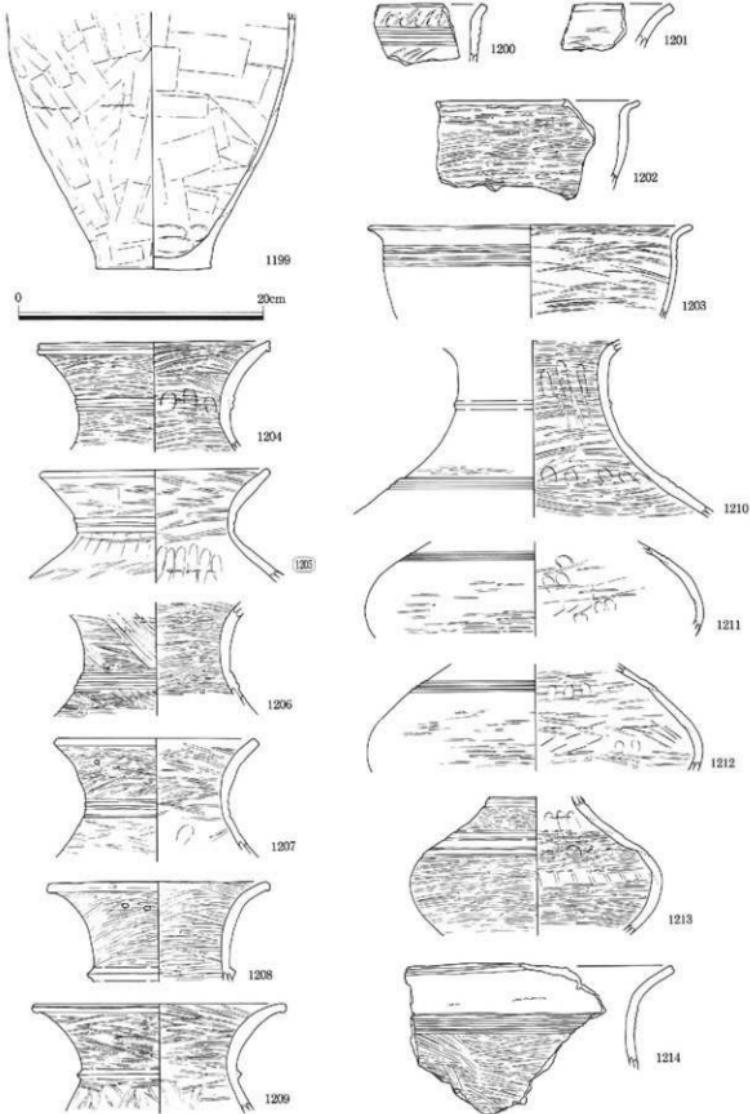


图76 95-2区 第3面落込み848出土弥生土器26

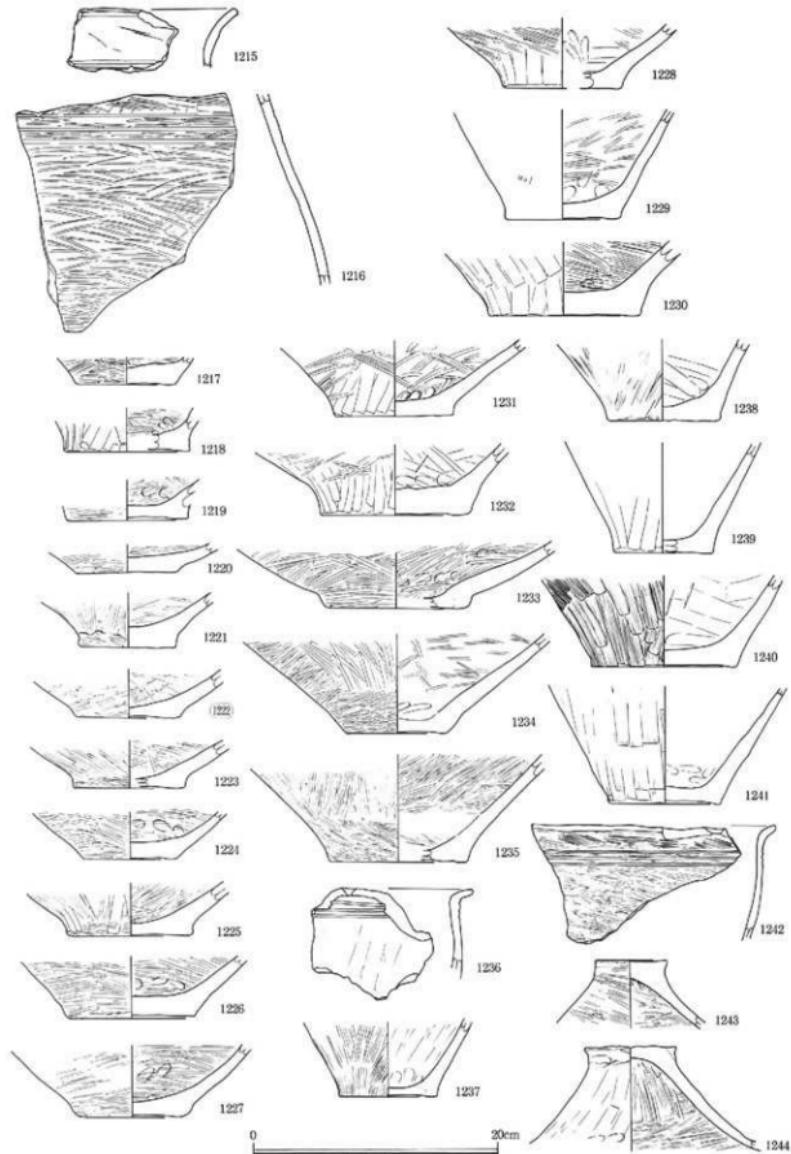


図77 95-2区 第3面落込み848出土弥生土器27

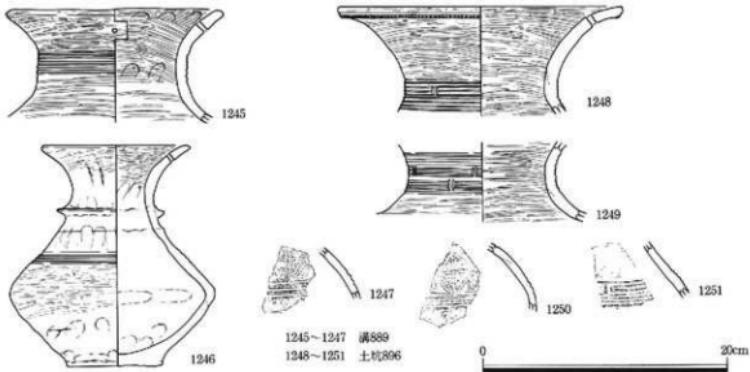


図78 95-2区 第3面溝・土坑出土弥生土器

縄文土器 第1面～第1層にかけて4点、第2面から2点出土している。図化できたのは2点のみで、いずれも混入品と認識している。図20-89は第1面土坑316から出土した注口土器の注口部分である。図32-33は第1面土坑188から出土した縄文晩期後半の刻目突帯土器である。

炭化物付着土器 第2面土坑657・溝658・土坑843、第3面落込み848から出土した土器の内面に炭化物等の付着がみられたので、植物同定を山口誠治（財大阪府文化財調査研究センター）に依頼した。分析結果は、本報告書第11章「土器付着炭化物について」で詳述されている。

第4節 石器

打製石器 95-2区出土のサスカイト類は、層別では第0層が1357点と最も多く、遺構面別では第1面が1485点と最多となる。詳細は第12章にゆずり、ここでは代表的な石器を紹介する。

石鏨は基部の形状から、凹基式1252～1254、円基式1255・1260・1261、凸基式1256～1259・1262、有基式1263に分類できる。凹基式とした1252は、側辺に丁寧な調整を行い、やや外彫気味に仕上げる。重さ1.6gをはかる。第0層出土。1253は縦長剝片を内彫気味に調整し、腹面には主要剥離面が残る。片側の基端を欠損する。1.7gで、第0層出土。反対にやや幅広の1254は、側辺を外彫気味に調整する。先端部は鈍角で、やはり片側の基端を欠損する。2.7gをはかり、第0層出土。図示した円基式石鏨のうち、1255の先端部はやや鋭さに欠く。2.8gをはかり、第0層出土。1260は幅広で、扁平な剝片を素材とし、両側辺に簡単な調整を加えて整形する。腹面には主要剥離面が顕著に残る。4.9gで第0層出土。1261は基辺部を欠損するが、おそらく円基式であろう。薄手の横長剝片を素材とする。腹面には主要剥離面を大きく残し、打点側のみ調整剝離を加え、末端辺の調整は省略する。土坑188出土で、重さ3.5gをはかる。尖基式のうち、1256は先端部を欠損する。2.5gで第0層出土。1257は、全面に丁寧な調整を加えており、いずれを先端とすべきか判断しにくい。第0層出土で2.8gをはかる。1258は側辺に比べ、基辺はやや細く仕上げる。第1面土坑188出土で、重さは2.1gをはかる。1259は両側縁に調整剝離を加え、幅1cmと細身であるが、左右非対称形となる。第1面土坑279出土で、重さ1.0g。1262は6.0gの大型鏨で、腹面には先端部に主要剥離面が残り、縁辺部の調整剝離は粗雑である。基部は先端部に比べやや厚いため、幾度か調整を加えたものの、結果的に階段状剝離が顕著に残る。先端部はそれ

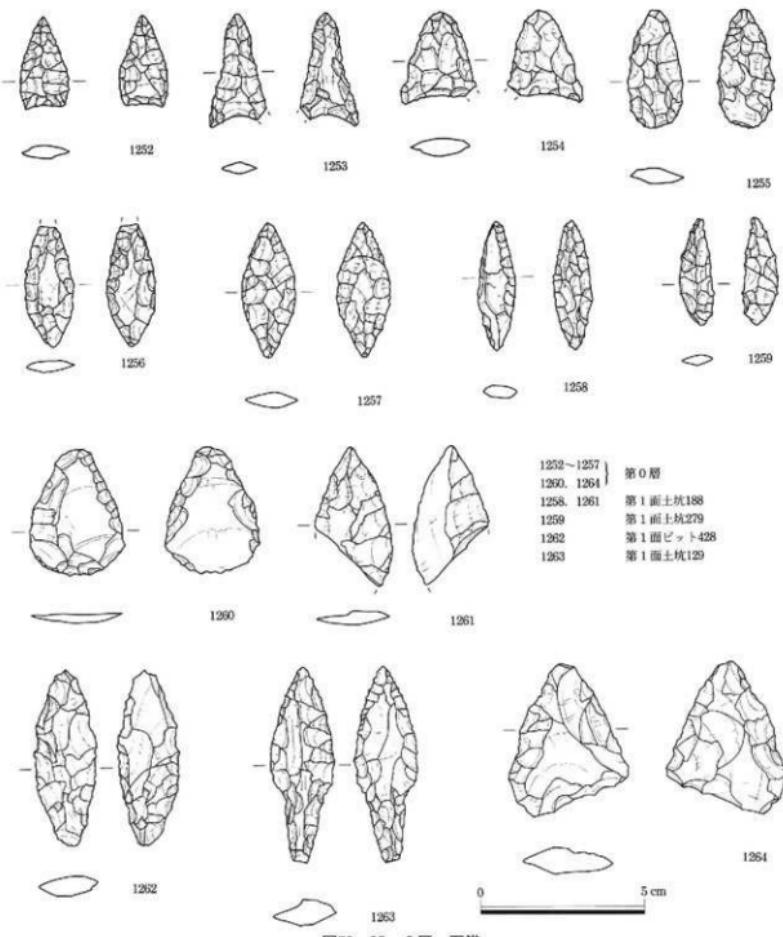


図79 95-2区 石鏃

ほど尖らない。第1面竪穴住居364を構成するピット428出土。1263は今回の調査で唯一出土した有茎式石鏃で、7.1gをはかる。縦長剥片を素材とするが、鏃身部の厚みを減じるため、背面側に大きな剝離痕を残す。第1面土坑129出土。1264は、横長剥片を素材とし、両側辺に調整剝離を加えるが、基部は未調整である。第0層出土で、重さ2.7gをはかる。

尖頭器は6点図示した。1265は唯一の有茎式で、横長剥片を素材とする。両側辺から調整剝離を加えて精美に仕上げるが、剝離は中心部まで至らず、やや厚手である。先端部はやや欠損する。第0層出土で、19.0gをはかる。1266は両面とも調整剝離を施すが、全体的に厚手で粗雑な感があり、左右は非対称である。瘤状に残った部位を、研磨によって除去したようで、特にB面側で顕著である。基部は研磨

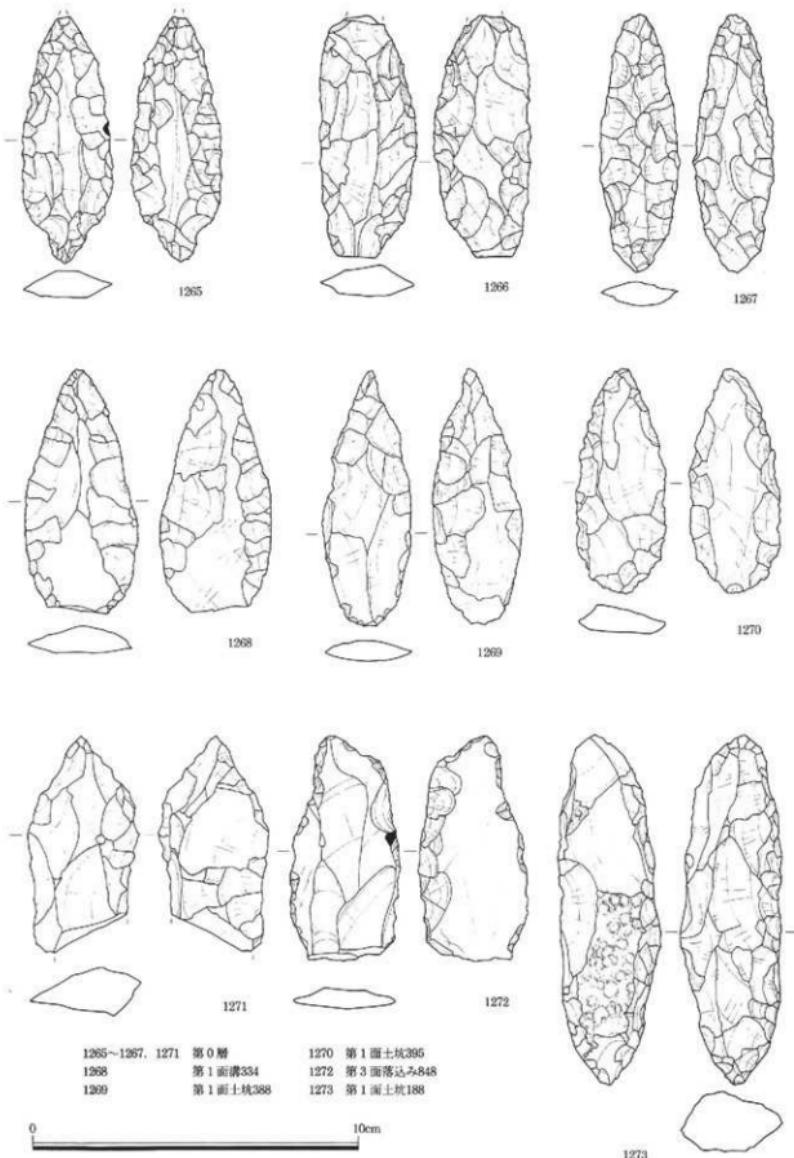


図80 95-2区 尖頭器

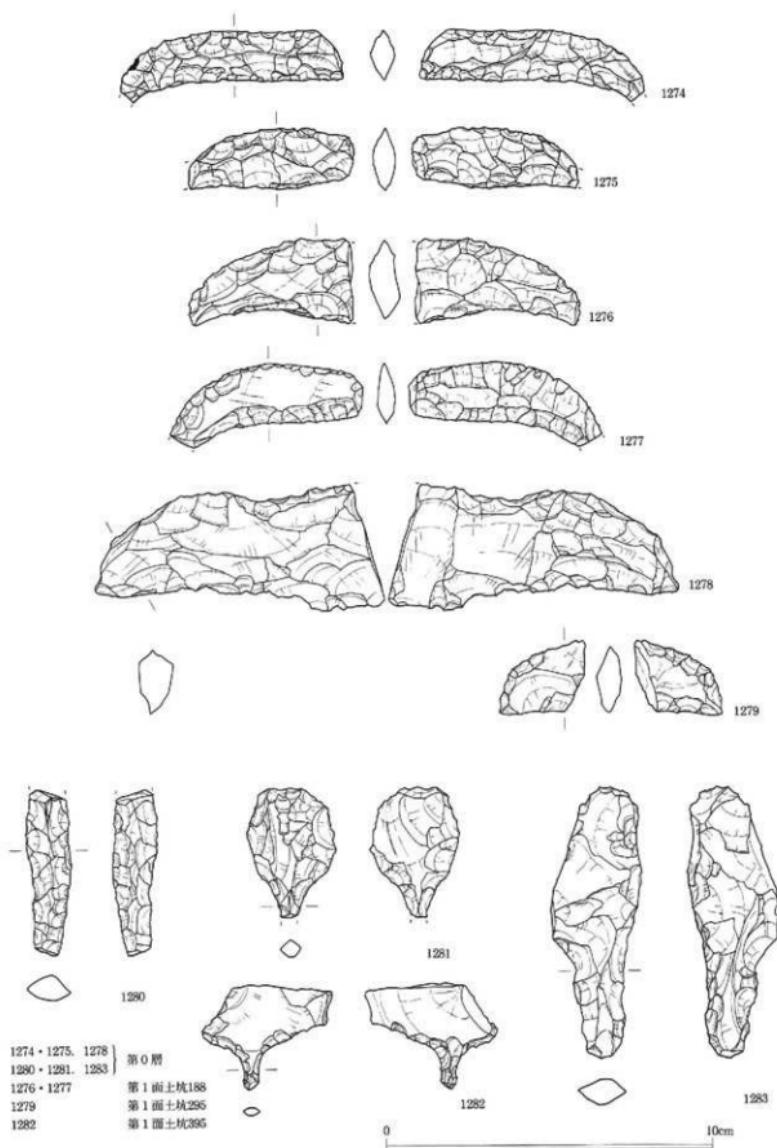
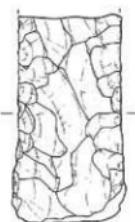


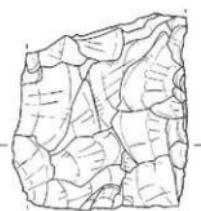
圖81 95-2區 石小刀・石錐



1284



1285



1286

1284 側面
1285 第1面土坑188
1286, 1288 第0層
1287 第1面土坑365



1287



1288



0

10cm

图82 95-2区 石劍1

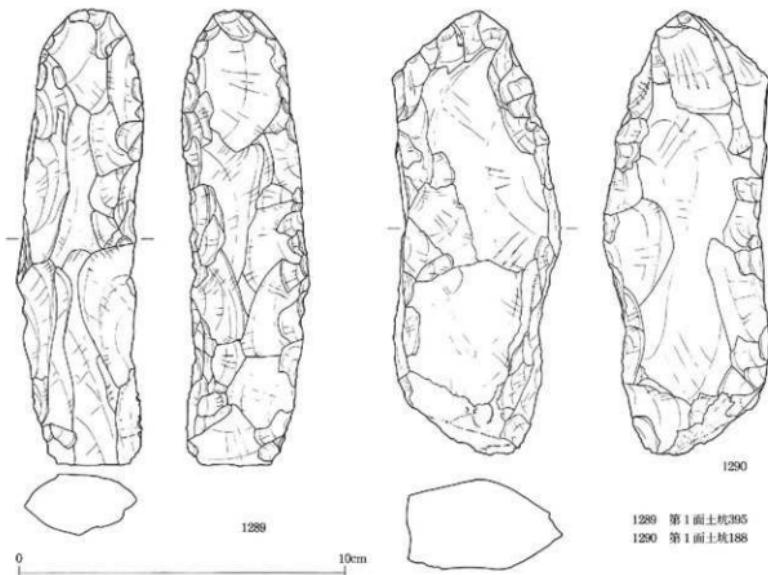


図83 95-2区 石剣2

して平基とする。未成品の可能性もある。先端部は大きく欠損する。第0層出土で、28.4gをはかる。1267は横長剝片を用いたもので、図示したものの中で最も細身に仕上がる。腹面側には主要剝離面が残り、側辺には部分的に階段状剝離がある。16.4gで第0層出土。1268は偏平な横長剝片を素材としたもので、図示した中では幅広の部類である。基部側に比べ先端部の方が厚い。基部は欠損する。第1面溝334から出土し、重量は21.1gをはかる。1269は唯一縦長剝片を素材としたもので、調整剝離は基部側にほとんど施さず、もっぱら先端部に集中する。そのためか、図示した資料中最も先端部が尖る。第1面土坑388出土で、重さ16.4gをはかる。1270は、腹面側に大きな主要剝離面を、さらに背面側にも成形時の大規模な剝離痕を残す。よって全体の調整は粗雑な感がある。第1面土坑395出土で重量16.7g。次の3点は未成品と判断した。1271は両面とも剝離時に残った瘤を研磨する。基部は欠損する。第0層出土で、重さ29.2gをはかる。1272は、水磨した縦長剝片に部分的な細部調整を施したものである。第3面落込み848出土で、11.2gをはかる。1273は側辺に細部調整を加えるが、原礫面が残る。第1面土坑188出土で、重さ64.8gをはかる。

石小刀は全出土点数5点中4点を図示した。1274・1275はともに先端部を欠損し、基部には原礫面が残る。全体に丁寧な調整剝離を施す1274に比べ、1275は階段状剝離が顕著である。1274は8.9g、1275は7.9gをはかる。いずれも第0層出土。図示した中で最も幅広な1276は、基部を欠損する。腹面には主要剝離面が残り、部分的に階段状剝離が観察できる。第1面土坑188出土で、12.9g。縦長剝片を素材とする1277も、腹面側に大きな主要剝離面を残すため、やや偏平な感じがする。先端部を欠損。重量は7.6gで第1面土坑188出土。1278は、石小刀とするにはやや大型な感もあるが、刃部の形態から未成

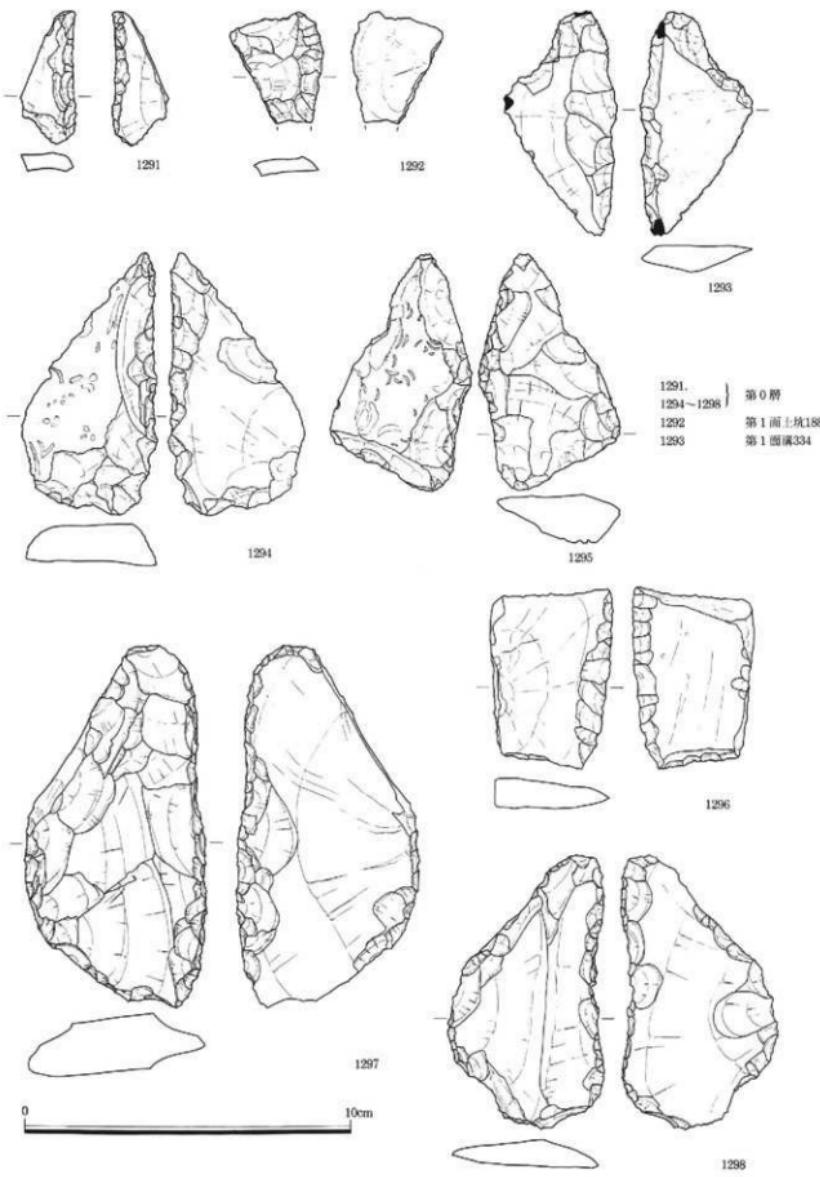
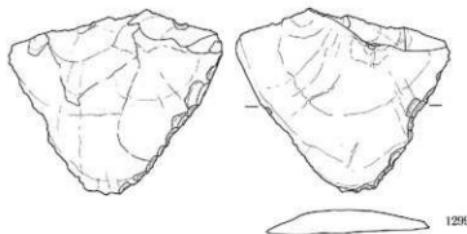
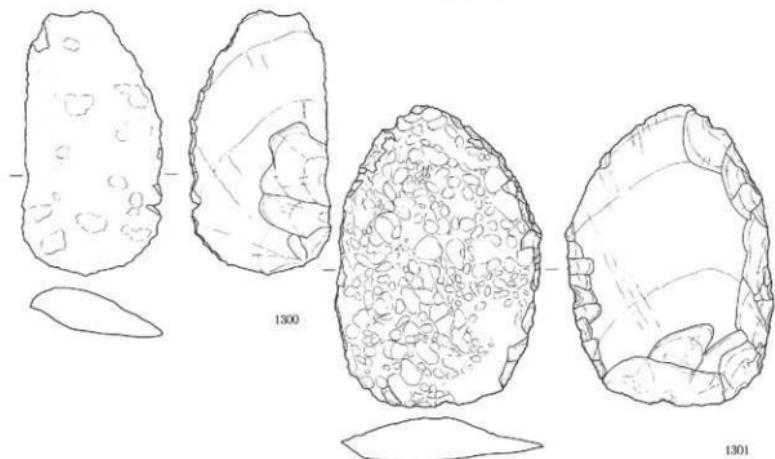


図84 95-2区 スクレイパー1

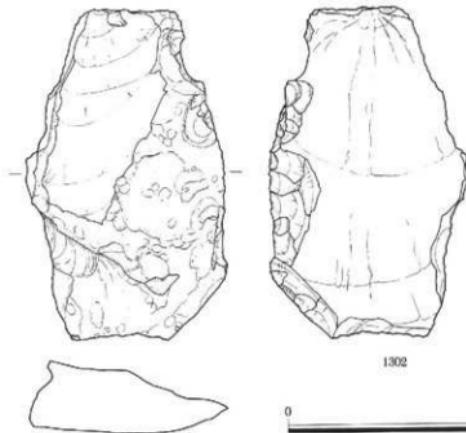


1299



1300

1301



1302

0 10cm

図85 95-2区 スクレイパー-2

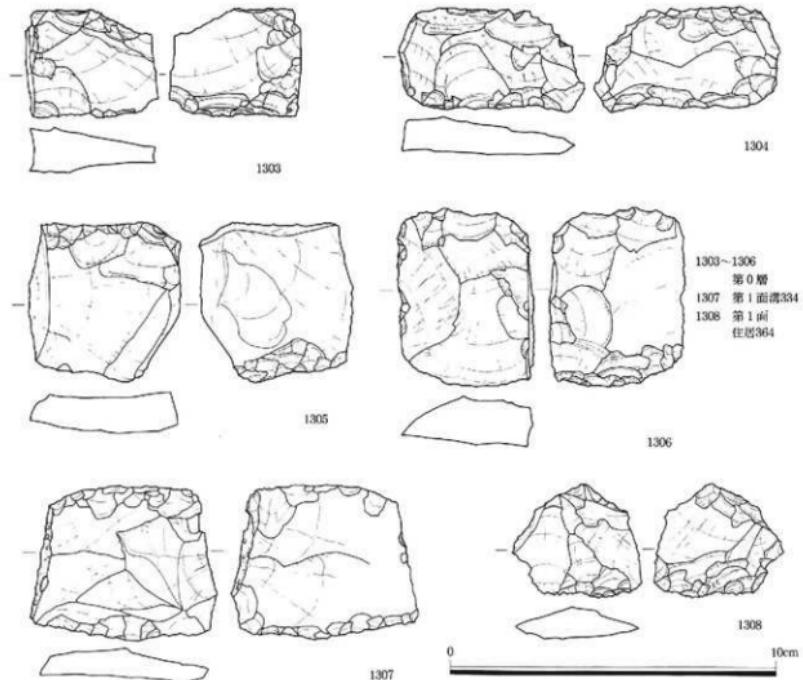


図86 95-2区 楔形石器

品と判断した。先端部に幾度となく調整剝離を加えるが、薄く仕上がってない。第0層出土、37.0g。1279は石小刀の特徴を兼ね備えるが、極めて短い。土坑295出土で、4.2gをはかる。

石錐は4点図示した。1282以外すべて第0層出土。1280は頭部・錐部の境のない棒状を呈するもので、先端部には原縫面が残る。重量5.9gをはかる。1281は腹面側に打点を含む主要剝離面を残し、錐部は欠損する。10.5g。1282は扁平な横長剝離片に調整を加えて成形したもので、完存。第1面土坑395出土で、重量は4.8gをはかる。1283は横長剝離片を用いるが、錐部は作出途上である。重さ29.8g。

石剣は6点図示した。1284は基部片で、全体的に丁寧な調整剝離を施し、両側縁はやや内灣気味に仕上げ、刃潰し加工を施す。38.8g。1285も両側縁から丁寧な調整剝離を施し、銳利な刃部を形成する。42.8gをはかる。第1面土坑188出土。1286は大型の石剣片であるが、部位は不詳である。両側縁から調整剝離を行うが、階段状剝離も顯著である。重量82.2g、第0層出土。1287・1289はともに完形品であるが、あるいは未完成の可能性もある。1287は比較的細身で、両側縁には顯著な整形時の階段状剝離が残る。先端は尖らない。75.8gをはかる。1289は丸味を持つ先端部に、やや湾曲気味の側縁を有する。厚みは一定しない。中央部両側縁には刃潰し状の痕跡と、階段状剝離が認められる。厚みを取るために両極打撃を試みたのだろうか。重量118.4g。ともに第1面土坑395出土。1288は石剣状を呈する完形品であるが、調整は極めて粗雑で、厚さも不揃いである。あるいは未完成かもしれない。基部端縁には原

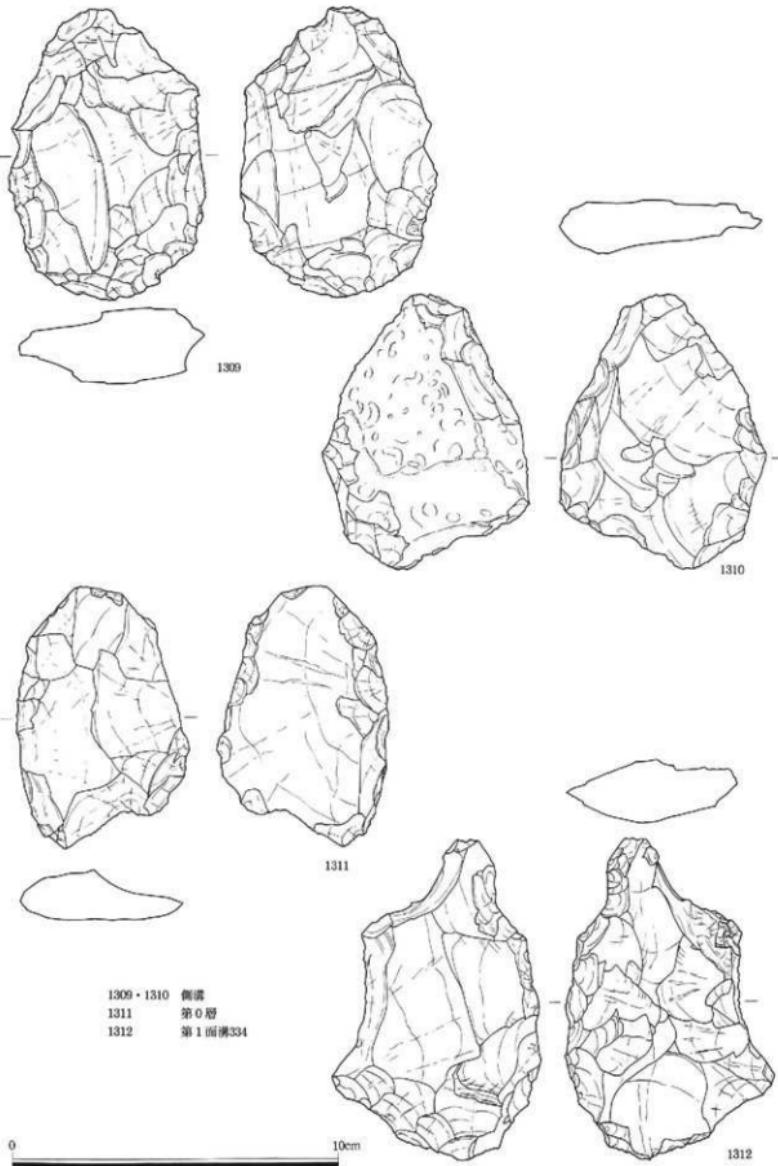


図87 95-2区 打製石器1

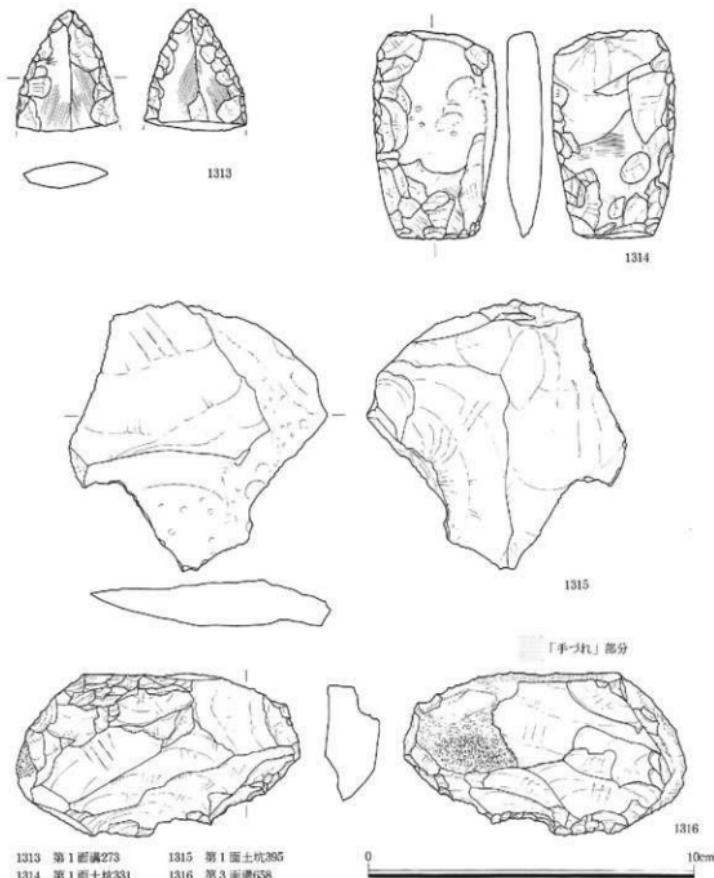
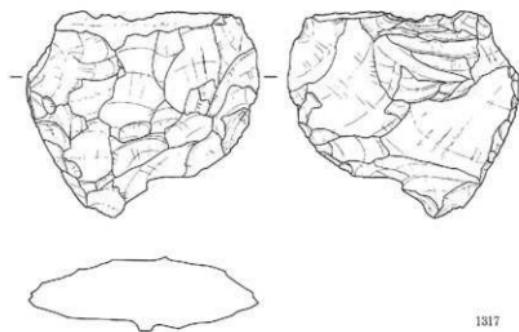


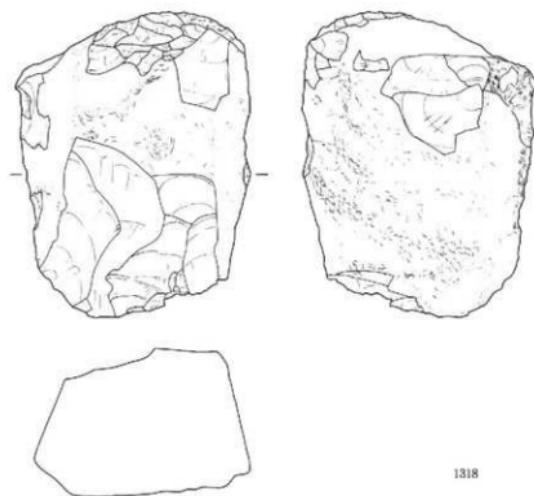
図88 95-2区 打製石器2

礫面が残る。116.6gをはかる。第0層出土。1290は当初未成品としたが、横長の石核の可能性もある。大型の横長剝片の周囲に調整を加える。側縁部に両極打撃を加えた結果、一侧縁に階段状剥離が顕著に残る。剝片の厚みを取り去ろうとしたのか。土坑188出土で、256.4g。

成品中最も出土点数の多いスクレイパーは、代表的なものを12点図示した。1291・1292は、小型の横長剝片を用いた刃器で、第0層出土の1291は両面調整、土坑188出土の1292は片面調整を施す。それぞれ4.0g、5.5gをはかる。1293・1294・1296～1298は横長剝片を素材とし、刃部を作るに際しては両面調整を行う。1293は唯一打点側に調整を加えて、刃部を作出する。また把手部のような突起を持つ。第1面溝334出土で、16.7gをはかる。1294の刃部はかなり鈍角である。1294・1296・1297・1298の重量は、それぞれ37.7g、27.2g、100.6g、88.5g。1295は背面側に原礫面を残し、腹面側は全面に調整



1317

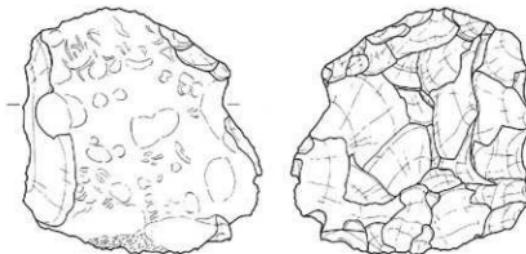


1318

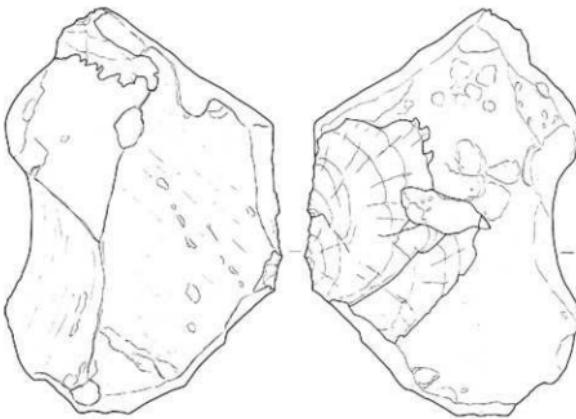
1317・1318 第0刷



図89 95-2区 石核1

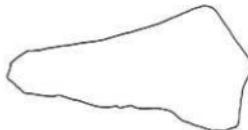


1319



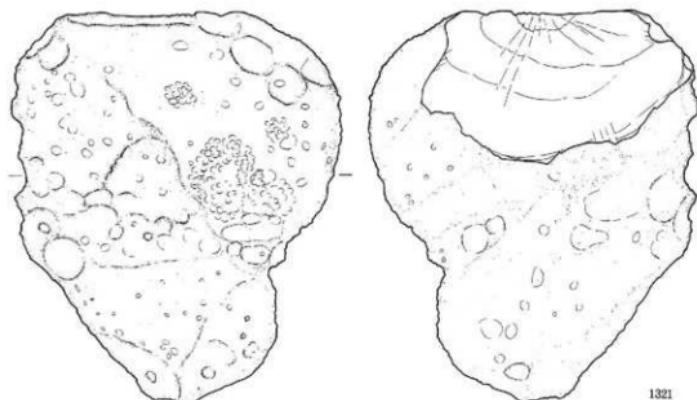
1320

1319 第0層
1320 第1面土坑395

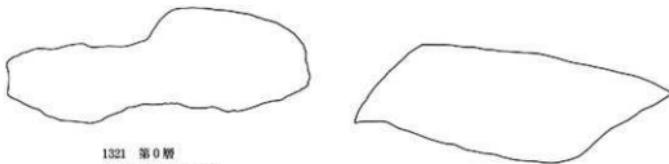


0 10cm

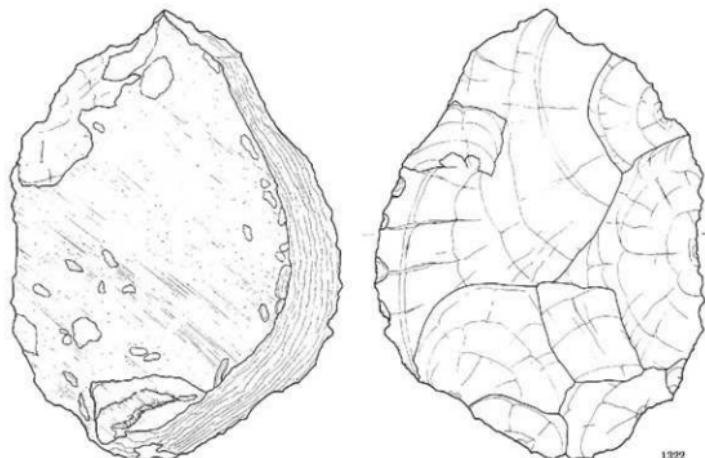
圖90 95-2區 石核2



1321



1321 第6層
1322 第1面土坑286



1322



図91 95-2区 石核3



図92 95-2区 石核4

が加わる。刃部調整を施した部位は、著しい擦痕のため、丸味を持つ。40.9g。いずれも第0層出土。1299は両腹面の素材を用いたもので、刃部を作出する二側縁はともに片側調整である。34.3g。背面側全面に原礫面を有する剥片を素材としたものも多い。1300は、腹面側に微細な剝離痕跡が部分的に残る。あるいは剥片を刃器として使用した結果、生じた剝離かも知れない。50.9g、第0層出土。これに對して1301は、両面から両側縁に粗雑な調整剝離を施し、刃部を作る。85.9gをはかる。また1302の場合、背面側に部分的な剝離痕のある素材に、片側腹面に調整を加え、成品とする。背面側に残る原礫面の關係上、かなり厚みを持つ。第0層出土で、143.8gをはかる。これら3点は、いずれも縦長剥片を素材とする点で共通する。

楔形石器は6点図化した。1306は対向する両側縁に剝離痕を有し、1305・1307のように主要剝離面を残すもの、1304や1308のように階段状剝離が発達したものなど様々である。

図87には、成品とも未成品とも判断しかねる一群を図示した。1309は両面とも周囲から剥片剝離を繰り返し、一見石核状を呈する。しかし側辺や基辺には階段状剝離が顯著で、やや尖り気味の「先端部」を持つことから、全体を調整剝離した可能性がある。139.1gをはかる。1310も腹面側の剥片剝離を繰り返し、背面側も一部に剝離が及び、全体的に偏平な感がある。また側辺には擦痕が顯著に残る。83.4gをはかる。1311は横長剥片の縁辺に調整をえたもので、尖頭器の未成品かも知れない。72.4gをはかる。1312は、両面とも周囲に著しい調整剝離が施され、石匙状の把持部を持つ。110.2gをはかる。

図88には特殊なサヌカイト成品を図化した。1313は磨製石剣の先端部破片で、両面から調整剝離を行って刃部を作り、研磨を施す。研磨途中の破損品であろう。第1面満273出土。1314は原礫面をうまく利用した素材に、研磨などの調整を加え、扁平片刃石斧としたものである。第1面土坑331出土。1315は両極打撃によって生じた剥片。第1面土坑395出土。1316は両極打法による石核を転用した敲石で、「手づれ」のような摩耗が認められる。第2面満658出土。

石核には、1317や1318のように両極打撃によって剥片剝離を試みたものがある。1317の場合対向する両側縁に階段状剝離がみられ、楔形石器と見分けがつきにくい。121.7g。1318の原礫面には敲打痕が、対辺には階段状剝離が残る。478.4g。1319は、腹面側に頻繁繰り返された剝離が観察できる。188.2g。これに對し、1320や1321の場合、わずか1~2回加撃して剥片を獲得したのち放棄したらしい。特に1321は背面側に敲打痕が残ることから、敲石に転用されたと考えられる。また1322は大型の剥片を石核としたもので、腹面側には主要剝離面が残存する。492.0g。1323は重さ5kgの立方体に近いサヌカイト礫で、かなりの部分で不規則な打撃を加え剥片を獲得している。第1面土坑323出土。

磨製石器 95-2区では磨製石器は、第0層以下の全層位・遺構面から合計126点出土し、その内訳は、紡錘車3点（未完成1点を含む）、石矛1点、石鎌1点、石斧18点、砥石および台石25点、敲石類14点、石庖丁64点である。出土点数の多い層位・遺構に、第0層の48点（紡錘車1点、石矛1点、石斧4点、砥石類5点、敲石類4点、石庖丁33点）、第1面土坑188の23点（石斧5点、砥石類7点、敲石類3点、石庖丁8点）、第3面落込み848の17点（石斧4点、砥石類6点、敲石類3点、石庖丁4点）などがある。

このほか、サヌカイト以外の石材・石核17点、使用痕のある砾20点、さらに後段に述べる石庖丁未完成18点と剝片石器2点がある。

図93-1325・1326は紡錘車である。1325は断面形が偏平なもの。半分だけ現存し11.0gをはかる。第0層出土。1326は断面の中央部がやや厚みを増している。直径8mmの中心の孔の他にもうひとつ径5mmの孔がみられ、石材や断面形や孔の間隔から石庖丁の転用品の可能性がある。完形で25.6g。第1面土坑279出土。両者とも、表面および側面は平滑に仕上げられている。1327は両面のほぼ中央に穿孔途中の窪みがあり、石庖丁の破片を紡錘車に転用作業中のものと考えられる。18.9g。第1層出土。以上3点とも綠泥岩製。

1328はいわゆる石矛の破片と推定される。鏃は不明瞭で、側縁は刃部というほど鋭くはなく、基部に近い部分と考えられる。鏃の部分は刃と直交方向に、その両側刃に近い部分は刃と平行に研磨され、極めて平滑。幅60mm、厚さ12mm、現状で37.2gをはかる。粘板岩製。第0層出土。

1329は石鎌。完形品で、長さ148mm、厚さ16mm、重さ169.7gをはかる。直線刃形態で、刃部断面は紡

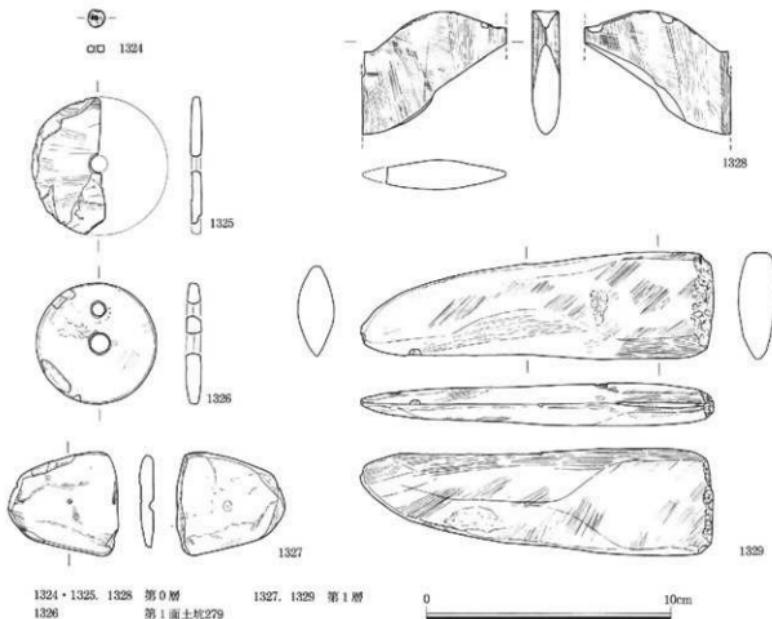


図93 95-2区 白玉・紡錘車・石矛・石鎌

錐形。基部の抉りはない。刃部・基部ともよく研磨されているが、基端には敲打痕が、基部下辺には緊縛痕らしい擦痕が残る。緑泥岩製。第1層出土。

磨製石斧は、太型蛤刃13点、偏平片刃およびそれに類するもの4点、抉入柱状片刃1点、計18点出土した。それらは側溝出土で層位不明の太型蛤刃1点および第0層の太型蛤刃3点と偏平片刃1点を除き、第1面土坑188から太型蛤刃4点と偏平片刃1点、第1面井戸386から偏平片刃に類するもの2点、第1面遺構403から太型蛤刃1点と唯一の抉入柱状片刃、第3面落込み848から太型蛤刃4点と、ひとつの遺構から複数がまとまって出土する状況がみられる。太型蛤刃の図化不能な小片1点以外すべて図示する。

図94-1330～図96-1341の12点は、太型蛤刃石斧である。図94-1330～1332は第0層出土。いずれも斑欄岩製の破片資料で、1330は28.1g、1331は61.4g、1332は75.3gをはかる。1332の現存する側縁部には若干の敲打痕がみられる。1333は側溝からの出土で層位は不明。基部と背面が大きく欠損しているが、比較的薄手の形態と推定される。図示した左側縁には刃潰れ痕がみられる。緑泥片岩製で213.2g。1334～1336は第1面土坑188出土。1334・1335は基部。1334の各側面はよく研磨されているが、基端・A面の径約6mm・B面の31×17mmの不整形の範囲に弱い敲打痕が残る。また、トーンをかけた部分に装着痕がみられる。粘板岩製で218.4g。1335も側面は滑らかに研磨されているが、基端には敲打痕が残る。和泉砂岩製で332.1g。1336は刃部で、使用による斜め方向の線条痕がみられ、刃先は刃こぼれし鋸歯状になっている。A・B面のほぼ中央には敲打痕も残る。斑欄岩製で316.4g。図95-1337は第1面ピット403出土。刃部側半分程度の現存と推定される。刃部に長軸にはば平行する線条痕がみられる。和泉砂岩製で542.6g。1338～図96-1341は第3面落込み848の出土。1338は基部の破片だが、二次的に使用され、A面でいう右側縁上端部の径約20mmの範囲に敲打痕が、同側縁下端の欠損部には細かな磨滅痕がみられる。基端はよく研磨され偏平になっている。和泉砂岩製で251.3g。1339は表面全体が平滑に仕上げられ、研磨痕や刃先の使用痕は明瞭ではない。玄武岩製で658.5g。1340は刃部と片側縁の残る資料だが、火熱を受け他の太型蛤刃石斧に比べ表面が荒れている。刃部には使用痕よりも研磨痕の方が明瞭にみえる。緑泥片岩製で174.5g。図96-1341は刃部・基部・B面側を欠き、火熱を受けている。基部側の切損面には二次的な擦痕が残る。輝石安山岩製で535.2g。

図96-1342・1343は偏平片刃石斧、1344・1345はそれに類する資料である。1342は第0層出土。ごく一部が欠けるが、全面極めて平滑に研磨されている。A面側の正面と刃面の境の稜はあまり強くなく、むしろB面側の基端に近い後の方が明瞭である。断面は中央部でやや厚みを増す。粘板岩製で28.8g。1343は第1面井戸386出土。片側縁と刃部のごく一部のみ現存する。各面ともよく研磨されている。左側に掲載した面の右側縁は、約25mmにわたって刃先と平行に研磨され角が取れている。側面からみると、基部よりも刃部がわずかながら厚くなり、完全な片刃ではなく添刃の痕跡的なカーブが残る。緑泥片岩製で21.8g。1344も1343と同じく第1面井戸386出土。厚さ7mmほど偏平なサヌカイトの周縁に剥離を施し、A面側の刃面とB面中央部を研磨している。A面には原研面の微細な窪みが多数残る。10.5gをはかる。1345は第1面土坑188出土の、厚さ2～3mmの薄い石材の一端に片刃を付けた小石器。緑泥岩製でわずか1.3gしかない。1344・1345とも小型の石斧に類似し、機能も同様と推定されるが、厳密には石斧に類別しがたい。

1346は当区唯一の抉入柱状片刃石斧。刃部を欠き、基部各所にも剥離痕がみられる。断面は丸みを帯び、抉り部の稜線もなだらかである。片麻岩特有の葉状構造と呼ばれる綱模様が明瞭にみえる。現状で316.7gをはかる。図95-1337とともに第1面ピット403から出土した。

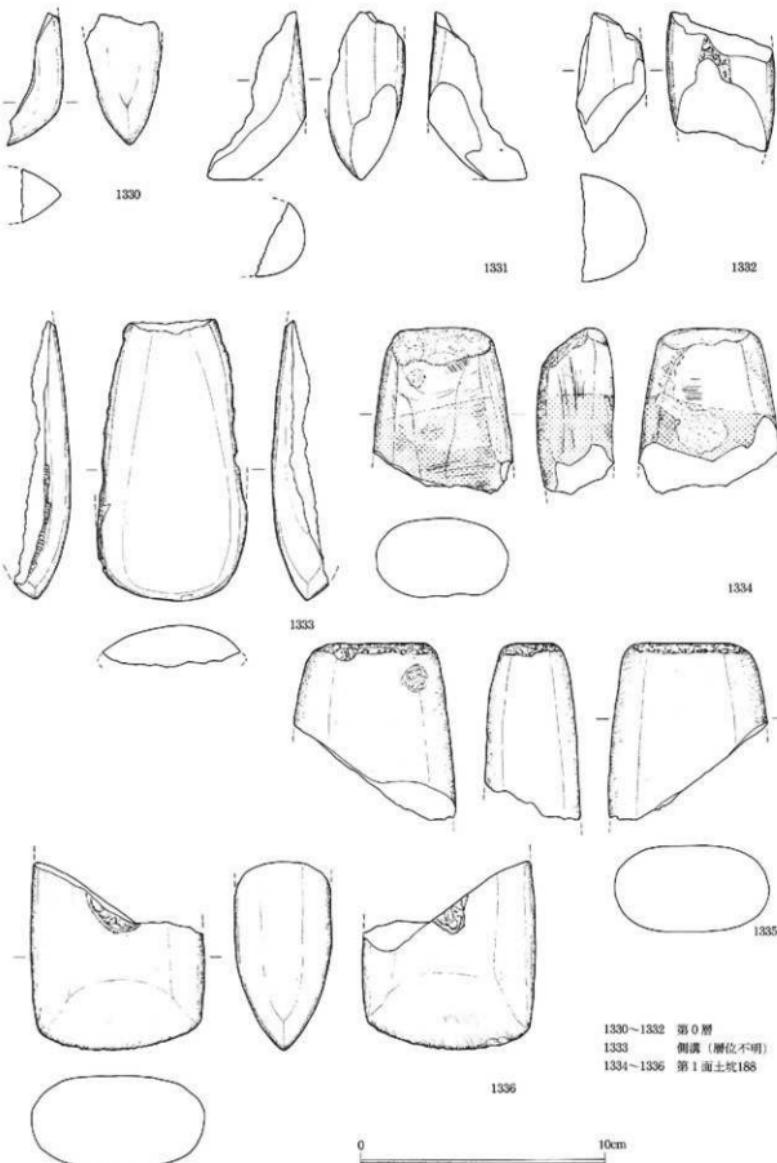
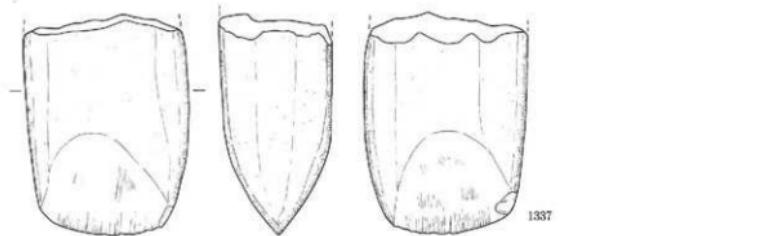
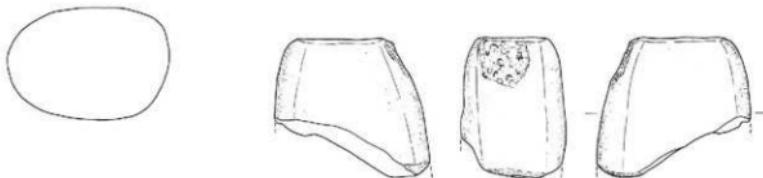


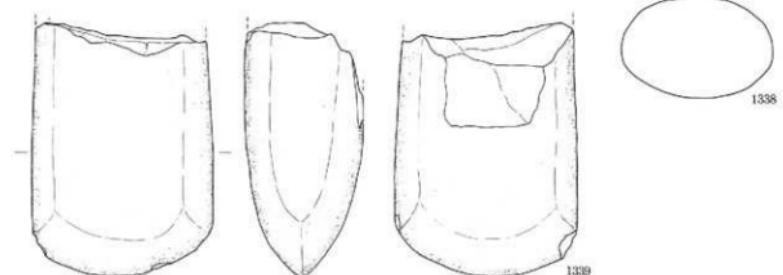
図94 95-2区 磨製石斧1



1337



1338



1339



1340

1337 第1面ビット403
1338~1340 第3面落込み818



図95 95-2区 磨製石斧2

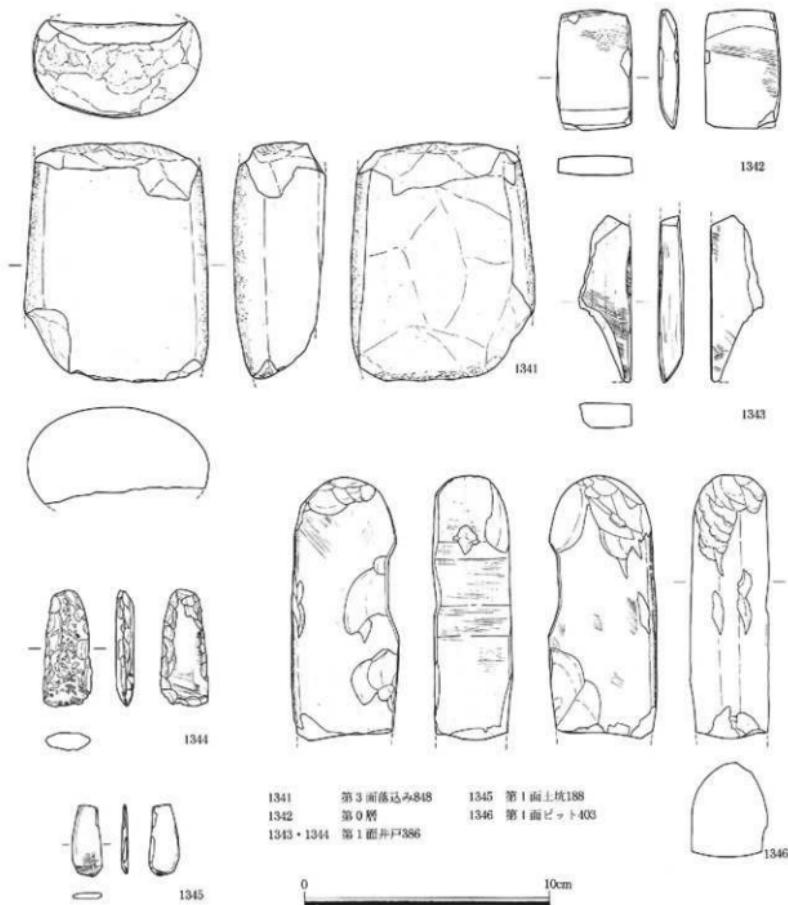


図96 95-2区 磨製石斧3

砥石は、比較的小型のものから大型で台石を兼ねたようなものまで多様である。各層・遺構から計25点出土し、とくに第1面土坑188に7点、第3面落込み848には6点まとめてみられた。

図97-1347~1349は第0層出土。いずれも砂岩製。1347は切損面以外は研磨されているが、砂岩のザラ感が残る。70.2g、1348のA面には2条の高まりが稜をなし、B面は窪んでいる。側面も研磨され平滑になっている。73.3g。1349は礫を転用したもので、図示した2つの面が砥石として使用されている。505.8g。1350は第1面土坑188出土。A面に上下方向の研磨痕が残り、全体に花崗岩特有の粒子がよくみえる。212.8g。1351は第2面ピット688出土。A面中央部は研磨の結果、上下方向に溝状に窪む。A面両側縁、側面中央部の径約32×25mmの範囲、さらにB面にも20×10mmの範囲に敲打痕がある。

砂岩製で246.2 g。図98-1352～1354は第3面落込み848出土。1352は偏平な和泉砂岩の礫を利用し、平原一面を砥石としたもの。現状で1156.8 gあり、やや大型で台石兼用とも考えられる。1353は板状の片麻岩製で153.8 g。表面の状況から砥石に類別するが、研磨痕よりむしろ葉状構造の方が明瞭である。1354は台石を兼ねた砥石と推定される。火熱を受け、表面に煤が付着し、ひびが入りその結果剥落した部分もある。砂岩製で1266.5 gを有する。

敲石には、擦痕や敲打痕がみられる磨石や凹石と機能や形態の区別がつかないものもあるため、三者を一括した。これら敲石類は、第0層から4点、第1面土坑188から3点、第2面土坑593から4点、第3面落込み848から3点、合わせて14点出土した。

図99-1355は球状の敲石である。側面からみると幅が上面に広く下に狭くなっている。A面とB面の曲面形状をも加味すると、大型始刃石斧の転用品と考えられる。敲打痕は全周縁に顕著で、さらにA・B面の中央部にもわずかに認められる。斑鳩岩製で342.1 g。第0層出土。1356・1357は、いずれも第1

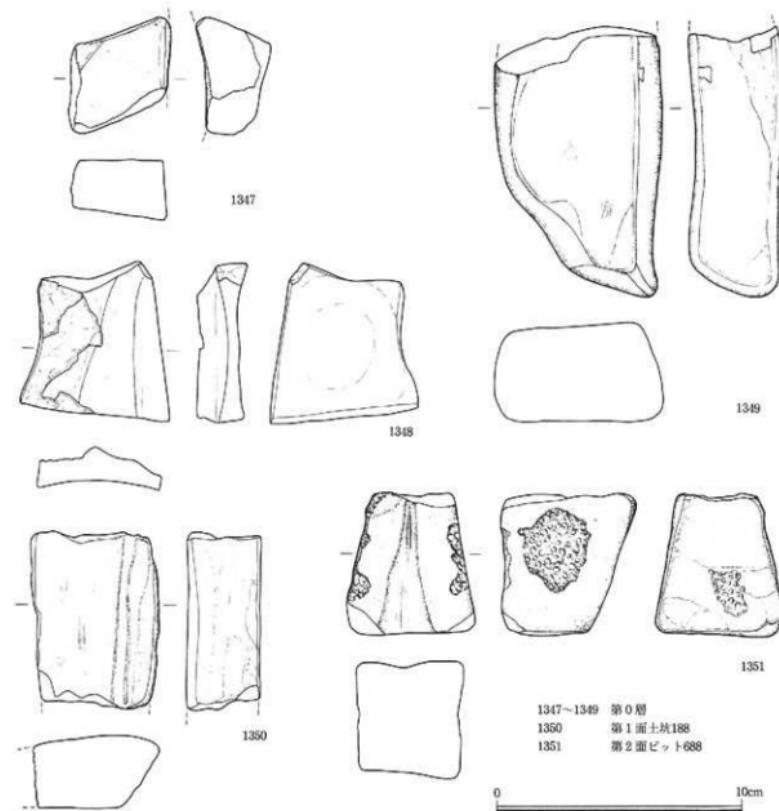
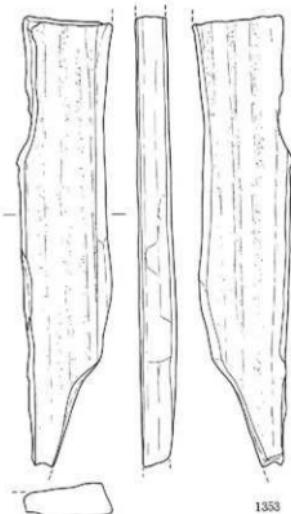
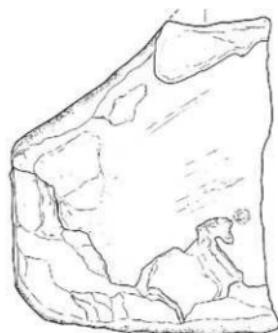
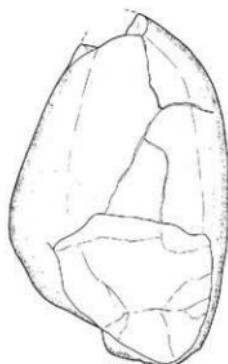
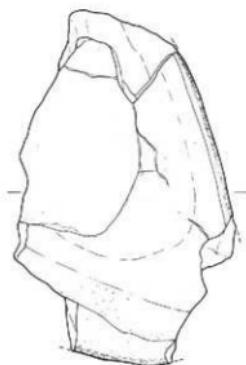


図97 95-2区 砥石1



1353



1354

1352~1354 第3面落込み848

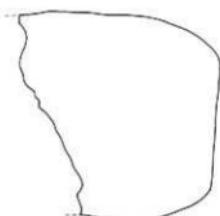


図98 95-2区 磨石2



1355 第0層
 1356・1357 第1面土坑188
 1358 第1面土坑386
 1359 第3面落込み848

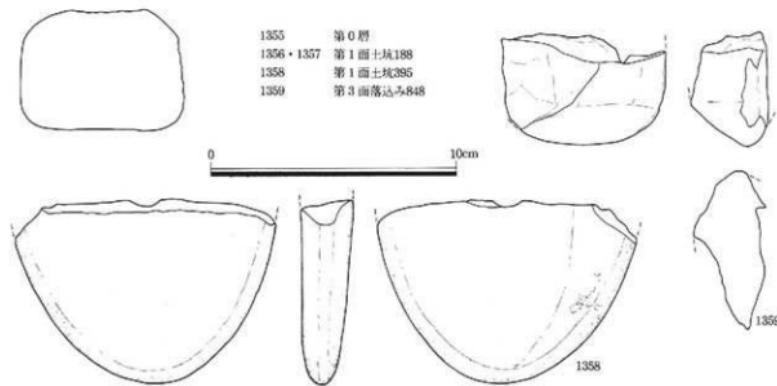


图99 95-2区 敲石・砾

面上坑188出土の砂岩製の敲石。1356は自然の円礫の一部に敲打痕がみられる。230.6 g。1357も円礫転用の敲石で、敲打痕はA面の中央部と右下の側縁に比較的広範囲にあり、B面と側縁の一部にもみられる。529.1 g。

1358・1359は、磨製石器ではなく自然礫の例である。1358は円礫、1359は火熱を受け表面がはじけた礫である。これら自然礫は整理段階で92点を数えたが、現地で取り上げなかった礫も多数存在した。95-2区の堆積土中には、元来礫は含まれていないので、何らかの力によって当区に移動されたものと考えられる。

石庖丁は、第0層からの33点をはじめ、以下の各層・遺構から小片を含め計64点出土した。うち、図化可能な34点を、層位・遺構ごとに、完形品（直線刃→紡錘形→外彎刃）→破片資料の順に掲げる。片刃の場合、刃の付く面を基本的にA面（左側）とする。

図100-1360～図101-1371は第0層出土。図示した12点はいずれも緑泥岩製である。1360は直線刃半月形。刃部はA面の左半部で刃こぼれし、背部中央には潰れ痕が残る。A面では紐孔間に、B面では背部に向けて紐擦れ痕がみられる。62.3 gをはかる。1361の刃先はほぼ直線だが、A面でいうと右側でやや外彎する。背部中央に潰れ痕がある。B面の紐孔の背部側にわずかに紐擦れ痕が認められる。58.2 g。1362は梢円形で、刃・背部ともに広い範囲で潰れている。56.9 g。1363は隅丸長方形に近い形態だが、刃先は内彎気味である。9 mmと比較的厚い。明瞭な片刃で、B面側の特に左半部には刃が付けられていない。B面側に偏り背潰れ痕がみられる。56.1 g。1364は直線刃半月形の破片。A面の左の紐孔に接してさらに穿孔の痕がある。B面では剝落部分が広い。現存率約60%で53.5 g。1365も直線刃半月形。欠損した刃の一部が潰れている。現存率約70%で39.0 g。1366は両端部を欠く。厚みがあり、直線の明瞭な片刃が付く。A面でいうと左側に刃・背潰れ痕がある。現存率約70%で57.7 g。1367は直線刃の刃部と紐孔の高さの切損部とが潰れたもので、両端も欠く。50.7 g。図101-1368は端部片。研磨痕が縦横に走り、表面は極めて平滑である。34.8 g。1369は片刃の直線刃半月形の一部。刃部を除くA面が広く剝落している。B面の背部沿いの稜線付近には原礫の微細な窪みが残る。15.3 g。1370も直線刃半月形と推定されるものの中央部。片刃で刃部には刃先と平行な研磨痕が明瞭にみえる。B面には3つ目の紐孔穿孔中の痕跡がある。21.0 g。1371も直線刃半月形の中央部。背潰れ痕が顕著。B面はほとんど剝落しているので図示しておらず、A面の一部も剝落している。20.8 g。

1372～1375は第1面上坑188出土。1372は内彎気味で片刃の直線刃半月形。緑泥岩製。現存率約80%で38.9 g。1373は小振りの梢円形。泥岩製。現存率約80%で40.3 g。1374は刃先を水平に図示したが、紐孔の配置からすると外彎刃半月形の可能性もある。現存する背部に潰れがみられる。緑泥岩製で45.1 g。1375は紐孔部分と一端で欠損し、刃・背部ともに潰れている。緑泥岩製で29.9 gをはかる。

1376は第1面上坑304出土。典型的な梢円形。表面は極めて平滑に、刃部は刃先と平行に研磨される。ごく一部が欠けるが、周縁に潰れはない。粘板岩製で58.6 g。

1377～図102-1382は第1面上坑395出土。1377は直線刃半月形の完形品。片刃の刃部に潰れないが、背潰れ痕がみられる。紐孔はいびつで、紐擦れ痕がA面の紐孔間とB面の背部に向けて残る。緑泥岩製で44.6 g。図102-1378・1379も直線刃半月形だが、紐孔部分と一端で欠損している。両者とも刃・背部の潰れない。1378は粘板岩製、現存率約70%で44.8 g。1379は緑泥岩製、現状で44.6 g。1380は紐孔の位置とB面右側に残る刃部稜線とB面左端の背部稜線から、もともとは紡錘形であったと推定できる。とすれば、刃部はその中央部がかなり打ち欠かれており、その一部に刃潰れ痕がみられる。背部も

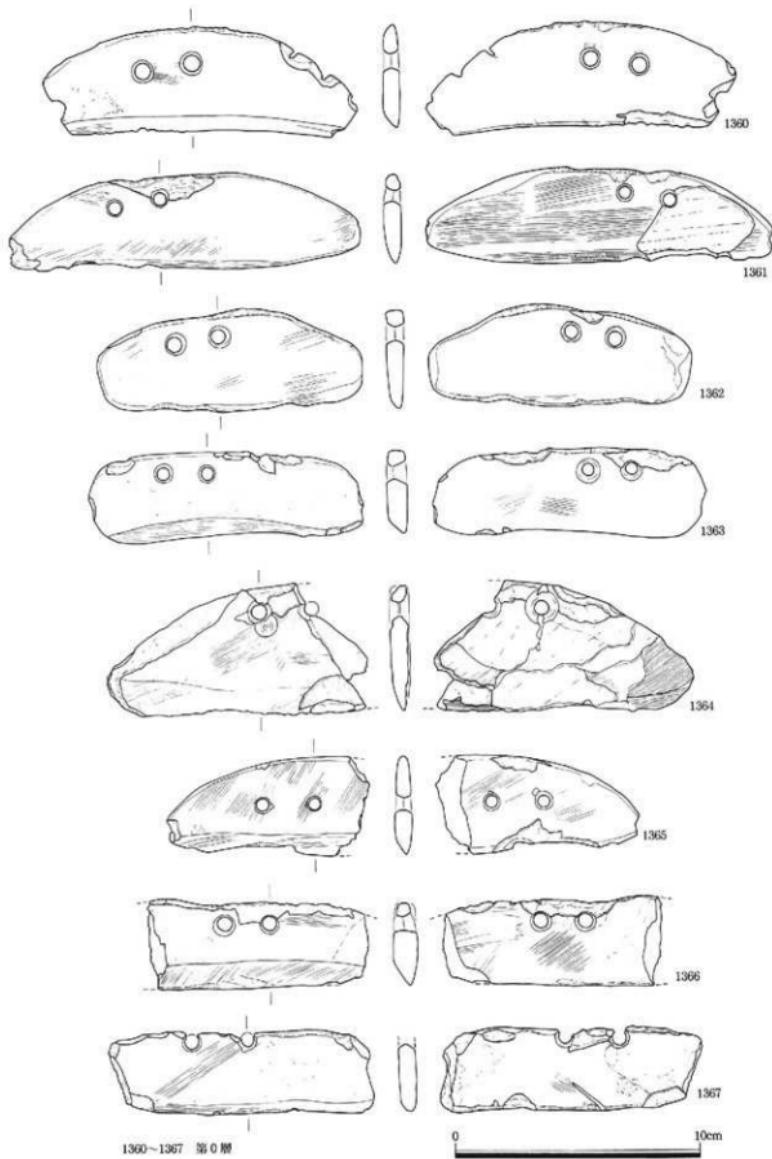


图100 95-2区 石庖丁1

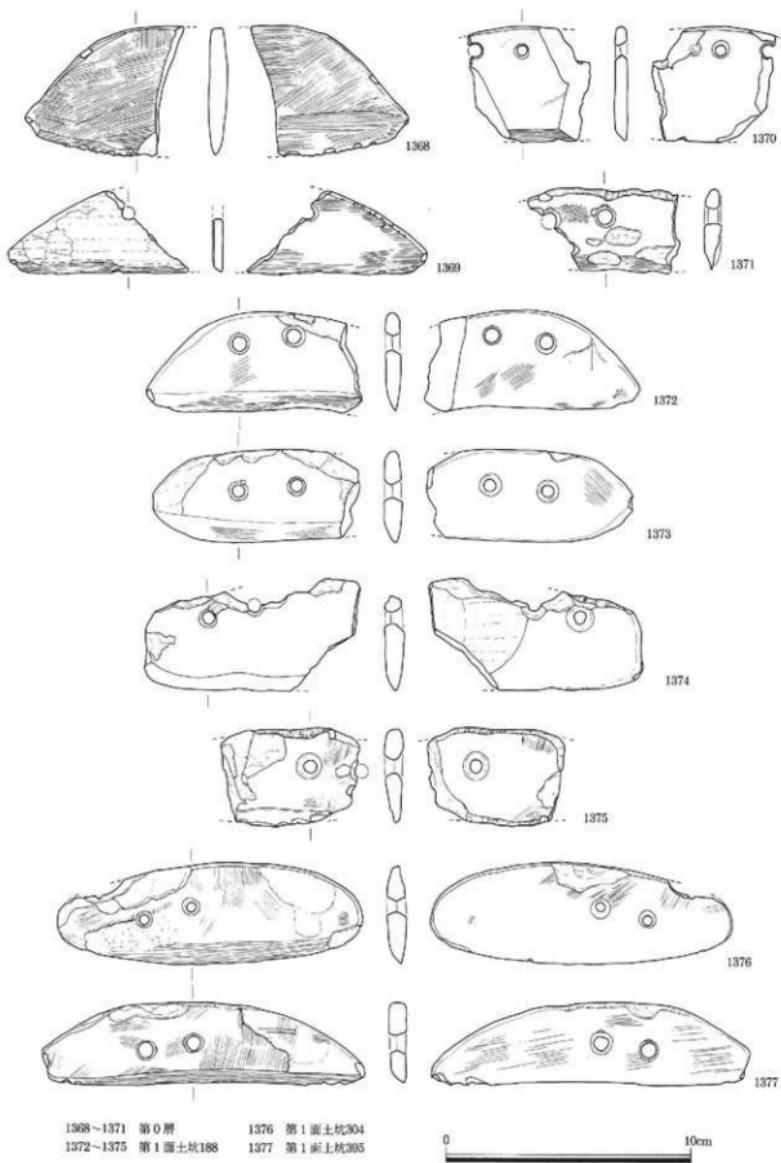


図101 95-2区 石施丁2

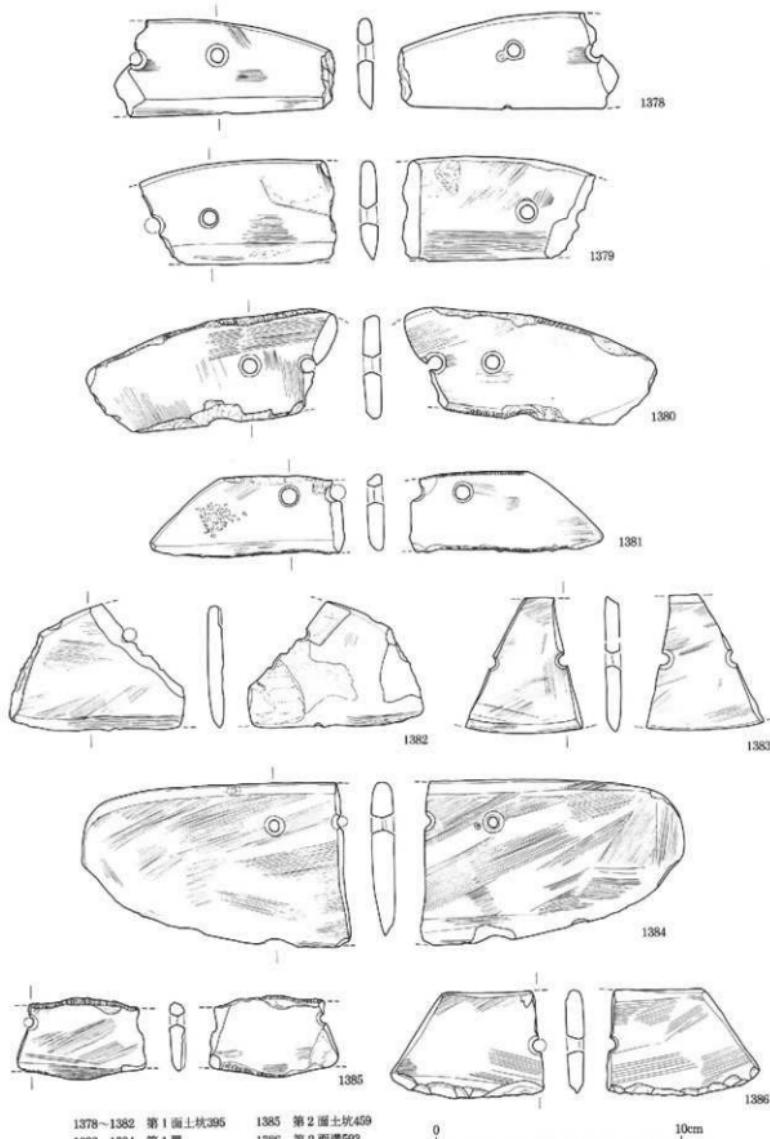


图102 95-2区 石庖丁3

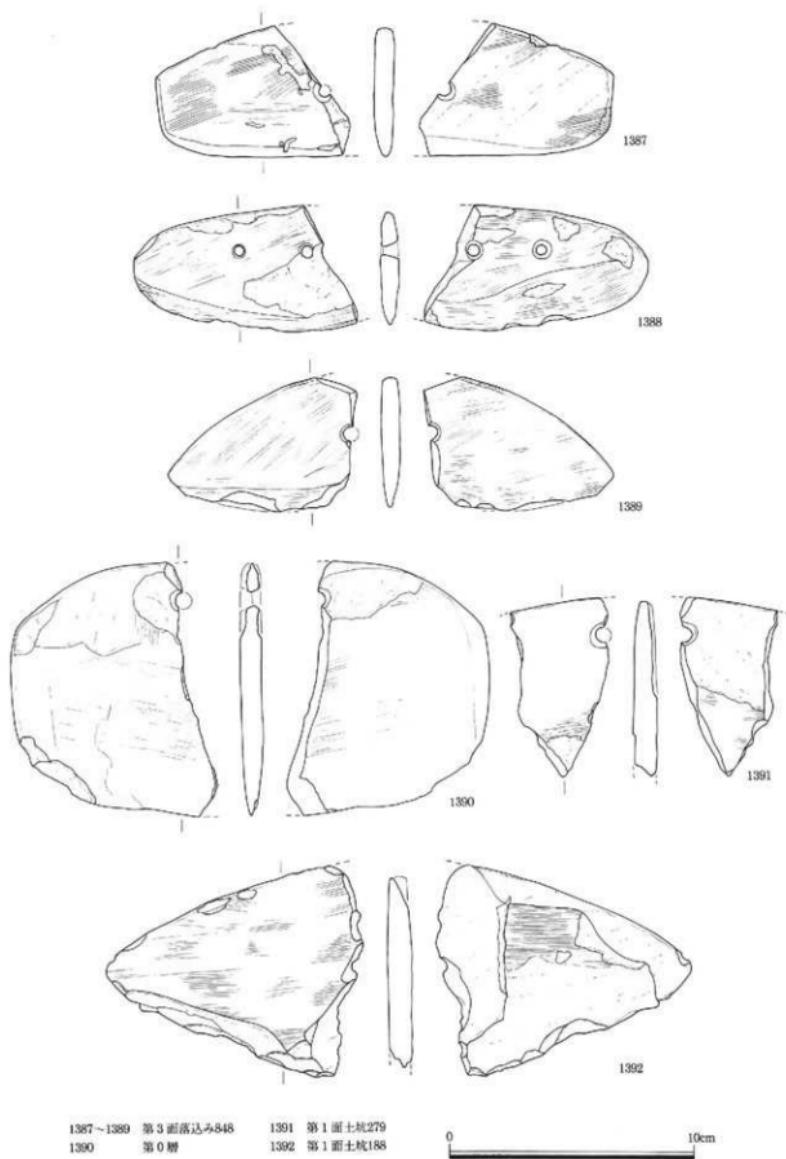


図103 95-2区 石庵丁4

広い範囲で潰れている。A面の左側の紐孔の外孔は丸ではなく七角形に近い。頁岩製。現状で58.2g。1381は刃部の稜線から直線刃半月形と考えられる。外彎していたと想定される背部は刃先と平行になり、そこに背潰れ痕がみられる。刃先も潰れている。A面左側には径約12mmに敲打痕が残る。緑泥岩製で29.9g。1382は直線刃半月形または紡錘形の一部。緑泥岩製。現存率約30%で32.4g。

1383・1384は第1層出土。1383は椭円形または外彎刃半月形の孔間部。A・B面、刃面、斜めになつた背部ともよく研磨されている。泥岩製で20.5g。1384はやや大型で両刃の外彎刃半月形。A・B面は斜め方向に研磨されている。頁岩製。現存率約60%で103.8gをはかる。

1385は第2面土坑459出土。刃および背潰れ痕のある小片。緑泥岩製で21.8g。

1386は第2面溝593出土。刃部が剥離されているので一応背部を水平に図示したが、本来の形態は不明。安山岩製で30.8g。

図103-1387～1389は第3面落込み848出土で、いずれも破片。1387は両端の切れた直線刃半月形で、両刃気味。砂岩製。現存率約40%で41.1g。1388は紡錘形。研磨痕がよく残る。安山岩製。現存率約70%で43.1g。1389は刃部に欠損が多く、背潰れも一部にみられるが、直線刃半月形と推定される。A・B両面はよく研磨される。粘板岩製。現存率約40%で42.2g。

1390～1392は大型の石庖丁。1390は類例から単孔の可能性もある。現状で幅104mm、厚さ9mm、重さ125.4g。緑泥岩製。第0層出土。1391は小片で全体像がうかがえないが、厚さが10mmもあり、背部から刃部側に約7cm寄った切損部でも厚みが減じないので、大型石庖丁に類別した。緑泥岩製で38.1g。第1面土坑279出土。1392は刃部を欠くので研磨痕が水平方向になるように図示したが、その角度に疑問が残る。背部とA面はよく研磨されているが、B面の研磨は一部に止まる。粘板岩製で98.3gをはかる。第1面土坑188出土。

以上の磨製石器のほかに、第0層から第3面の遺構までの各層位・遺構面から、サヌカイト以外の石材や石核が17点、使用痕のある砾が20点出土している。さらに、先述の自然砾92点以上が存在した。

石庖丁未完成 石庖丁未完成品は第0層から第3面の遺構まで計18点出土し、うち14点を図化した。既述の磨製石器類は器種ごとに原則的に上層出土のものから順に掲載したが、石庖丁未完成品については製作工程を意識して配列する。なお、個々の資料の出土層位・遺構は図の注記を参照されたい。

石庖丁の製作工程については多くの研究成果があり、3ないし7程度の段階に分けられているが、論者によって工程の細分レベルが異なったり微妙に前後したりする。作業仮説として工程を細分することには異論はないが、実際に当区の未完成品にあたる限りでは次の4工程程度に整理しておくのが妥当と考える。

工程I：原砾から素材を取り出す〔素材剥片を準備〕

工程II：剥離によりおおまかな外形を作る〔成形剥離、調整剥離〕

工程III：研磨により形態を整える〔研磨〕

工程IV：石庖丁の機能部を付加する〔穿孔、付刃〕

工程Iは、当区出土資料では判然としない。具体的には、結晶片岩、粘板岩、安山岩などで、石庖丁の素材となりそうな大きさや形態の石材を見いだせなかった。

工程II、剥離段階の資料は図104-1393～1399である。1393は直線刃の石庖丁を想定して図示した。A面の全周とB面の背部以外の周縁に剥離が施されているが、素材面が広く残りその意味で工程Iに近い資料である。頁岩製で276.7gをはかる。1394は素材を板状に剥離した段階のもので、B面は層理面

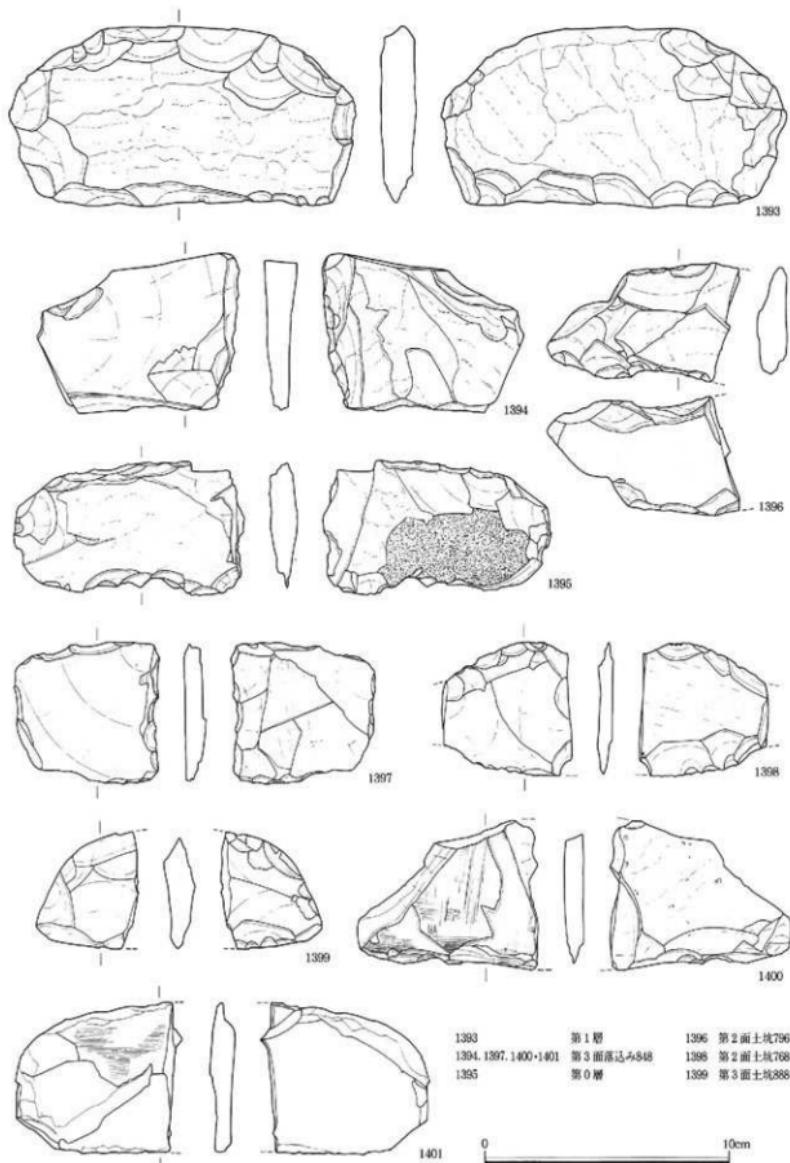


図104 95-2区 石庖丁未成品 1

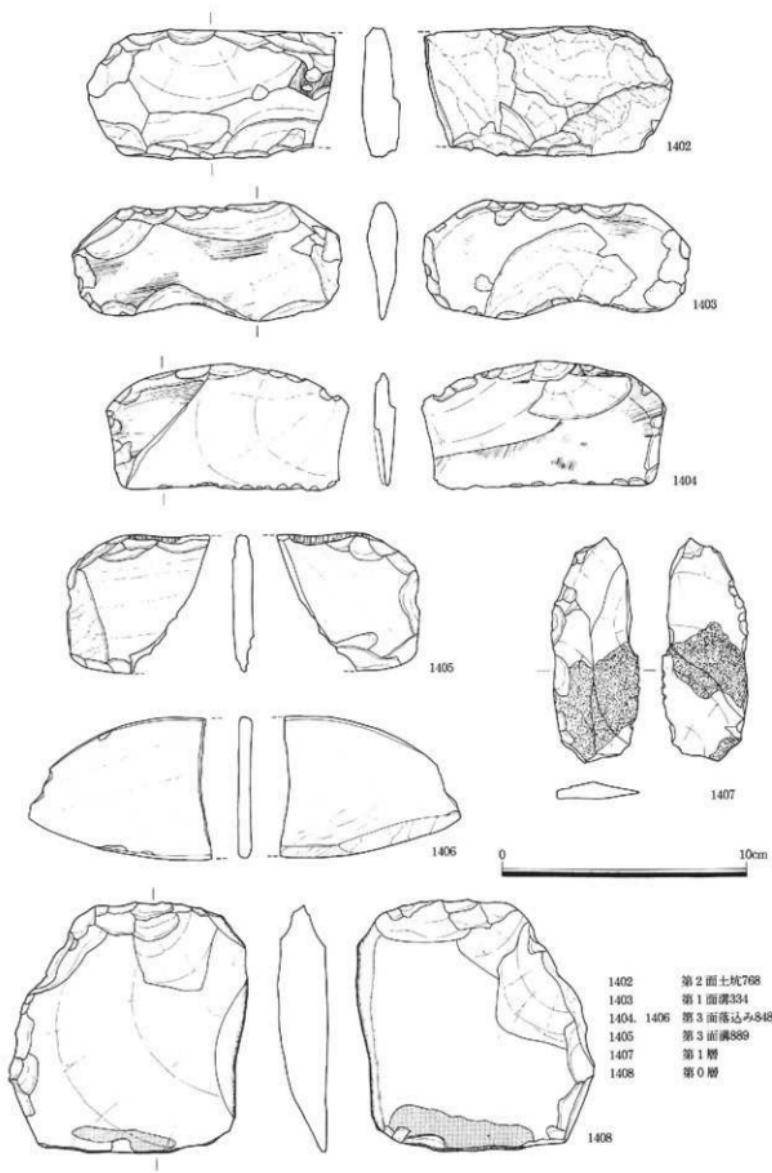


图105 95-2区 石庖丁未成品2·剥片石器

で剥離している。断面も完成品に比べ分厚く、この表面積で93.3gある。粘板岩製。1395・1396は粗い剥離が施されたもので、A・B両面とも層理に沿って割れている。断面は一応紡錘形を呈するがまだ分厚い。1395のB面の一部に黒色物質が付着している。両者とも粘板岩製で、1395は68.5g、1396は51.0g。1397～1399は剥離の工程が進み、平・断面とも石庖丁の形態に近づいたものである。1397と1398のB面には層理面が残り、1399は全体に成形剥離が施されている。1397は粘板岩製で36.6g、1398も粘板岩製で27.2g、1399は頁岩製で27.7gをはかる。

工程III、研磨の施された資料は1400～図105～1404である。1400のB面には層理面が残り、A面の上半部が縦方法に、下部が刃部と平行に研磨され、そのあと刃部を作り出す剥離が加えられている。粘板岩製で43.3g。1401は火熱を受け表面が観察しにくいが、A面の一部に横方向の研磨がみられる。粘板岩製で58.3g。1402は全体に成形剥離が施され、B面の大部分は層理に沿って剥離している資料だが、A面のごく一部に研磨が認められる。形態や厚さは、工程IIの1395に類似する。ただし、この厚さの段階から研磨されていることを重視すると、石庖丁ではなく石剣など他の磨製石器未完成品の可能性も考えられる。粘板岩製で110.0g。1403・1404は研磨が進んだ段階の資料である。1403は横方向に研磨されているが、この状態で使用されたらしく背部と刃部の内側した部分に弱い線条痕がみられる。片麻岩製で85.7g。1404は両端の切れた直線刃半月形態で、A・B両面とも現存する表面は平滑に研磨されているが、その工程中にA面の大部分とB面の上半部が剝落してしまったと推定される。片麻岩製で43.9gをはかる。

工程IVに該当するのは1405・1406である。1405はA・B両面が粗く研磨されている。周縁は剥離され、背と推定される部分には潰れ痕がみられる。粘板岩製で42.7g。1406はA・B両面は粗い研磨に止まるが、彎曲した背部は平滑に仕上げられ、さらに主にB面側に研磨により刃部が付けられつつある。現存率約40%で、33.4gをはかる。表面に鉄分が沈着し観察が困難だが、輝石安山岩製と考えられる。

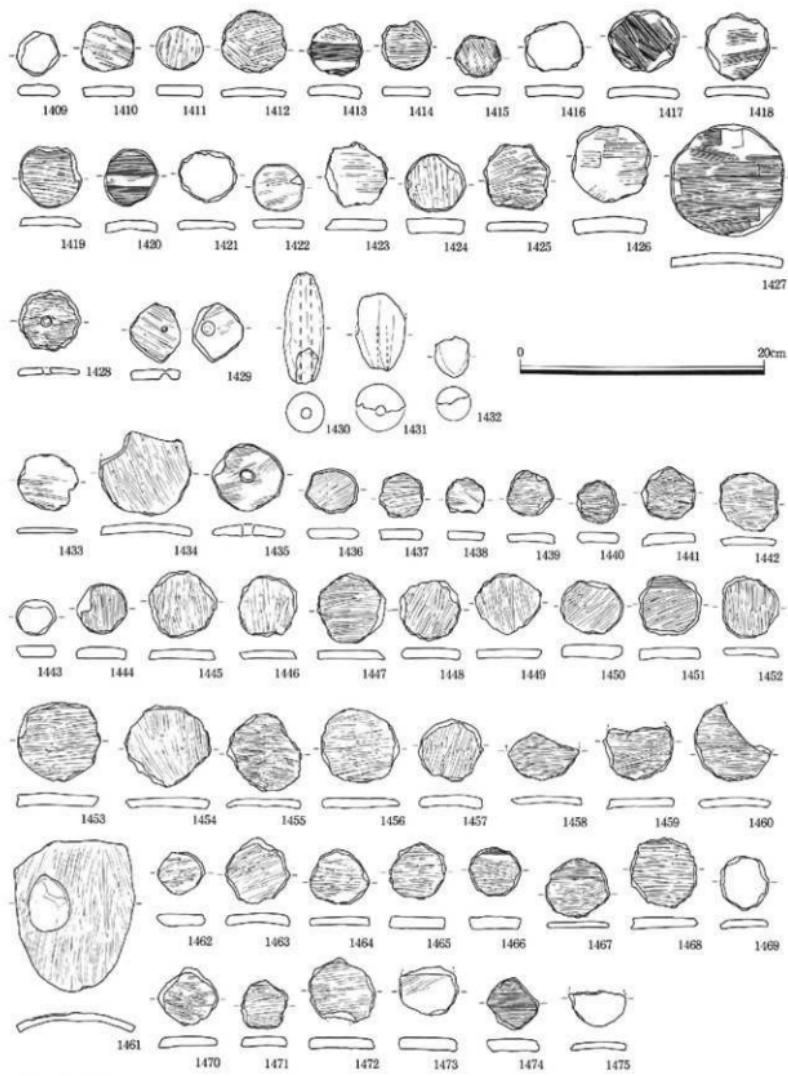
なお、当区では穿孔過程の石庖丁未完成品は出土していない。

サヌカイト製以外の剥片石器 2点出土した。図105～1407は粘板岩製のスクレイバーで、26.5g。A面の下半とB面の中央部と下端に黒色物質が付着している。第1層出土。1408は、いわゆる粗製剥片石器の範疇に入ると考えられる資料である。A面の右側縁とB面の大部分に原縫面が残る。A面でいうと上部から左側縁にかけて剥離が施され断面が尖っている。しかし、むしろ原縫を割った時にできた下の方を刃として用いたらしく、現状では刃部は潰れているが、トーンをかけた部分が光沢をもつ。頁岩製で、314.0gをはかる。第0層出土。

第5節 その他の遺物

白玉 図93～1324は滑石製の白玉で、直径7mm、厚さ3mm、孔径0.5mm、重さ0.2gをはかる。第0層から出土。95-2区唯一の玉類である。

土製品 95-2区からは、土製円板108点、紡錘車7点、土錘13点、土弾3点が出土しており、第1面からの出土が最も多い。土製円板（図106～1409～1427・1433・1434・1436～1460・1462～1475・図107～1476～1482・1487・1488・1490～1503）には、破断面を研いて成形したものが少數みられる。紡錘車には土器片を打ち欠き穿孔したもの（図106～1428・1429・1435）と、焼成前に穿孔したもの（図107～1485・1504）とがあり、図106～1429は焼成後の穿孔を途中で止めている。土錘には、管状土錘（図106～1430・1431・図107～1486・1506～1508）と棒状土錘（図107～1484）の二形態がある。図106～1432・



1409~1432 第0層
 1433 第1面土205
 1434・1435 第1面土334
 1436・1437 第1面土戸386
 1438 第1面土枕110
 1439 第1面土枕130
 1440~1461 第1面土枕188
 1462 第1面土枕222
 1463 第1面土枕238
 1464・1465 第1面土枕279
 1466~1468 第1面土枕281
 1469 第1面土枕303
 1470 第1面土枕314
 1471 第1面土枕333
 1472 第1面土枕349
 1473 第1面土枕388
 1474 第1面ビット196
 1475 第1面ビット327

図106 95-2区 土製品1

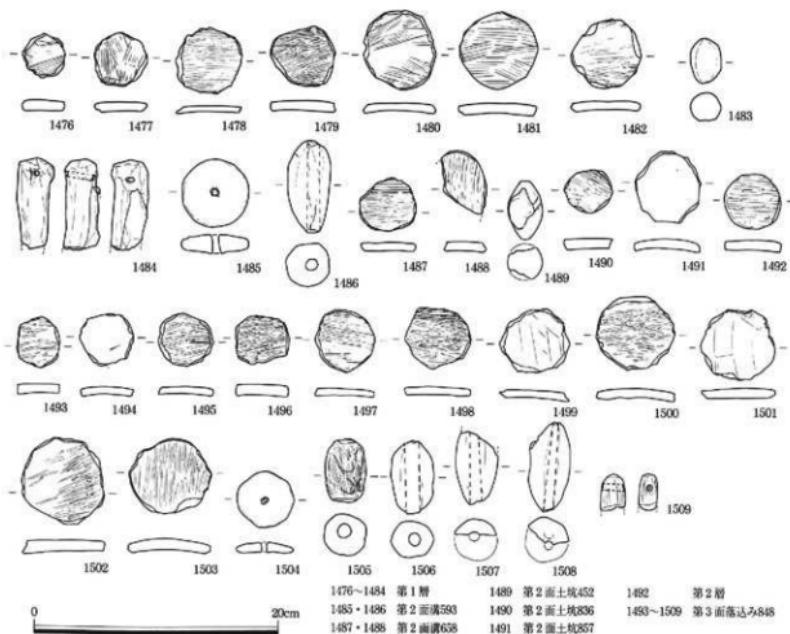


図107 95-2区 土製品2

図107-1483・1489は土弾。図106-1461は土器を打ち欠いて成形したもので、用途等は不明。

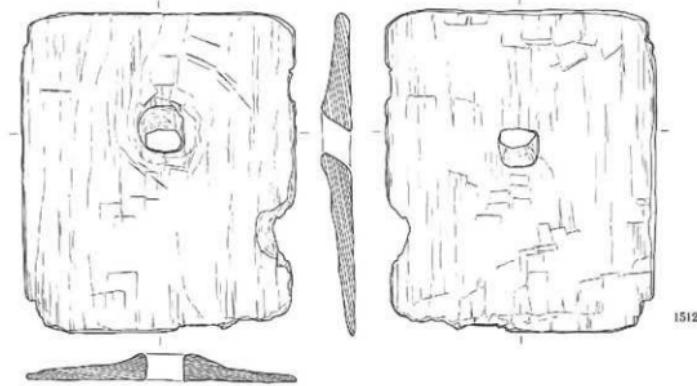
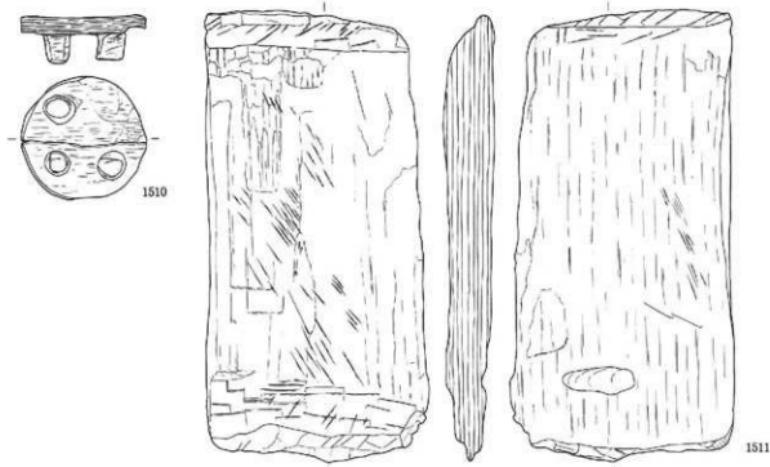
木製品 第0層～第3面にかけて19点出土し、図化した6点と土坑395から出土したモッコ状木製品の他は全て木片である。

図108-1510は第1面土坑188出上で、材質はヤマグワである。脚は本来4脚のはずだが、1つ欠損している。側面の立ち上がりがみられず、容器として機能していたとは考え難い。また、本来容器であったものを台に転用したとするには、側面に加工痕がなく平滑である為ここでは四脚付台とする。

図108-1511・1512は第1面土坑395出土。1511は鍼の未製品であり、工具痕が少し残る。材質はアカガシ亞属。1512は隆起が小さく形態がほぼ正方形をなしており、薄手である事から、泥除と考えられる。ただし通常、泥除の木目は横方向であるのに対して、本例は縦方向である事から検討を要する。材質はアカガシ亞属。

図108-1513は第2面溝658出土の用途不明木製品で完形。2つの穿孔には、紐擦れなどの使用痕は観察の限りみられない。片面全体に赤色物質の付着あり。材質はモミ。

図109-1514・1515は第3面落込み848出土木製品。1514は高杯で、杯部の約1/3が残存。杯部の文様は、弥生時代前期の土器に通じ、両端を彫りくぼめた突带上に、沈線が3条めぐる。製作に輪轂を用いた痕跡は認められない。材質はヤマグワ。1515は広鍼の未製品である。隆起が真中ではなく片方に寄っていることから、製作途中に割れたものと考えられる。隆起の法量は長さ11.5cm、最大幅5.5cm、高さ



1510 第1面土坑188
1511・1512 第1面土坑395
1513 第2面溝658

0 20cm

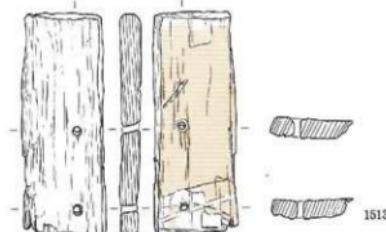


図108 95-2区 第1面・第2面出土木製品

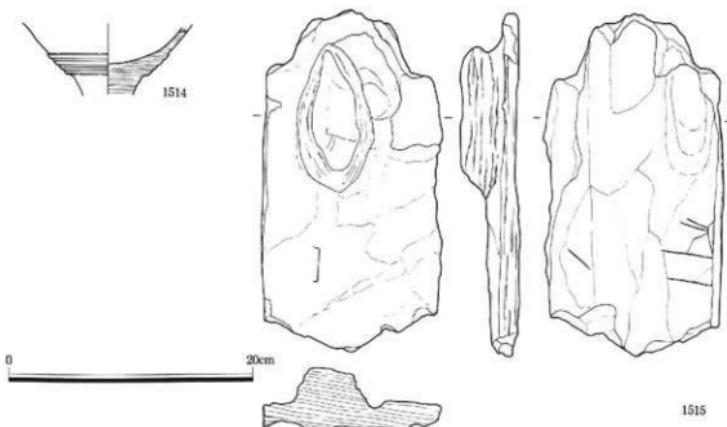


図109 95-2区 第3面落込み848出土木製品

3.0cmを測る。材質はアカガシ亞属。

モッコ状木製品は、図12に図示したように第1面
土坑395底面から出土した。全長1.3m、直径5cmの
丸太の中央付近に、蔓を巻き付けたような状況を呈
していた。実際の機能・用途については不明。

金属製品 他からの出土ではなく、第0層から出土し
た珠文鏡（図110-1516）1点のみ。完形ではある
が全体的に歪みがあり鉤あがりも不良。また、褐色
の銅が鏡面を覆っているために文様が不鮮明。面径
7.8cm・面厚0.2~0.3cm・紐径2.0cm・紐高0.7cm・
重量79.63gを有する。縁は素文で平縁。内区の文
様は、紐の周りに圓線1条・不規則に配置された8
つの珠文・圓線3条・櫛齒文帯。珠文鏡の出土した
第0層からは、弥生時代前期から平安時代にかけて
の土器が出土しており、土器との共伴関係から時期
を決定する事は不可能である。しかし、量的には弥
生時代後期～古墳時代中期にかけての土器が多い。
したがって、ここではこの時期幅の中に位置付ける
事とする。

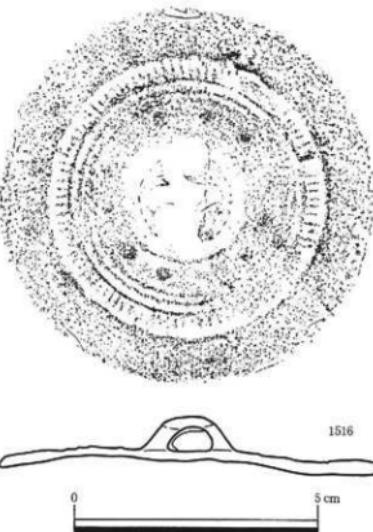


図110 95-2区 第0層出土鏡

第6節 小結

95-2区は、隣接する(財)八尾市文化財調査研究会調査地の成果から、弥生時代集落の中心部の一角を

占めるであろうと考えられてきた。以上に記したように、約400m²という小面積にもかかわらず、膨大な検出遺構、出土遺物は、それを十分裏付けるに足るものであった。しかし層序でも記したように、非常に複雑な堆積状況を呈するため、一遺構面に複数時期の遺構が並存したり、認識できなかった遺構面もあるらしい。以下成果をまとめておこう。

第1面はT.P.+8.8m前後で、弥生時代中期から古墳時代前期にかけての遺構面である。弥生時代中期に属する遺構は、竪穴住居364、土坑395、土坑188、溝334などがある。このうち竪穴住居は、前期から継続していた可能性があり、第II様式期に消失する。土坑395は第II様式、溝334は第II様式後半から第III様式、土坑188は第III様式期に属する。ところが今回の調査では第IV様式に帰属する遺構ではなく、また出土土器も僅少であった。

弥生時代後期になると、明らかに当該期に属する遺構は激減する。今回の調査では、井戸187および井戸386のみであった。

庄内期から古墳時代前期に至ると、集落規模はさらに縮小する。庄内期は井戸218のみ、古墳時代前期は井戸292のみとなる。このうち井戸218からは壺形土器に混じって、舟形土製品が出土した。祭祀行為によるものか。

第2面はT.P.+8.5m前後で検出した。遺構面の時期は主に弥生時代前期であるが、一部中期に入るものがある。溝593と若干の土坑を除くと、検出遺構の大半をピットで占める。また同時に最大幅7～8cmもある噴砂を検出した。

東区のみで検出した第3面は、検出遺構数こそ少ないが、落込み848より多量の土器を中心とする遺物が出土した。これらの土器は前期中段階後半～新段階前半に帰属する。周辺の調査でもこれだけまとまった当期の土器は出土しておらず、駐屯地内に展開する田井中遺跡の成立を考えるうえで、貴重な資料となった。

包含層出土遺物で目を引くのは、珠文鏡や磨製石矛や磨製石鎌である。金属製品は数次にわたる田井中遺跡調査で初出、また上記の磨製石器は近畿地方でも極めて稀である。

第5章 田井中遺跡94-1区の調査成果

第1節 層序

田井中遺跡は、1975年度に陸上自衛隊八尾駐屯地内の下水道工事の際に、弥生土器が出土したことによって、その存在が明らかとなった。その後、1982年の浴場建設に先立つ調査を皮切りに、駐屯地内の施設建設に伴い、7次の調査がJR八尾市文化財調査研究会によってなされてきた。今回、給水ポンプ場建設事業が実施されることになり、それに先立ち、大阪府埋蔵文化財協会が94-1区の発掘調査を実施した。

調査面積は140m²で、西北西-東南東の長辺の長さは約16.5mをはかり、調査区は北東部のくぼんだ矩形を呈する。調査にあたっては座標軸に従い4m間隔の方眼を設定した。発掘調査は、周辺の調査成果を参考にし、また、調査区の大部分が現代の建物基礎で大きく攪乱されていることから、およそT.P.+11.5mの現地表面下から深さ2.5mまで重機を用いて掘削した。さらに人力によって深さ4mまで可能な限り掘削した。

基本層序（図111）については、従前の駐屯地内の層序番号と同一のものと付すよう試みたが、調査地点による差異の問題もあり、94-1区については固有の番号で記述した。なお、図112の西辺断面土層図のT.P.+9.0mより上層部は、調査区内で最も遺存状態の良かった中央部の断面を用いている。

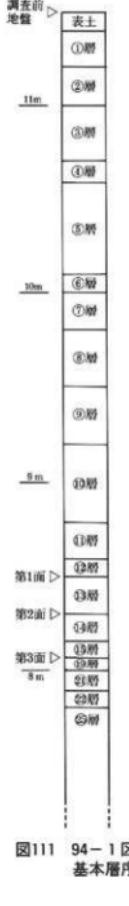
表上から下層は以下のよう堆積状況を示す（図111～114）。

第0層に相当するのは表土～@層である。①層は10YR3/2黒褐色細砂混じり粘質土で、層厚約20cmをはかる。②層は10YR3/3暗褐色細砂混じり粘質土で、層厚20～30cmをはかる。③層は2.5Y3/2黒褐色細砂混じり粘質土で、層厚30cmをはかる。④層は5Y3/2オリーブ黒色シルト混じり粘質土で、層厚10cmをはかる。⑤層は2.5Y4/4オリーブ褐色シルト混じり粘質土で、層厚30cmをはかる。⑥層は5Y7/4浅黄色粗砂混じり、2.5Y6/6明黄褐色微砂で、層厚10～20cmをはかる。⑦層は10Y4/1灰色細砂混じり微砂で、20～30cmをはかる。⑧層は5GY3/1暗オリーブ灰色細砂混じりシルトで、層厚30～50cmをはかる。⑨層は7.5Y3/1オリーブ黒色粘土で、層厚20cmをはかる。⑩層は10Y3/1オリーブ黒色シルト質粘土で、層厚60～70cmをはかる。土師器2点、須恵器2点など、古墳時代から飛鳥時代の土器が少量出土した。⑪層は5Y3/1オリーブ黒色粘土で、層厚10～20cmをはかる。弥生土器89点、土師器7点、石器1点など、弥生時代～古墳時代の土器を比較的多量に出土した。⑫層は10Y2/1黒色粘土で、層厚10～20cmをはかる。弥生土器274点、土師器44点、石器3点、土製円板1点など、弥生時代～古墳時代の土器をかなり多量に出土した。

第1層に相当するのは@層である。5G2/1緑黒色微砂混じりシルトで、層厚10～30cmをはかる。弥生土器2794点など弥生中期の土器を大量に含む。上面は第1面（96-3区第4面）で、溝1を検出した。

第2層に相当するのは@・@層である。@層は5G2/1緑黒色細砂混じりシルトで、層厚10～20cmをはかる。弥生土器2210点、石器31点と弥生前期の土器を大量に含む。上面は第2面で、溝2・溝3を検出した。@層は10Y3/1オリーブ黒色微砂混じりシルトで、層厚10～20cmをはかる。弥生土器3007点、石器40点など弥生前期の土器を大量に含む。

第3層には@～@層が対応する。@～@層の上面は第3面（96-3区第6面）で、溝4を検出した。@層は5BG3/1暗青灰色シルトで、層厚10～50cmをはかる。@層から弥生土器275点、@層から弥生土器81点、石器2点、@層から弥生土器7点が出土した。@層は、5GY3/1暗オリーブ灰色微砂混じりの2.5



四三

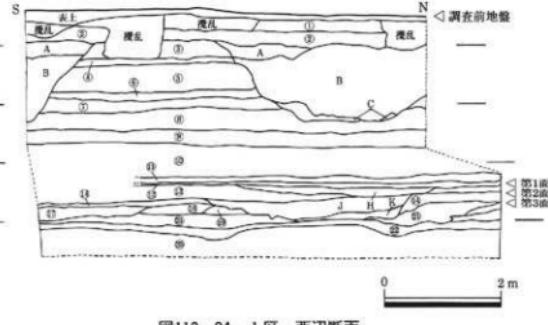
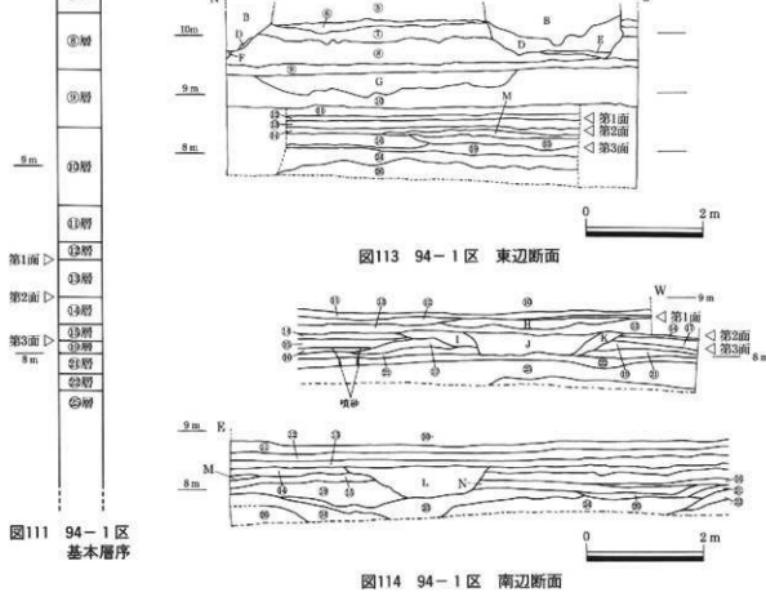


圖112-34 1組 四邊形圖



面じりシキト

GY3/1暗オリーブ灰色粘質土で、層厚10~30cmをはかる。⑩層は5Y3/1オリーブ黒色粘土で、層厚10~20cmをはかる。⑪層は、2.5Y5/6黄褐色、2.5Y6/2灰黄色、2.5Y3/1黒褐色を呈する粗砂である。下面までの掘削是不可能なため、層厚は不明である。

第2節 遺構

94-1区では、⑩層の上面から精査をおこなったが、明瞭な遺構はみられず、⑪層より下層で3面の弥生時代の遺構面を検出した。

第1面（図115） ⑪層上面である。面の高さはT.P+8.5mで西に向って20cm高くなっている。調査区西端部にて溝1を検出した。

溝1は調査区内で長さ7.5m、幅2.5~4.0mをはかり、やや不定形ながら、わずかに内湾して南北方向にのびる。断面形は浅いU字形を呈し、深さ20~30cmをはかる。埋土は5GY2/1オリーブ黒色粘土で炭を含む。弥生土器97点、土製円板1点、石器3点が出土した。弥生時代中期後半の第IV様式に廃絶した溝と考えられる。

第2面（図116） ⑪層上面である。面の高さはT.P+8.3mで、北に向って20cm高くなっている。調査区西端部にて溝2、中央部にて溝3を検出した。

溝2は調査区内で長さ6.8m、幅2.7mをはかり、一定の溝幅を保ちながらやや内湾して南北方向にのびる。断面形は逆台形を呈し、深さ40cmをはかる。埋土は10Y3/1オリーブ黒色粘土で、西側一部に2.5GY2/1黒色シルトが堆積する。弥生土器516点、土製円板2点、石器12点が出土した。弥生時代中期中葉に廃絶した溝とみられる。

溝3は調査区中央部にて検出した溝で、溝2から東へ約7mのところにはほぼ平行に位置する。調査区内で長さ6.4m、幅2.5mをはかり、一定の溝幅でやや内湾して南北方向にのびる。断面形は深いU字形もしくは逆台形を呈し、深さ50cmをはかる。埋土は5GY2/1オリーブ黒色粘土に、7.5GY3/1暗緑灰色の粘土ブロックを含む。時期を示す明瞭な遺物は出土していないが、同一土層から掘り込んだ溝2と同様、弥生時代中期に廃絶されたと考えられる。

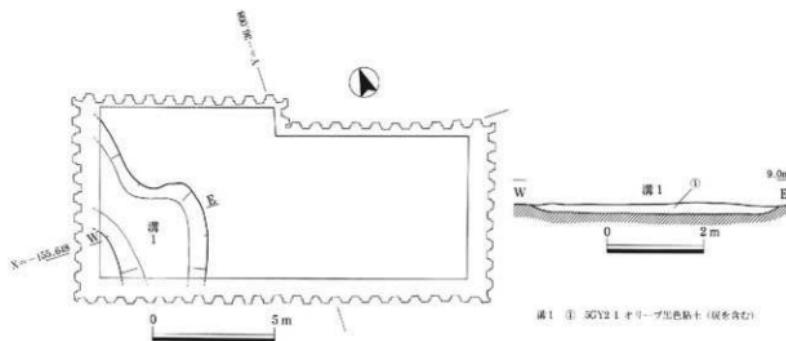
第3面（図117） ⑯~⑰層の上面である。面の高さはおよそT.P+8.0mで、西に向って10~20cm高くなっている。

溝4を調査区中央部にて検出した。調査区内で長さ7.5m、幅5.5~7.5mをはかり、やや内湾して南北方向にのびる。断面形は浅いU字形を呈し、深さ30cmをはかる。溝3によって中央部が削平されている。埋土は10YR3/1黒褐色細砂混じり粘質土である。弥生土器749点、繩文土器2点、石器6点が出土した。弥生時代前期（第I様式新段階）の土器が大量に出土したことから、この時期に埋まった溝と考えられる。

第3節 土器

94-1区からは須恵器4点、土師器64点、弥生土器11228点、繩文土器6点、計11302点が出土している。35コンテナの出土遺物中、30箱は弥生土器で、うち28箱は前期の土器が占める。器種別にみると、甕や壺の底部が過半数を数える。弥生前期の土器の底部は器壁が厚いため、よく残ったとみられる。

溝1出土土器（図118） 1517は台付鉢で鉢部外面に簾状文を施す。1518は甕口縁部で口縁端部をはねあげている。1519は甕底部とみられる。これらの土器は弥生中期第III様式新段階および第IV様式（河



溝1 ① 3GY2 1 オリーブ色粘土(炭を含む)

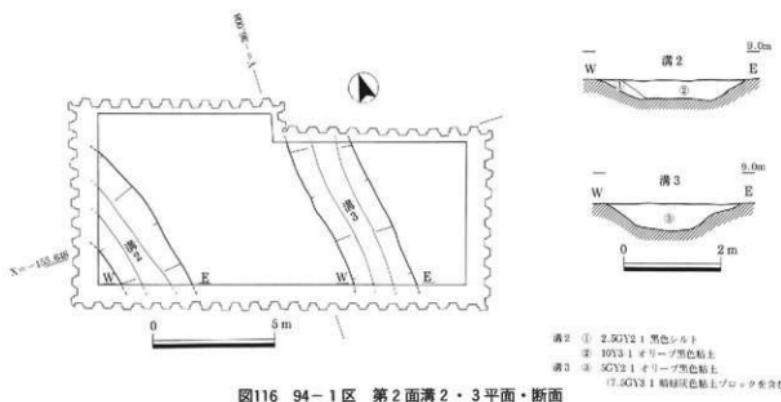


図116 94-1区 第2面溝2・3平面・断面

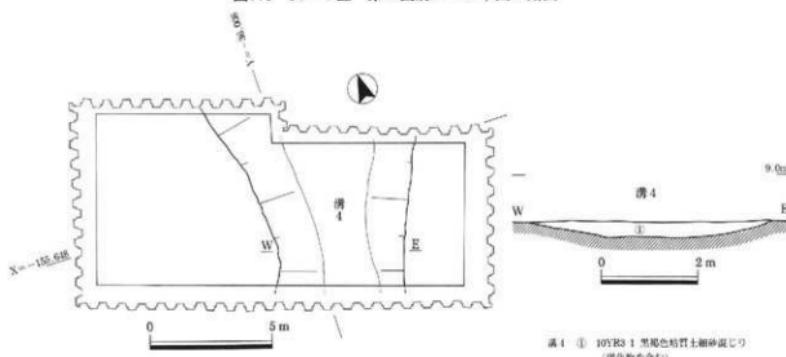


図117 94-1区 第3面溝4平面・断面

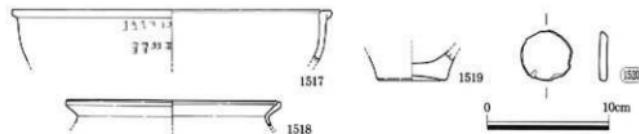


図118 94-1区 第1面溝1出土弥生土器・土製品

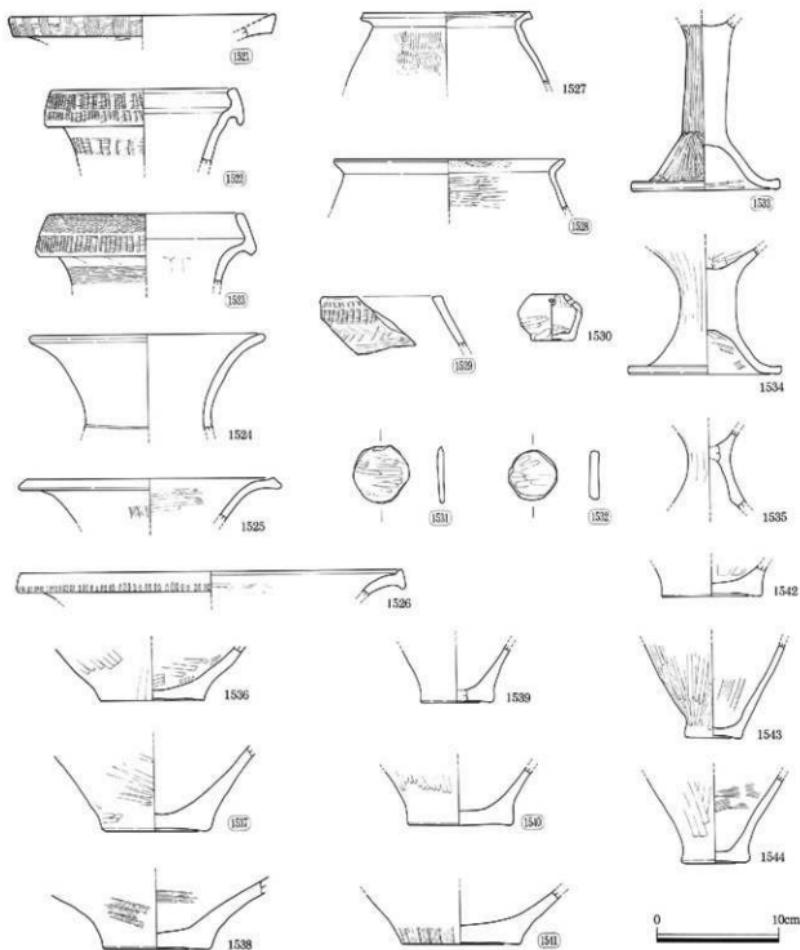


図119 94-1区 第2面溝2出土弥生土器・土製品

内IV-1~3様式)に属する。

溝2出土土器(図119) 1521~1526は壺口縁部で、付加状の口縁をもつ広口壺1522・1523は、垂下口縁外面に、1522が2段の廉状文、1523が波状文と廉状文を施す。1527・1528は壺口縁部で、1527は外面を粗いハケで、1528は内面をヘラミガキで調整する。1529は無頸壺口縁部で、外面を廉状文と扇形文で加飾する。1530は紐穴を穿つミニチュアの無頸壺で、器高は3.8cmをはかる。1533~1535は高杯脚部で、1533は外面に丁寧なヘラミガキを施す。1536~1538・1540~1542は壺底部、1539・1543・1544は壺底部で、1543は外面にヘラミガキが明瞭に残る。1521・1524・1533・1534など時期の遡る土器の混入が認められるものの、おおむね弥生中期第Ⅲ様式新段階(河内IV-1様式)¹⁾に属する。

溝4出土土器(図120) 1545~1548は広口壺、1551は太頸広口壺である。各々頸部には、1545が断面三角形の2条の貼り付け突帯、1546は4条の沈線、1547・1548は多条の沈線、1551は3条の沈線が施されている。1549・1550の壺は、口縁端部に刻み目を入れる。1549は頸部に3条の沈線と2列の刺突文を加えている。1552は把手付き鉢とみられる。1553・1554は長原式深鉢の口縁部である。貼り付け突帯に刻み目が施されている。1555は壺の蓋で、比較的口径の広がるものである。1556~1558は壺の底部と

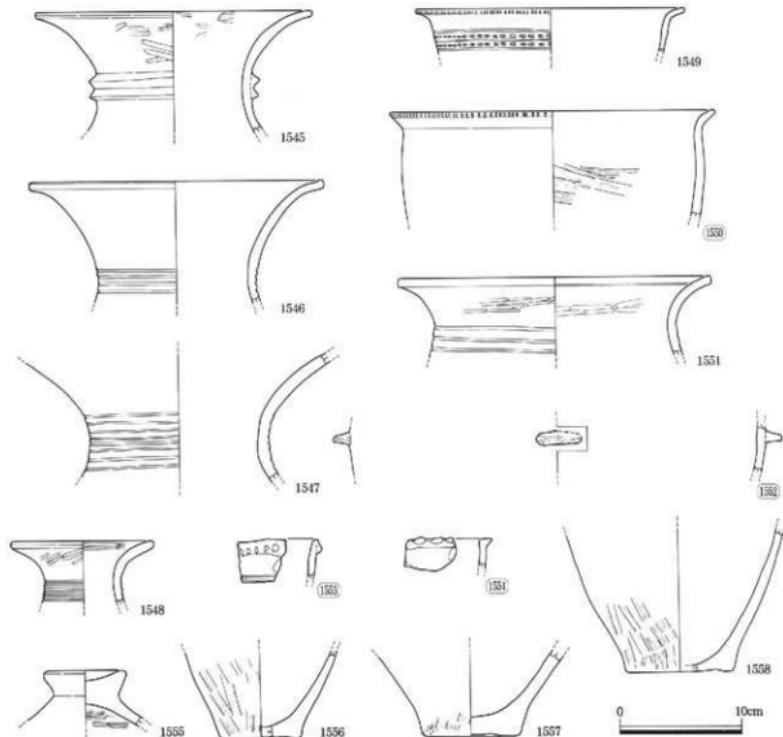


図120 94-1区 第3面溝4出土弥生土器・縄文土器

みられる。外面はハケ調整される。縄文土器や、一段階古い様相をもつ土器が混入するが、おおむね弥生前期第I様式新段階（河内I-4様式）に属する。

第0層出土土器（図121） ⑩層出土の1559は6世紀の須恵器杯身、1560は7世紀の土師器杯である。⑫層出土の1561は土師器の壺口縁部、1562は弥生土器の壺底部、1563は台付鉢の台部とみられる。

第1層出土土器（図122） 1564・1565は有段口縁の広口壺である。1564は直立気味の頸部に櫛描直線文と廉状文で、口縁外面には波状文と廉状文で加飾する。1565は内傾する口縁部に廉状文と刺突文を、頸部には廉状文を施す。前者は河内III-2様式、後者は河内IV-1様式に属する。1568は壺の蓋で、内外面にヘラミガキを施す。1566は鉢で口縁端部が下方に垂下し、

上下端に刻み目を入れる。体部外面は扇形文で加飾する。1567は

大型の壺口縁部、1570・1571は穿孔をもつ壺の底部である。

第2層出土土器（図123～125） 1572～1605は⑬層から出土した。1572～1574・1576・1577は広口壺で、1572・1573は沈線を施し、内外面はヘラミガキで仕上げる。1574・1577は内面にヘラミガキ、外面に削り出し突帯を施す古い段階のもので、河内I-2様式にあたる。1575は器壁の薄い鉢である。1578～1580・1583～1585は壺で、1578は無文、その他は口縁端部に刻み目を入れ、さらに1580・1584・1585は頸部に2～3条の沈線を施す。1586は壺の蓋、1590・1591は壺の底部、1587～1589、1592～1596は壺の底部の可能性が高い。1597～1599は広口壺のうち、長頭のタイプにあたる。1597・1598は多条の沈線を施し、1599は頸部に布巻棒圧痕を付けた8条以上の貼り付け突帯がめぐる。1600は底部に穿孔をもつ壺、1601は残存高11.4cmのミニチュアの壺である。1602・1603は頸部に沈線をめぐらす通有の壺で、1603は口縁端部に刻み

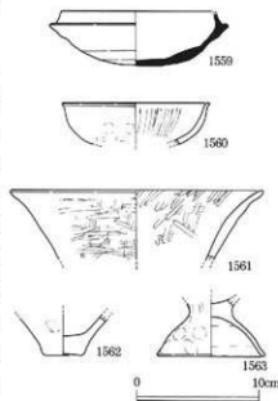


図121 94-1区 第0層出土
須恵器・土師器・弥生土器

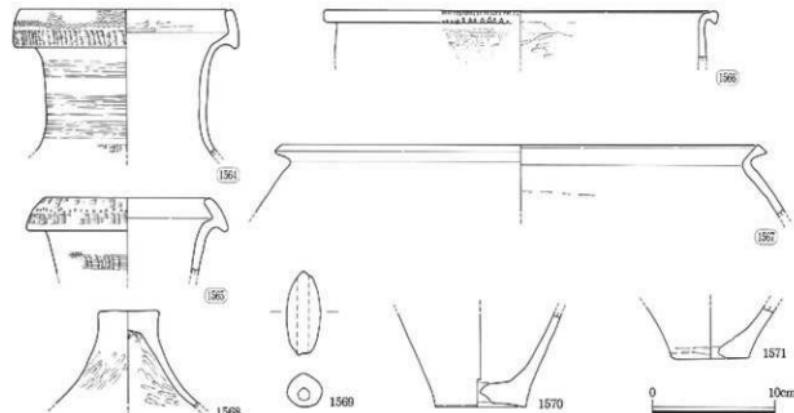


図122 94-1区 第1層出土弥生土器・土製品

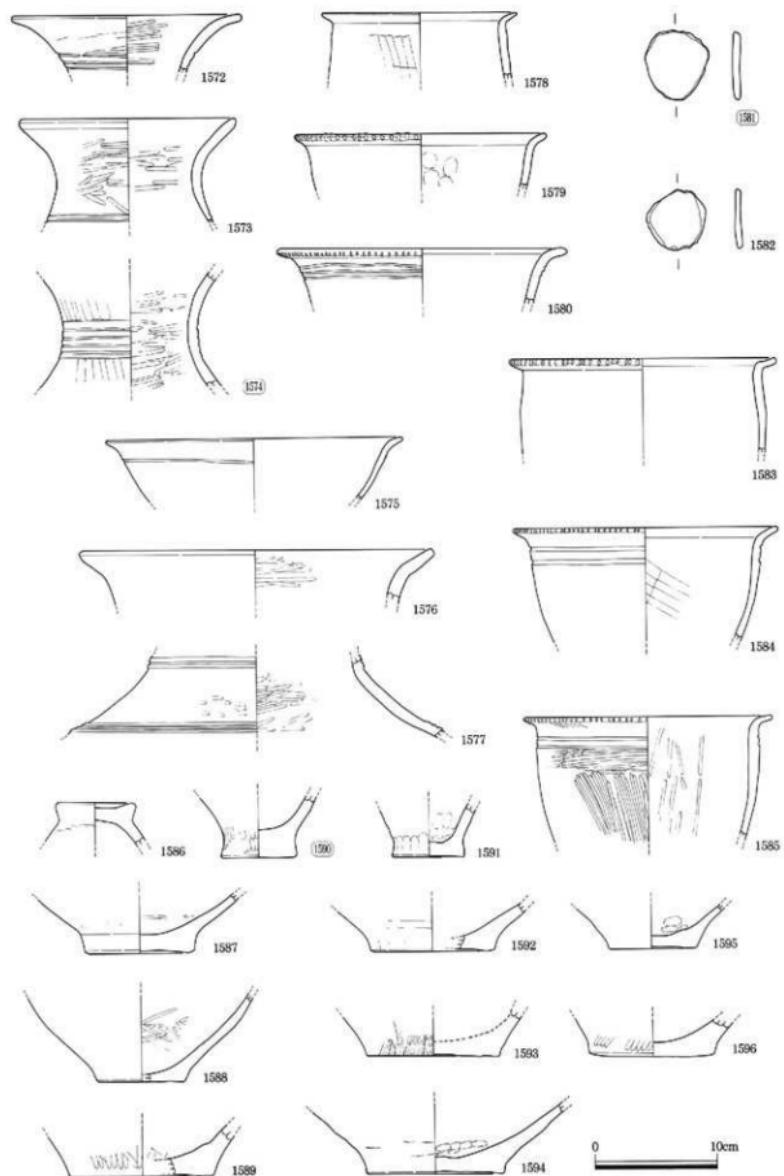


図123 94-1区 第2層出土弥生土器1・土製品

目を施す。1604は外反する口縁をもつ大型の鉢で、頸部に指おさえの痕跡が残る。1605は同じく外反口縁の把手付き鉢である。これらの土器は、削り出し突帯をもつ古い一群を除き、弥生前期第I様式新段階（河内I-4様式）に含まれる。

図125-1606-1627は⑩層から出土した。1606-1609・1613-1615は広口壺である。1606-1608は頸部に、1615は算盤玉形に張り出した胸部に沈線を入れ、内外面はヘラミガキで仕上げる。1613と1614は古い様相を残すもので、頸部・胸部に4条を1単位としたとみられる刻み目を加えた貼り付け突帯をめぐらす。1609は頸部に2条の沈線とその間に竹管文を加える。1610は頸部に多条の沈線を施す壺である。1611・1612は外反口縁をなす大型の鉢で、1611は外面をハケ調整し、1612は5条の沈線と貼り付け突帯をめぐらす。1616・1617は各々紐孔をもつ円板状、つまみのある笠形の壺蓋である。1618は胴長、無頸の鉢で刻み目を加えた2条の貼り付け突帯と、11条以上の沈線を施す。1623は壺蓋、1624は壺、1625・1626は壺底部とみられる。1627は口径6.4cm、器高3.1cmの器壁の厚いミニチュアである。おおむね弥生

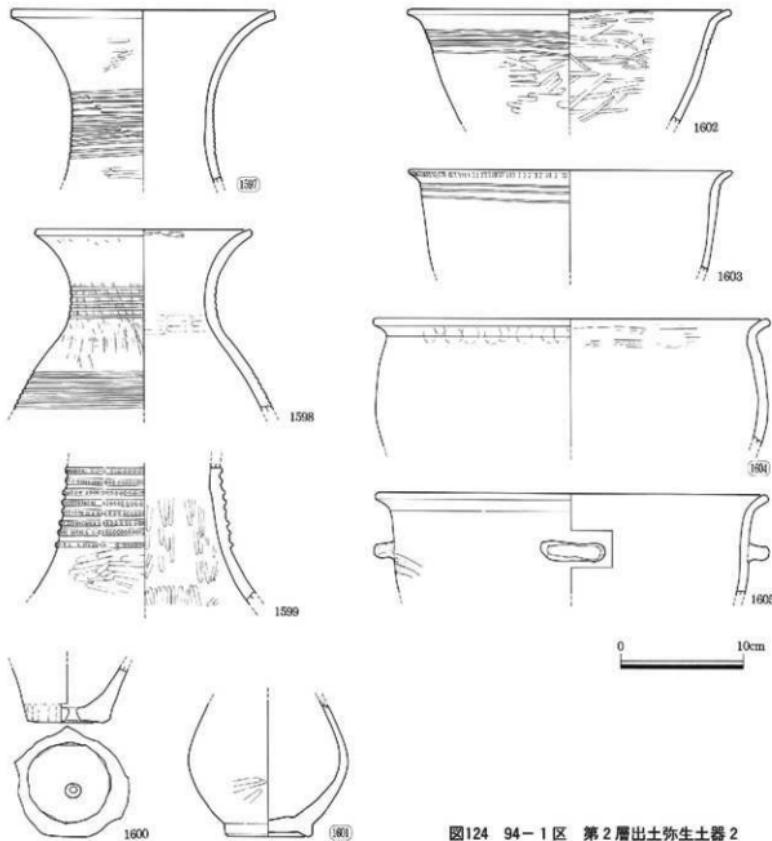


図124 94-1区 第2層出土弥生土器2

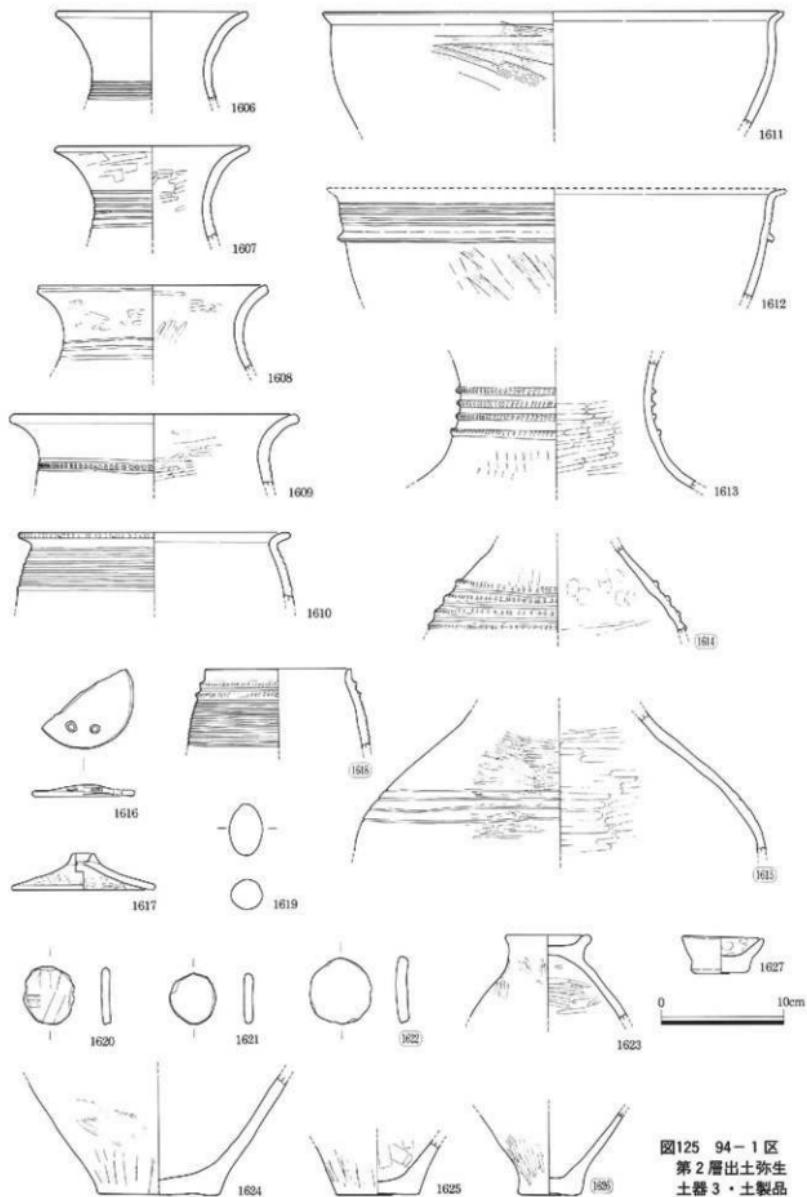


図125 94-1区
第2層出土弥生
土器 3・土製品

前期第I様式新段階（河内I-4様式）に含まれる。

第3層出土土器（図126） ⑯・⑰層から出土した。1628は広口壺の口縁部で、内面はヘラミガキ、外面はハケで調整する。1629は広口壺の頸部で、布巻棒圧痕を加えた貼り付け突審4条がめぐる。1630は同じく広口壺の胴部で、上半に沈線を施し、内外面はヘラミガキで丁寧に仕上げる。1631-1633は甕の底部とみられ、1631は穿孔をもち、1632はあげ底をなし、鉢底部の可能性がある。1630は河内I-3様式、その他は河内I-4様式にあたり、弥生前期第I様式新段階に属する。

第4節 石器

94-1区からは合計187点の石器が出土した。

溝2出土石器（図127） 1634は幅5.0cm、残存長7.6cm、厚さ0.6cmをはかる緑泥片岩製の直線刃半月形の石庖丁、その他はサヌカイト製で、1635は長さ5.2cmの石鎌、1636・1637はスクレイパーである。また1638は長さ7.1cmの尖頭器の未成品とみられる。

溝4出土石器（図130） 1659は長さ5.7cm、最大幅

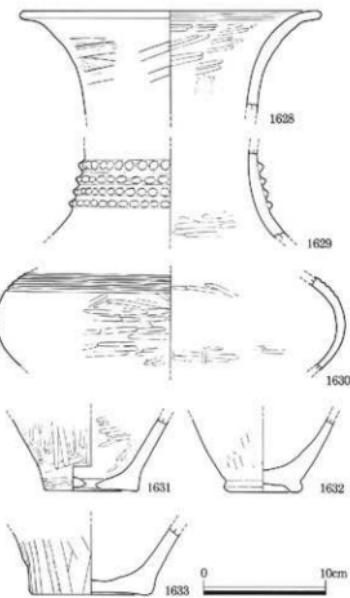


図126 94-1区 第3層出土弥生土器

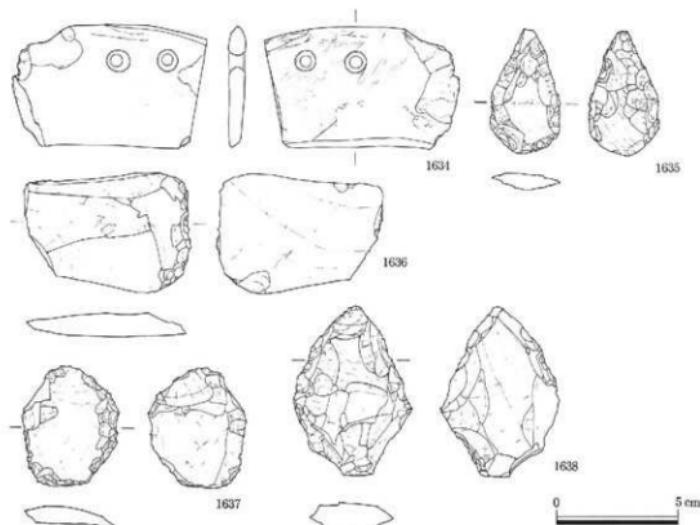


図127 94-1区 第2面溝2出土打製石器・磨製石器

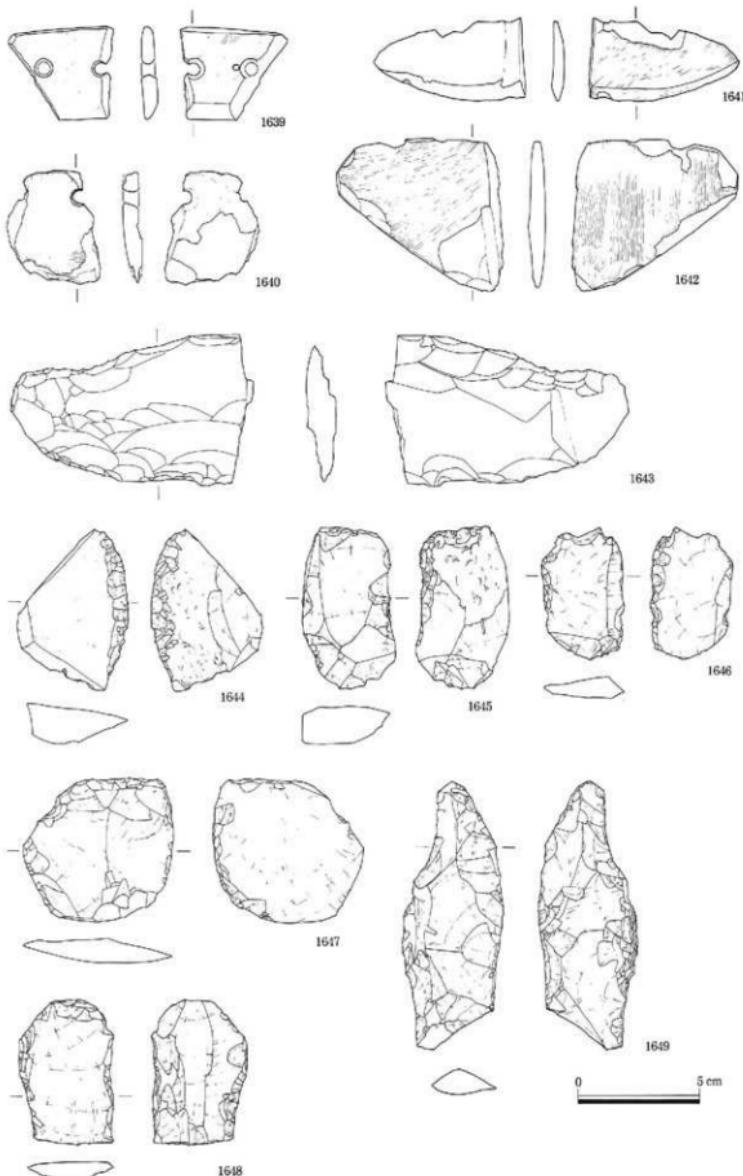


图128 94-1区 第1层出土打制石器·磨制石器

田井中遺跡94-1区の調査成果

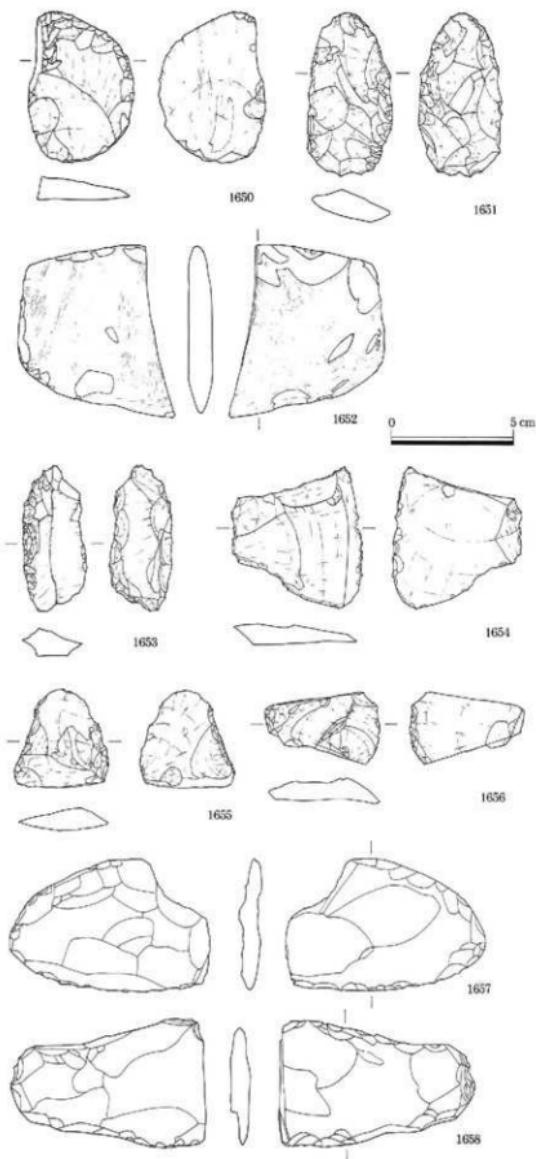


図129 94-1区 第2層出土打製石器・磨製石器

3.1cmをはかるサヌカイト製のスクレイパーである。

第0層出土石器（図131）

1660は長さ6.2cm、最大幅5.1cmをはかるサヌカイト製の石錐である。1661は長さ5.6cm、最大幅7.0cmをはかるスクレイパーとみられる。いずれも⑫層から出土した。

第1層出土石器（図128）

1639は幅3.8cm、残存長4.3cmの緑泥片岩製の直線刃半月形の石庖丁、1640も大きく破損しているが、緑泥片岩製のやや大型の石庖丁、1641は泥岩製の紡錘形石庖丁とみられる。1642は幅6.2cmの緑泥片岩製の大型石庖丁である。1643は凝灰岩質片岩製の石庖丁の未成品とみられる。1644～1648はサヌカイト製のスクレイパー、1649は長さ11.1cm、最大幅4.0cmのサヌカイト製の尖頭器の未成品である。

第2層出土石器（図129）

1650～1652が⑪層出土。1650は長さ6.1cm、最大幅4.2cmのスクレイパー、1651は長さ

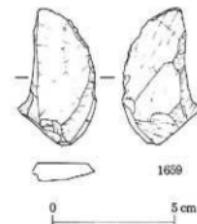


図130 94-1区 第3面溝4出土打製石器

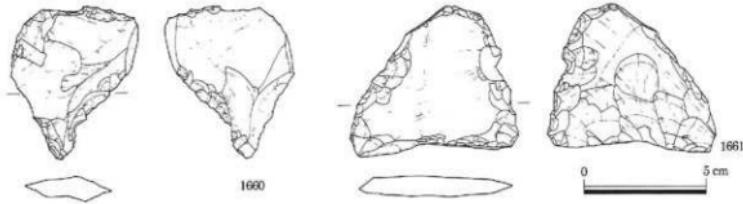


図131 94-1区 第0層出土打製石器

6.6cm、最大幅3.5cmをはかる尖頭器で、サヌカイト製である。1652は欠損しているが、泥岩製の大型の石庖丁である。

1653～1658は⑩層出土。1653～1656はサヌカイト製のスクレイパーで、1653は長さ6.2cm、最大幅2.6cmをはかる。1657・1658は石庖丁の未成品で、前者は泥岩製、後者は凝灰岩質片岩製である。

第5節 その他の遺物

土製品 土製円板15点、土錘1点、投弾1点が出土した。土製円板は土器片を打ち欠いて転用し、周囲の仕上げは粗雑なものが多い。図119～1531は長径4.6cmの楕円形、1532は径4.1cmの円形を呈し、外面にはヘラミガキが施されている。図125～1620は長径4.7cmの楕円形を呈し、外面にはハケメが残る。1622は径5.4cmの大型のもので、やや内湾する。

図122～1569は管状土錘で、長さ6.8cm、径2.8cmをはかり、紡錐形を呈する。図125～1619は投弾で、長さ4.2cm、径2.6cmをはかり、砲弾形を呈する。

第6節 小結

94-1区は、小範囲ながらも駐屯地内の既往の調査の結果を参考にして、弥生時代を中心とする時期の遺構・遺物の検出に焦点をあて、調査を実施した。

その結果、弥生時代の3面の遺構面を確認した。第1面は弥生時代中期第Ⅳ様式、第2面は弥生時代中期第Ⅲ様式新段階、第3面は弥生時代前期第1様式新段階に相当するとみられる。検出した遺構は、第1面で溝1本、第2面で溝2本、第3面で溝1本の計4本の溝である。

遺物は土器11302点、石器187点の計35コンテナで、140m²の調査面積に対して遺物の密度が高く、特にそのほとんどが弥生時代前期（河内I～4様式）に属するものであることが注目される。

既往の調査によって、弥生時代前期の集落の中心は駐屯地内の西側部分に想定することができるが、このことは、本調査区において全体の地形が東に傾斜している点からも妥当性が認められる。今回検出した4本の溝は各々西に向けて内湾しながらのびており、西にひろがる集落をめぐる溝であった可能性が高い。

第5章 注

弥生土器の編年は、寺沢薰・森井貞雄「河内地域」『弥生土器の様式と編年』1989 木耳社によっている。

第6章 田井中遺跡96-3区の調査成果

第1節 層序

第3章で述べたように、調査進行上あるいは遺物取り上げ単位の「第₁層」はしばしば堆積「○層」に細分される。しかし、当96-3区では層理面ごとに記録するよう特に慎重に調査を進めたため、南辺断面にかかる第6面落込み2の埋土を除いて、「第₁層」と「○層」は一致する。

現地表面直下の盛土層は、周辺の発掘調査の成果を参考とし、深さ2.0mまで重機で排土した。この機械掘削の層からは、瓦器4点、須恵器1点、土師器5点が出土した。

以下、図132・133に掲げた土層の注記と出土遺物を列挙する。断面実測位置は図134を参照。

第1層に相当するのは①層である。2.5Y4/1黄白色シルト。層厚約20cm。染付1点、黒色土器1点、須恵器3点、土師器4点、瓦1点が出土した。

第1～2層に相当するセクションベルトから、土師器2点と弥生土器13点が検出された。

第2層には②層が相当する。10YR4/1褐灰色シルト。層厚50～60cm。須恵器1点、土師器31点、弥生土器30点、砥石1点、木片8点、骨片1点が出土した。土師器は96-3区全体で53点出土しているが、そのうち31点が第2層からの出土である。

また、第2面から掘り下げた側溝や、第2～7層相当のセクションベルトから、土師器1点、弥生土器577点、サヌカイト製の石剣1点、同石核1点・剝片2点、サヌカイト以外の剝片2点、石庖丁1点、土製円盤2点が出土した。弥生土器577点中、中期が6点、前期が43点ある。

第3層は③層で、層厚は10cm程度と比較的薄いが、炭化物もわずかに含まれる2.5Y3/1黒褐色を呈するシルト層である。自然科学的分析を経てはいないが、水田土壤の可能性がある。土師器10点、弥生土器429点（うち中期5点、前期11点）、サヌカイトの石核1点、同剝片2点、砂岩製砥石1点が出土した。

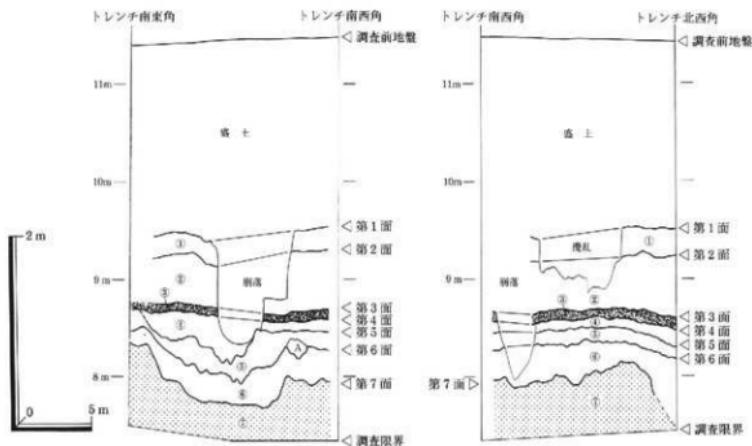


図132 96-3区 南辺断面

図133 96-3区 西辺断面

土師器は第3層より上層でのみ出土する。

第4層には⑥層が相当する。10YR4/1灰色細～粗砂混じりシルト。層厚は10cm程度の範囲が広いが、第5面の落込み1の断面がかかる南辺断面中央部では深さ40cmに達する。出土遺物の大半は1575点に及ぶ弥生土器で、うち中期が27点、前期が84点ある。サヌカイト製石鑿1点、同刀器1点、同石核および剝片が25点、サヌカイト以外の剝片1点、土製円板1点も出土。第4層出土遺物総数は1604点である。

また、第4～5層相当のセクションベルトから弥生土器120点（うち前期16点）とサヌカイトの剝片3点も出土している。

第5層には⑦層が相当する。5Y3/1オリーブ黒色粗砂混じりシルトで、炭や礫も含む。第5面と3か所の落込みのある第6面との間の層なので、とくに南辺断面で凹凸が著しい。層厚は10～40cm。弥生土器1581点（うち中期10点、前期134点）、他にサヌカイトの石核3点、同剝片11点、砥石や焼石5点、土製円板5点、焼土5点、合計1610点の遺物が出土し、この調査区の单一土層としては最も多い。

第5面から掘り下げた側溝から、前期2点を含む弥生土器38点、土製円板1点が出土した。

第6層は基本的に⑥層の2.5GY5/1オリーブ灰色細砂混じりシルトで、下層ほど粒子が粗くなる。調査区北西部では、漸移的に炭化物を含む2.5Y5/1黒色細砂混じりシルトに移行する。A層は南辺断面にかかる第6面落込み2の埋土で、少量の炭化物を含む2.5Y2/1黒色細砂混じりシルトである。前期42点を含む弥生土器216点、砥石片1点、焼石2点が出土した。第6層以下では、時期の判別する弥生土器は前期に限られるようになる。

第7層は⑦層であるが、⑦層中の最深T.P.+7.35mまでで調査を終了した。10YR7/1灰白色の細砂と粗砂との互層でラミナがみられ、下層ほど砂粒が粗くなる。洪水砂と考えられる。弥生土器13点、縄文時代晩期の土器3点、種子1点出土。縄文時代晩期の土器は第7層からのみの検出である。

第2節 遺構

96-3区では老朽化した建物の撤去後、発掘調査を行った。およそT.P.+11.5mの現地表面から深さ約2mまでは擾乱の後盛土されていたので、それらを重機で除去した。

96-3区では、合計7面を記録した。遺構面の時期は近世以降から弥生時代前期にまで遡る。しかし、明瞭な遺構は少なく、第3面で畦畔状の土変わり1条、第5面で落込み1か所、第6面で落込み3か所を検出したのみである。

第1面 近世以降の①層中の任意の深さで機械掘削を停止した面である。したがって、第1面は旧地表面ではなく、遺構もない。調査区西辺に接して南北5.5×東西3.3mほどの擾乱がある。その他の部分は北西側が南東側より数cm高いが、およそT.P.+9.5mで平坦である。

第2面 ②層の褐灰色シルト上面である。遺構はない。面の高さは9.2mほどで、西部が数cm高いがほぼ平坦である。第1面と同じ位置に擾乱があり、その底は8.9mまで深くなる。

第3面（図134） ③層の炭化物を含む黒褐色シルト層の上面である。調査区中央部に南北方向の特に黒味の強い部分がみられたが、厚みがないため断面でも溝か畦畔かは判断できなかった。しかし、幅約50cmという規模、ほぼ南北を指向する方向性、③層の土質、これらを考え合わせると、条里地割に規制された水田畦畔と考えられる。面の高さは8.7m程度でほぼ平坦だが、東側が数cm高い。

第4面 ④層を除去し、結果的に④層の灰色砂混じりシルトの上面として検出した面。遺構はないが、第3層が約10cmと薄いこともあって、第3面にみられた畦畔状の土変わりが同じ位置にごくうすくみえ

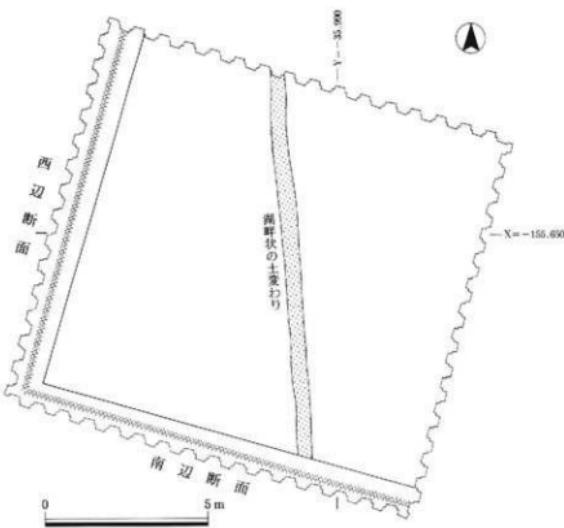


図134 96-3区 第3面

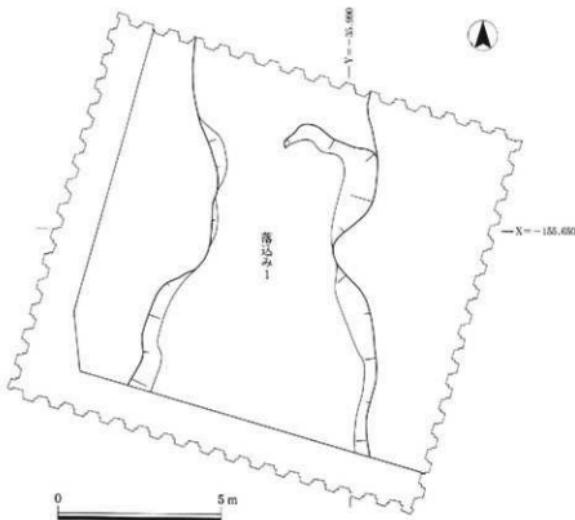


図135 96-3区 第5面

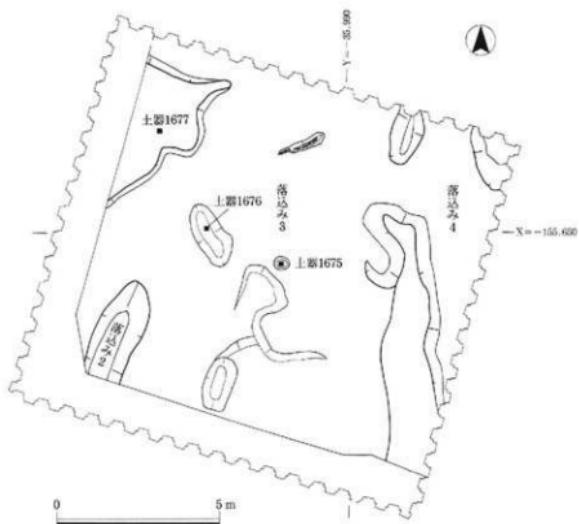


図136 96-3区 第6面

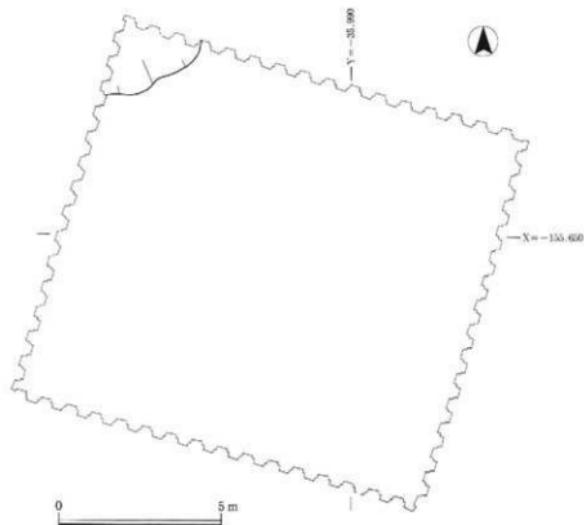


図137 96-3区 第7面

た。面の高さは8.6m程度で、第3面と同様東側がわずかに高い。第4面から検出された弥生土器90点中、中期は1点、前期は4点である。サヌカイトの剝片1点も出土した。なお、この面は西に隣接する94-1区の第1面と同じ面である。

第5面（図135） ⑤層のオリーブ灰色ないし黒色シルト上面で、南北方向に落込み1がある。

落込み1は幅は3.7~7.1mあるが、最深でも15cmしかなく、肩部もあまり明瞭ではない。面の高さは8.4~8.6mで、調査区北西部がやや低い。第5面からは、弥生土器262点（うち中期2点、前期19点）、サヌカイトの石核2点、同剝片4点、土製円板1点が出土した。

第6面（図136） ⑥層のオリーブ灰色シルト上面である。落込みが3か所みられる。面の高さは落込み3と4との間の鞍部がもっとも高く8.5m。調査区北東部の微高地で8.4m。前期2点を含む弥生土器のみ34点が出土した。なお、この第6面は隣接する94-1区の第3面と同一面と考えられる。

落込み2は調査区南西部にあり、幅1.4m、検出長3.2m、深さ20cm弱。埋土は炭化物を含む黒色細砂混じりシルト。弥生土器が161点出土し、うち14点は前期と判断される。

落込み3は、調査区中央部から西側ほどんどを占めている。平面も底面の形状も不整形で調査区南部では深さ50cmに及ぶ。落込み内に土坑状の窪みが数か所あり、そのうちの2か所からは弥生時代前期の壺が検出された。これらを含め、落込み3からは、弥生土器464点（うち中期1点、前期54点）、サヌカイトの剝片7点、他の石材の剝片1点、土製円板2点が出土した。

落込み4は調査区東部を南北にのびる。幅は不明だが、深さ約20cm。弥生土器494点のうち72点は前期である。サヌカイトの石核1点と同剝片2点も出土している。

なお、落込み3は落込み2に切られているが、出土土器からみるとほぼ同時期の落込みと考えられる。また、落込み2の埋土を除き、落込み3・4は⑦層と同じ埋土である。

第7面（図137） ⑦層の砂層をベースとする面。面の高さは8.0~8.3mで、調査区東側が高く西側が低い傾向があるが、傾斜は一方的ではなくかなり起伏に富んでいる。明確な遺構はないが、調査区西北角で60cmほど急に深くなる部分は溝または土坑の可能性がある。

第3節 土器

96-3区からは土器類として、染付1点、瓦器5点、黒色土器1点、須恵器5点、土師器53点、弥生土器5882点、繩文土器3点、合計5950点出土している。染付、瓦器、黒色土器、須恵器は少数で、第2層以上から出土する。土師器は過半数が第2層にある。弥生土器は、数量も多く、全層から出土するが、特に第3層より下層に多い。繩文土器はいずれも晩期に属し、第7層からのみ3点検出された。

陶磁器 染付が第1層から1点だけ出土した。

瓦器 瓦器挽片が機械掘削層から4点、第1面以下の側溝から1点出土。

黒色土器 内黒のA類が、第1層から1点出土した。

須恵器 機械掘削層から1点、第1層から3点、第2層から1点、計5点出土しているが、いずれも小片で図化できない。



図138 96-3区 土師器・繩文土器

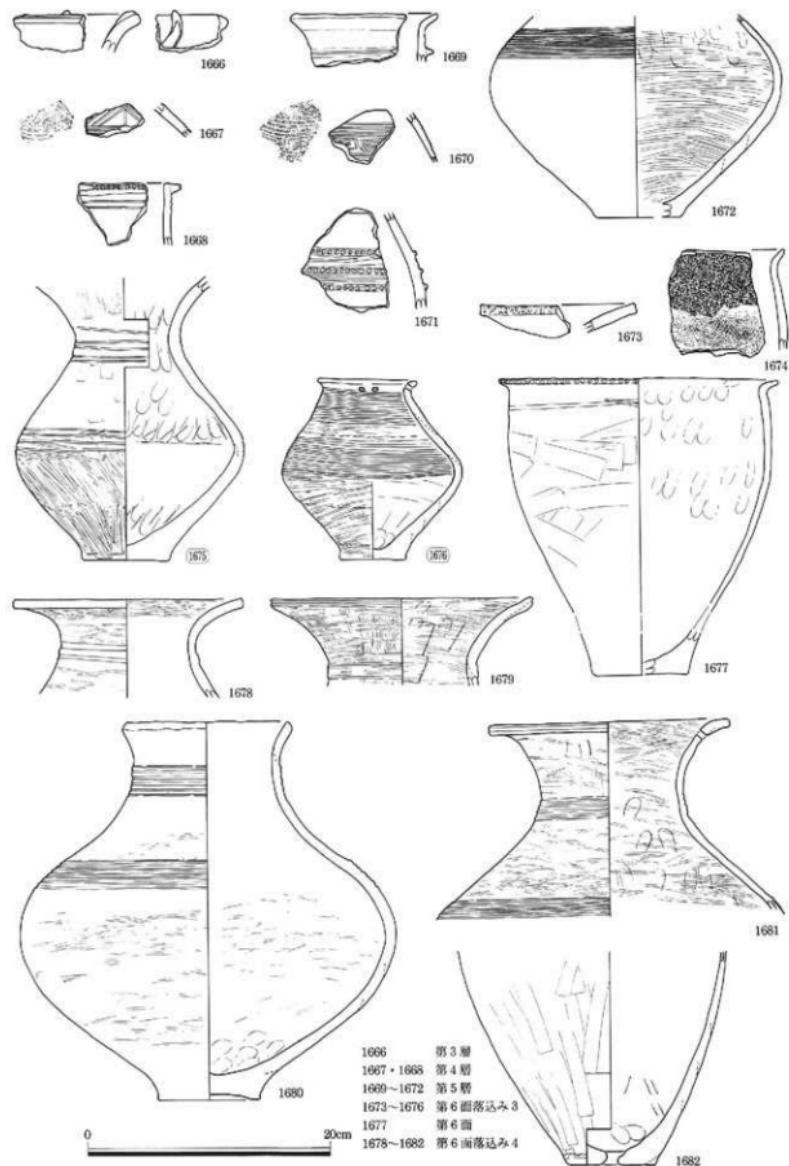


図139 96-3区 弥生土器

土師器 土師器は機械掘削層から第3層まで53点出土している。古墳時代から平安時代頃までの時期差はあるが、図化できる資料は少ない。

図138-1662は第2層出土。口径13.4cm、高さ2.6cmの皿である。口縁端部にはつまみあげの痕跡がごくわずかに残る。基本的にヨコナデされ、体部外面下半には指頭跡が残る。平安時代後半の所産。

弥生土器 弥生土器は全層から合計5882点出土し、土器の98.9%を占める。第3層以下に多く、特に第4層には1575点、第5層には1581点と集中する。時期の判明するものは、中期53点、前期497点で、時期ごとにみると中期は第4層の27点、前期は第5層の134点がピークとなる。他は無文の体部や底部片が多い。図示できる遺物も前期が中心である。

図139-1666は第3層出土の壺口縁部で、口縁内面に径8mmほどの棒状粘土が貼付されている。

1667・1668は第4層出土。1667は壺の肩部。ヘラ描き沈線による木葉文の一部で、区画線が縦・斜向方向に描かれている。1668は瀬戸内型の壺Bである。口縁端部外側に断面台形の粘土紐を貼付し、粘土紐端に刻み目を施す。口縁からやや下がったところに沈線がめぐる。前期新段階に類例がある。

1669-1672は第5層出土。1669は壺A。口縁は外反し、口縁下に貼り付け突帯がある。1670と1671は壺の肩部で、1670は工字文風のヘラ描き流水文で痕跡的に赤彩が残り、1671には刻みのある突帯が3条ついている。1672の壺a 2の肩部には4条1単位のクシ状工具による直線文が10条めぐり、その上端は削り出しの段となる。

1673-1676は第6面落込み3出土。1673は広口壺の口縁で、端面に斜めまたはX字状の軽い刻みが施されている。1674は壺Aで口縁外面直下に煤が付着し、体部の2本の平行沈線間にヘラ描きの平行山形文で充填している。1675は壺bで、大きく外反する口縁部を欠く。頸部には下から上へ、右回りにラセン状の沈線が施される。体部の4本の沈線は平行する。1676の無頸壺Bには、口縁直下に焼成前の穿孔が2か所ある。4条1単位のクシ状工具による直線文が、肩上部に15条と下部に16条めぐる。1675と1676は角閃石を含みチョコレート色を呈するいわゆる生駒西麓産の胎土である。

1677の壺Aは第6面の微高地より出土。口縁端部に刻みが施され、口縁下に直線文が1条めぐる。外面に薄く煤が付着する。内面には指頭圧痕が残る。なお、1675-1677の出土位置を図136に示す。

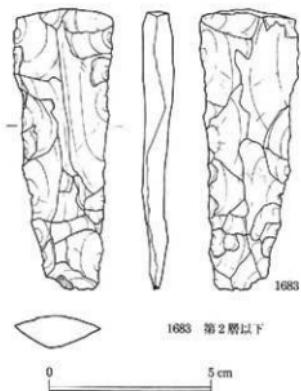


図140 96-3区 打製石器

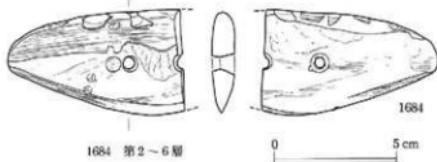


図141 96-3区 磨製石器

縄文土器 図138-1663～1665の3点は第7層出土。いずれも縄文時代晚期後半の刻目突帯文土器の小片である。口縁部下に断面三角形の突帯が貼付され、1663はD字形に、1664・1665はO字形に刻みが施される。1664の口縁はわずかに波状になっている。

第4節 石器

石器は第2層から第6層までみられる。サヌカイト製では、石剣1点、石鐵片1点、石核や剝片など66点、他の石材の磨製石器などが13点、合計81点出土した。第4層ではサヌカイト製の石核・剝片が25点集中していたが、出土状況に特徴的なことはない。

打製石器 成品として図示できるものは、図140-1683の石剣のみ。基端部にわずかながらも原礫面が残っている。32.0gをはかる。この石剣片は第2層以下の側溝からの出土で、層位から時期は確定できない。これ以外のサヌカイトは、石核は少數で、ほとんどが剝片である。

磨製石器 図141-1684は外縁刃の石庖丁である。比較的厚みがある。A面には紐穴をもうひとつ穿とうとした窪みがある。現存率70%と推定され、34.8gをはかる。泥岩製。これもセクションベルトからの出土で層位が確定できない。他に砥石と考えられる石器が約5点、敲打痕などのある敲石・擦石の類が数点ある。

第5節 その他の遺物

土製品 現代の瓦が第1層から1点出土。土器片を転用したと考えられる土製円板が、第4層、第5層、第5層、第6層落込み3と落込み4などから、合計13点検出された。

木片 第2層から8点と第6層からも出土した。いずれにも加工痕はない。

自然遺物 骨片らしいもの1点が第2層から、種子1個が第7層から出土した。

焼石・焼土 焼土5点が第5層から、焼石2個が第6層から出土した。その他、自然石も少なからず調査時に出土したが、使用痕や加工痕のないものは取り上げていない。

第6節 小結

96-3区周辺では、隣接する前々年度調査の94-1区から比較的多くの上器類が出土しており、さらに30m程しか離れていない95-2区からも弥生土器などが大量に出土していた。そのため96-3区でも、154m²と小面積ではあったが相当量の遺構や遺物の出土を予想し、特に慎重に調査を進めた。

その結果、合計7面を調査し、第3面で畦畔状の土変わり1条、第5面で落込み1か所、第6面で落込み3か所を検出した。

遺物は上述したような種類のものが、総点数約6300点にのぼった。その大半は弥生土器であったが、後期の弥生土器はみられず、時期の判明するものとしては、前期、ついで中期が多くかった。調査した最下層の第7層からは、3片ではあるが縄文時代晚期の土器を検出した。

これら遺構・遺物の種類や数量、さらに土層観察の結果からすると各調査面の時期と性格は、第1面は近世以降の堆積土中、第2面は古代～中世の面、第3面は条里制施行以降の水田面、第4面と第5面は弥生時代前～中期の面、第6面は弥生時代前期の面、第7面は縄文時代晚期～弥生時代前期の洪水砂上面と考えられる。

第7章 田井中遺跡95-1区の調査成果

第1節 層序

本調査区は他の調査区とは異なり、四方すべてに鋼矢板を打設せず、北辺のみ法面で処理した。この法面を土層観察用にあてたが、機械掘削完了後幾度かあった豪雨による調査区の冠水、さらにその後の記録的な日曜日そのため、土層観察が不可能となった。そこで埋め戻しに先立ち、部分的に重機による断面清掃を行った。よって他の調査区と異なる断面図を提示することとする。

調査前の地盤高は約T.P.+11.3mで、直前まであった施設に伴うコンクリート基礎などを撤去するため、その直下約1.3mを機械掘削した。それは図142中の①～⑧層までに該当する。①層は5Y6/3オリーブ黄色シルトで、調査区隅わずか40cm程度残り、約40cm堆積する。②層は層厚約40cmの2.5Y5/4黄褐色シルト質土、③は層厚20cm前後の2.5Y5/3黄褐色シルト、④層は層厚10数cmをはかる2.5Y5/2灰黄色シルトである。さらに⑤層は5Y4/1灰オリーブ色シルト質土で、層厚20～30cm堆積し、断面ではここまで擾乱が及ぶ。また本層上面には、5Y7/3浅黄色砂が踏み込み状に観察できる。⑥層は5Y4/4暗オリーブ色シルト質土が約20cm、続く5Y4/3暗オリーブ色シルト質土が約10cmある。なおこの両層の間には5Y7/3浅黄色砂がごく薄く部分的に堆積する。⑦層は、あたかも⑥層をベースとした遺構状を呈する7.5Y5/2灰オリーブシルト質土で、層厚約30cmをはかる。

第1層は7.5Y5/2灰オリーブ色粘土で、平均40cm程度堆積する⑨層が該当し、第1面はこの層を基盤とする。第1層出土遺物は、磁器2点、瓦器21点、黒色土器B類6点・A類4点、須恵器638点、土師器4343点、弥生土器105点、瓦6点、打製・磨製石器13点、の合計5138点を数える。

第2層は5Y4/2灰オリーブ色砂質粘土の⑩層と砂粒を含む7.5Y4/1灰色粘土の⑪層で、層厚は10数～40cm程度をはかる。出土遺物を列記すると、瓦器1点、須恵器109点、土師器4793点（うち古式22点）、韓式系土器2点、弥生土器321点、サヌカイト類8点、玉類1点の合計5235点である。

第3層は層厚20～40cmの⑫層で、10G4/1暗緑灰色砂質粘土である。この断面から観察できる第3面

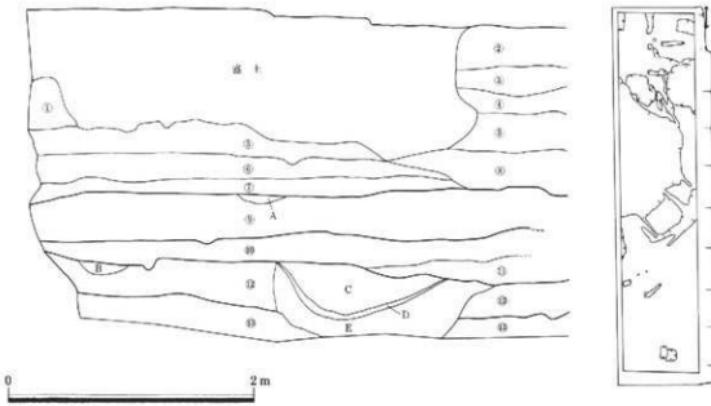


図142 95-1区 北辺断面（部分）

の遺構は、7.5Y4/2灰オリーブ色砂質粘土のB層と、土坑32の一部と思われるC～E層で、C層は10Y3/1オーリーブ黒色粘土、D層は5Y5/2灰オリーブ色粘土、E層は5Y3/1オーリーブ黒色粘土である。出土遺物は、須恵器5点、土師器577点（うち古式1点）、弥生土器2497点（うち前期276点・中期11点）、サヌカイト類26点、磨製石器1点の合計3106点である。

第4層は⑩層が相当し、5GY4/1暗オーリーブ灰色粗砂である。本層は調査限界のT.P.+8.6mに至っても変化はなかった。

第2節 遺構

既述したように、95-1区では4時期の遺構面を確認した。第1面は隣接する財八尾市文化財調査研究会調査地（TN92-10）に対応するものであるが、畦畔など積極的に水田跡とみなしうる遺構は検出できなかった。第2面は落込み1ヶ所、溝9条、土坑2基、ピット9個を検出した。第3面は当調査区で唯一積極的な集落活動をみいだした遺構面で、溝4条、掘立柱建物2棟、土坑9基、ピット25個からなる。しかし第4面になると、溝2条、土坑12基、ピット14個を数える程度で、後述する96-2区とは著しい対照をなす。

第1面（図143） 調査区西端T.P.+9.5m、同東端T.P.+9.8mと、西側に向かって緩やかに傾斜する遺構面である。平面精査したが、畦畔や溝などの遺構は確認できなかった。調査区両端にある擾乱は、第4面まで及ぶもので、調査区中央やや東寄りにもコンクリート製基礎杭が、平面円形に打設されていた（図版57参照）。調査区東端の方形擾乱は旧軍時代の下水用涵溝（会所）と考えられるが、その他はいずれも自衛隊関連の施設に伴うものだろう。

第2面（図143） T.P.+9.4～9.5mのはぼ水平の遺構面であるが、その大半が不定形な遺構である。

落込み1は調査区のほぼ中央で検出した凹地で、本来は調査区南側に展開するものと思われる。調査区内での最大幅は約29m、南北には約12mの台形を呈し、深さ約50cmをはかる。埋土は2.5GY4/1暗オーリーブ灰色粘土である。この落込みの両側に不規則な数条の溝が接していること、砂質の強い当遺構面のベース層を考慮すると、大きな「水溜まり」を想定することも可能である。出土遺物には須恵器81点、土師器1349点、韓式系土器44点、弥生土器24点があるが、いずれも細片である。

第2面で検出した溝9条の大半は落込み1に接し、断面形はいずれも「U」字形を呈する。溝2は検出長4.3m、幅1.3m、深さ約20cm、埋土は2.5GY4/1暗オーリーブ灰色粘土、出土遺物には須恵器3点、土師器34点、弥生土器36点がある。

溝3は全長4.7m、幅70cm、深さ20cm、埋土は10GY3/1暗緑灰色粘土で、須恵器1点、土師器31点が出土した。

溝5は一部擾乱に切られているが、全長約10.5m、最大幅1.7m、深さ約20cmで、埋土は10Y5/1灰色粘土、須恵器4点、土師器72点が出土した。

溝12は全長2.2m、幅40cm、深さ10cmで、埋土は7.5Y4/1灰色シルト質土、出土遺物はない。

溝13は全長約6m、最大幅1.5m、深さ約40cmをはかり、埋土は2.5GY3/1暗オーリーブ灰色粘土、出土遺物はない。

溝14は検出長約12m、最大幅約3m、深さ約20cmで、埋土は2.5GY4/1暗オーリーブ灰色粘土、須恵器2点、土師器277点、弥生土器12点、剝片2点が出土した。

溝16は全長約5m、幅30cm、深さ約10cm、埋土は10Y4/1灰色粘土、土師器11点出土した。

溝29は全長4.3m、幅80cm、深さ20cmで、埋土は10Y4/2オリーブ灰色粘土で、土師器37点出土。

土坑4は一部を側溝に切られるが、長辺3.5m以上、短辺2.5m、深さ約30cmをはかり、2.5Y4/2灰オリーブ色粘質土を埋土とする。出土遺物には須恵器11点、土師器1736点、弥生土器40点、剝片2点、玉類2点があるが、残念ながら完形の土師器壺2点を含むかなりの量の土器は、側溝掘削時に出土した。

土坑28は、長辺1.6m、短辺1mの長方形を呈し、深さは約10cmをはかる。埋土は7.5Y4/1灰色シルト質粘土で、出土遺物はない。

ピットは9個検出した。うちピット6は直径70cm、深さ10cmをはかり、埋土は2.5GY5/1オリーブ灰色粘土である。土師器3点のほか二枚貝1点が出土した。

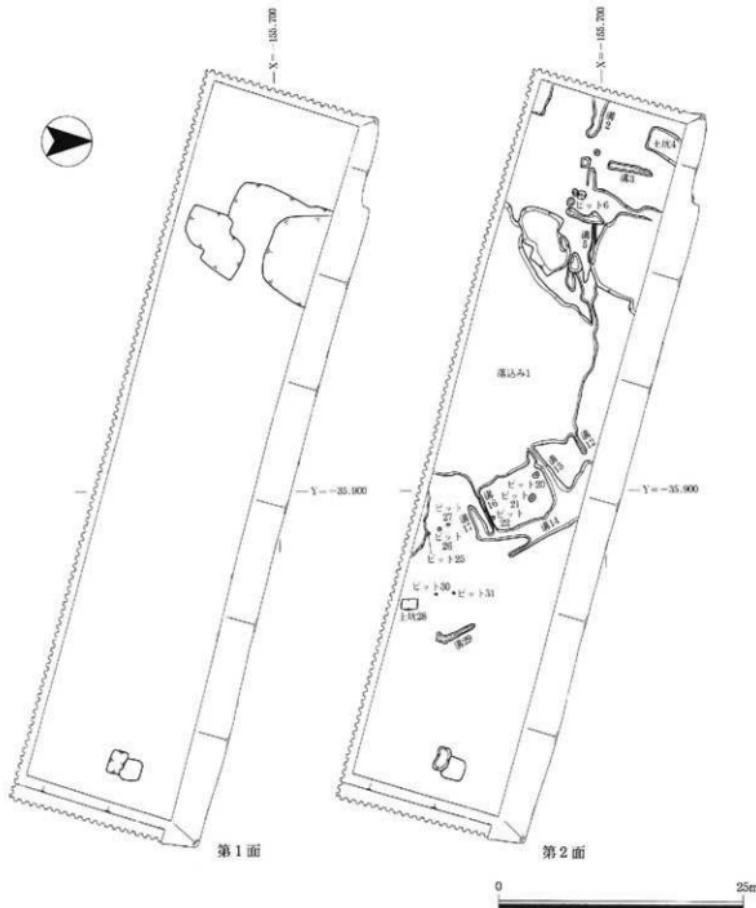


図143 95-1区 第1面・第2面

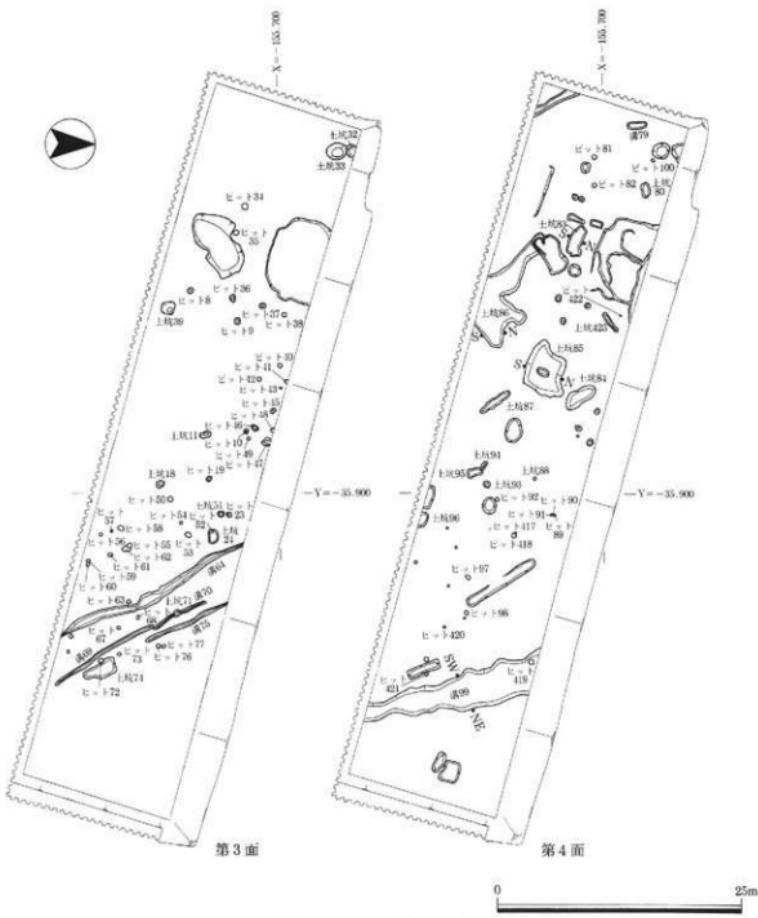


図144 95-1区 第3面・第4面

ピット20は長径60cm、短径50cmの不整円形を呈し、深さは約20cmをはかる。埋土は上層に7.5Y5/2灰オリーブ色シルトが、下層に10Y4/1灰色粘土が堆積する。土師器が4点出土した。

ピット21は長径80cm、短径60cm、深さ10cmをはかる。埋土は7.5Y5/2灰オリーブ色シルトで、出土遺物はない。

第3面(図144) T.P.+9.2~9.3mのはば水平な遺構面である。建物2棟をはじめ、建物主軸とほぼ平行する溝や土器を廃棄した土坑など、95-1区では最も「生活臭」のする遺構面である。

溝64は検出長約21m、最大幅1.5m、深さ約20cmをはかり、南北とも調査区外に延びる。5Y3/1オリーブ黒色粘土を埋土とし、土師器88点と弥生土器1点が出土した。

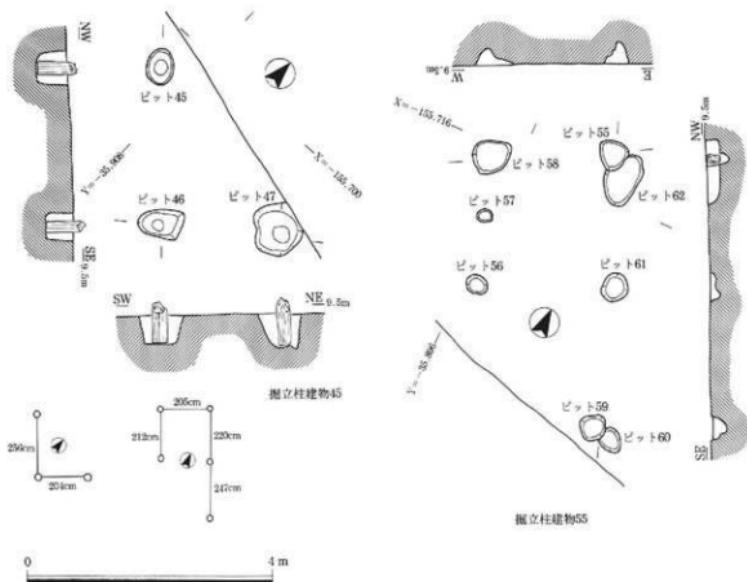


図145 95-1区 第3面掘立柱建物45・55

溝69および溝70は途切れてしまったので別造構と認識したが、本来は1条の溝だった可能性もある。溝69は全長約12m、幅約50cm、深さ約20cmの規模で、7.5Y3/1オリーブ黒色砂混じりシルトを埋土とする。土師器17点が出土した。溝70は全長約6m、幅約30cm、深さ約10cmで、埋土は2.5GY4/1暗緑灰色シルトである。

溝75は検出長9m、幅約40cm、深さ約10cmをはかり、北側調査区外に延びる。埋土は7.5GY3/1暗緑灰色粘土で、出土遺物はない。

建物45は調査区北辺中央部にて検出した掘立柱建物で、1×1間分を確認したが、さらに調査区外に広がるであろう。建物を構成する3個のピットの大きさは次の通りである。ピット45は長径60cm、短径40cmの楕円形を呈し、深さ50cmをはかる。ピット46は長径80cm、短径50cmの不整楕円形で、深さ約40cmである。ピット47は直径約80cmの不整円形で、深さ約60cmをはかる。埋土はともに7.5Y6/2灰オリーブ微砂混じり粘土中に、7.5Y3/1オリーブ黒色シルトがブロック状に混じる。これらのピットには、いずれも多角形に面取りした柱根が良好な状態で遺存したが、その先端部は第2層掘削中に姿を現したもの、腐食によって先細りしていた。

建物55は調査区南辺中央部で、1×2間分を検出した。さらに調査区外に延びる可能性がある。ピットは8個検出したが、建物45と比較するといずれも小規模で浅く、2ヵ所で重複が認められる。埋土はピット60・62が7.5Y4/2灰オリーブ色シルトで、他はすべて7.5Y3/2オリーブ黒色シルトである。

土坑は大小合せて9基検出した。土坑32は調査区北西隅、土坑33のすぐ北側に接して検出した。層序でも記したように調査区北側に広がるようで、長楕円形を呈していたものと思われる。規模は長径2m

以上、短径2.2m、深さ40cm以上である。出土遺物は完形品の土師器高壺・壺のほか、土師器90点、弥生土器5点、剝片1点が出土した。

土坑33は長径2m、短径1.7m、深さ50cmをはかり、埋土は10Y3/1オリーブ黒色粘土である。出土遺物はない。

土坑39は調査区南辺中央部で検出したもので、平面 1.3×1.5 mの長方形を呈し、深さ約20cmをはかる。2.5GY3/1暗オリーブ灰色粘土を埋土とし、出土遺物には土師器2点がある。

土坑11は調査区中央で検出した長径1.1m、短径70cm、深さ約10cmをはかるもので、埋土は7.5Y4/2灰オリーブ色シルトである。出土遺物は土師器1点がある。

土坑18も調査区ほぼ中央部で検出した。平面形は直径約70cmの円形を呈し、深さ約10cmをはかる。埋土は2.5GY4/1暗オリーブ色シルト質土で、出土遺物はない。

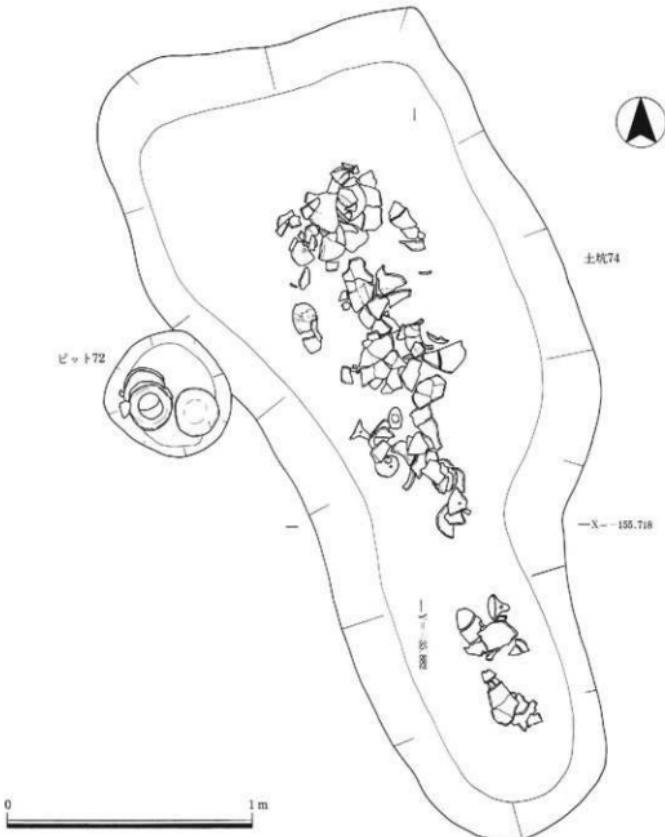


図146 95-1区 第3面ピット72・土坑74

土坑24は調査区北辺中央部付近で検出したもので、長径1.5m、短径1mの梢円形を呈し、深さ約10cmをはかる。埋土は2.5GY4/1暗オリーブ灰色シルト質粘土で、炭化粒を含む。土師器136点、弥生土器1点を出土した。

土坑71は溝70を切ってつくられた、50×60cmの規模を有する方形土坑で、深さ10cmをはかる。出土遺物はない。

土坑74は長辺3.4m、短辺1.6mをはかる不定形土坑で、深さは10cm程度の浅いものである。埋土は5Y3/1オリーブ黒色粘土で、炭化粒を含む。この土坑からは比較的原形を保った状態で数個体分の土師器甕や高杯が出土した。それら含めて出土遺物は須恵器1点、土師器433点を数える。出土状態からみて、当遺構面の廃棄土坑のひとつと考えることができる。

ピットは25個を検出した。ピット42は調査区北側中央部にて検出した、長径50cm、短径40cm、深さ20cmをはかる梢円形のピットで、5Y3/2オリーブ黒色粘土を埋土とする。ピット内から小型の土師器壺が2個体出土した。

ピット51も調査区北側中央部で検出したもので、径60cm、深さ30cmの円形を呈する。埋土は7.5Y3/1オリーブ黒色粘土である。ピット内から叩き割られた土師器長胴甕1個体分と、その上に土師器壺の下半部片が置かれた状態で出土した。何らかの祭祀行為を意味するものか。

ピット72は調査区東半部、土坑74を一部切ってつくられたもので、直径50cmの不整円形を呈し、深さは20cmをはかり、黒色粒の混入するN2/1黒色粘土を埋土とする。中から土師器高杯3個体、および土師器甕の上半部分1個体が出土した。高杯は完形品も含まれるが、杯部のみや脚部欠損したものがあり、それらが置かれたような状態で出土していることから、これも何らかの祭祀に伴うものとみなせよう。

以下いさか煩雑に記述するものは、遺物の出土状態や埋土などの点で、特筆すべき特徴は有しない。出土遺物はいずれも細片である。順次西側から記載すると、ピット34は直径70cm弱、深さ約20cmの円形で、埋土は10GY3/1暗緑灰色シルトで、土師器1点出土。ピット35は長径70cm、短径40cmの梢円形を呈し、深さ10cmをはかる。埋土は7.5Y3/1オリーブ黒色粘土で、出土遺物には土師器2点がある。ピット38は直径50cmの円形で、深さは10cmをはかる。埋土はN3/0暗灰色シルト。ピット37は径60cmの不整円形で、深さ50cmをはかり、埋土は5BG4/1暗青灰色シルトで、弥生土器6点が出土。ピット36は長径80cm、短径60cm、深さ50cmで、5Y3/1オリーブ黒色粘土を埋土とする。弥生土器3点が出土。ピット8は一辺50cmの方形を呈し、深さは10cmをはかる。7.5Y3/1オリーブ黒色粘質シルトに10Y5/2オリーブ灰色シルトをブロック状に含む。土師器3点出土。ピット9は長径80cm、短径60cmの梢円形を呈し、深さ30cmをはかる。埋土はピット8と同じ。土師器7点、弥生土器1点出土。ピット40は径50cmの円形を呈するもので、深さは10cmをはかる。埋土は10Y4/1灰色シルトで、出土遺物はない。ピット41は径40cmの円形で、深さ10cm、埋土は7.5Y3/1オリーブ黒色シルト。出土遺物はない。ピット43は径30cm弱の円形で、深さは約10cm。埋土には7.5Y3/1オリーブ黒色シルト、弥生土器3点出土。ピット48は調査区端に一部かかった状態で検出し、推定径50cm、深さは約10cmをはかる。出土遺物は土師器1点、ピット10は長径60cm、短径50cm、深さ10cmをはかり、7.5Y3/1オリーブ黒色シルトを埋土とする。土師器4点出土。ピット49は径20cmの不整円形を呈し、深さは約20cm。埋土は7.5Y3/1オリーブ黒色シルトで、遺物は出土していない。ピット19は、長径60cm、短径40cmの不整梢円形を呈し、深さは10cmをはかる。2.5GY4/1暗オリーブ灰色シルト質粘土を埋土とし、土師器5点出土。ピット23は長径60cm、短径50cm、深さ10cmをはかる梢円形ピットで、10Y4/2オリーブ灰色シルト質粘土に7.5Y6/2灰オリーブ色シルトが粒状